太宰府市の文化財　第 92 集

大 宰 府 条 坊 跡 33

－第 249 次調査－

平成 19 年

太宰府市教育委員会

249SX001 空中写真（上が南西）

249SB010 空中写真（南東から）

序

本報告書は、共同住宅建設に伴い太宰府市朱雀二丁目地内（字般若寺）にて、平成17年度に実施した大宰府条坊跡第249次調査の報告書です。

調査地域は、旧字名が物語るように古代寺院としての般若寺が所在した地として、現在も塔跡と考えられる心礎が残り、大宰府条坊のみならず寺院史を考える上で重要な地域にあたります。今回の調査地は、般若寺跡塔心礎の南、約100mほどの位置にあり、般若寺跡の寺域ならびに周辺域における土地利用状況を解明する上で貴重な成果が期待される地点になります。調査の結果、奈良時代に施工されたと考えられる掘立柱建物や道路、さらには平安時代前期創業の窯跡が確認されるなど、般若寺ならびに大宰府条坊の有様を考える上で重要な所見を得ることができました。

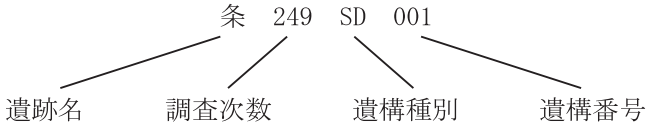
本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、当該調査に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成19年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例　言

1. 本書は、太宰府市朱雀２丁目９－47外３筆で行った大宰府条坊跡第249次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、太宰府市教育委員会の監理の下（担当中島恒次郎）、国際航業株式会社に委託し、同社主任研究員の伊藤敬太郎ならびに土岐耕司が担当・補助し、安全監理を川口洋次郎が担当した。
3. 発掘調査においては、小田富士雄（福岡大学名誉教授）、舟山良一、石木秀啓（大野城市教育委員会）、小鹿野亮、吉田高穂（筑紫野市教育委員会）、狭川真一（(財) 元興寺文化財研究所）、河合英夫、香川達郎、伊東甚吉（㈱玉川文化財研究所）の各氏、その他の各位にご指導・ご教示をいただいた。
4. 遺構の実測は、各担当者が行った。なお今回掲載した全体図については、調査した遺構面との関係を踏まえて、整理段階で編集したものを提示している。
5. 調査時の測量は、各担当者が行った。
6. 遺構実測図および遺構配置図は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としている。したがって、図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（Ｇ．Ｎ．）を指している。
7. 遺構の写真撮影は各担当者が行い、空中写真は有限会社空中写真企画と国際航業株式会社が行った。
8. 遺物の写真撮影は、利屋勉が行った。
9. 遺物の実測は伊藤敬太郎、岡めぐみ、沖野実が行った。
10. トレースは遺構図を上記担当者の他、長尾聡子、安村健、大山祐喜、鳥越道臣、土岐夏海が、遺物を白石明子、高木恵が、ともにIllustrator 9.0を使用して行った。
11. 作表は各担当者の他、一部の入力を白石明子、高木恵が行った。
12. 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、遺跡名、調査次数を略するものもある。



13. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

土器　『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第７集　太宰府市教育委員会　1983年
『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡編－』太宰府市の文化財第10集　太宰府市教育委員会　1992年
『水城跡２－第28・30・31・34次調査－』
太宰府市の文化財第67集　太宰府市教育委員会　2003年

陶磁器　『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年

瓦　「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館2002年

分類は中島の指導の下で実施し、各担当者が補助した。

14. 自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。なお、本書の体裁に整えるため、編集者が内容を損なわないよう一部編集した。
15. 本書の執筆と編集は伊藤敬太郎が行ったが、Ⅳ．４．瓦以外の遺物とⅥ．３．炉跡群と冶金関連遺物は岡めぐみ、自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が担当した。
16. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

↑出現　▌増加　¦減少　　2000.2補訂

紀年銘	AD	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式(型式の上限) 灰釉	国産陶器型式(型式の上限) 緑釉	標識磁器	準標識磁器
		I A, B					
	700	II					
	725	III					
	750	IV					
⑥		V		猿投O-10 井ヶ谷IG-78	長門？・畿内	白磁Ⅰ類 越州窯系青磁Ⅰ, Ⅱ類	唐三彩・二彩 絞胎
	800	VI A	(A古)	黒笹K-14	長門・洛北・(洛西)・(黒笹K-14)	長沙窯系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	
	825	VI B		篠岡S-4 黒笹K-90	洛西 黒笹K-90		
	850	VII	A				青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器
	900	VIII					
①	925		(A新)				
	950	IX		虎渓山1 (折戸O-53)	近江		
	1000	X	B	新戸O-53		越州窯系青磁Ⅲ類 白磁Ⅺ類	
	1050	XI		東山H-72 (丸石2)			
②	1100	XII A				白磁椀Ⅱ, Ⅲ, Ⅴ1～3, Ⅵ, Ⅻ, XIII類 皿Ⅱ, Ⅳ, Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁0類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ類 青白磁
		XII B	C	丸石2 百代寺 東山H-105 篠岡S-1			
		XIII					白磁鉢Ⅲ類, 椀XIV類
	1150	XIV				龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1～4, 6 皿Ⅰ類 同安窯系青磁椀Ⅰ～Ⅳ, 皿Ⅰ類	白磁椀Ⅷ, Ⅴ-4, 皿Ⅲ類増加
	1200	XV	D				白磁椀Ⅶ, 皿Ⅷ-1類
		XVI	E			龍泉窯系青磁椀Ⅱ-a, b類	白磁皿Ⅷ-2類
③	1230	XVII				龍泉窯系青磁Ⅲ類 白磁Ⅸ類	
	1250	XVIII	F				龍泉窯系青磁Ⅱ-c類 白磁Ⅹ類 黒釉陶器
④	1300	XIX					
⑤	1330					龍泉窯系青磁Ⅳ類	
	1350	XX	G				白磁B, C類
⑦	1450						安南鉄絵
⑧	1500						

紀年銘資料

① AD.927　延長5年, 大宰府74次SD205A溝
② AD.1091　寛治5年, 平安京左京4条1坊SE8井戸
③ AD.1224　貞応3年, 大宰府33次SD605溝
④ AD.1304　嘉元2年, 大宰府109.111次SD3200溝
⑤ AD.1330　元徳2年, 大宰府45次SX1200池
⑥ AD.784　延暦3年, 長岡京102次SD10201溝
⑦ AD.1459・1465　長禄3・寛正5年, 福岡市井相田CⅡ・SG16池
⑧ AD.1501　文亀元年, 大宰府70次SD1805溝
⑨ AD.1265　文永2年, 博多62次713土壙

文献

① 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
② 田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975平安京調査会
③ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥ 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦ 福岡市教育委員会「井相田C遺跡Ⅱ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
⑧ 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨ 福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

目　次

Ⅰ．位置と環境 …… 1

Ⅱ．調査組織 …… 4

Ⅲ．調査および整理の方法 …… 6

Ⅳ．調査の概要 …… 6
1．調査経過 …… 6
2．層序 …… 7
3．遺構 …… 14
(1) 第１面遺構（瓦窯・瓦窯関連遺構・炉跡・溝・土坑） …… 14
(2) 第２面遺構（掘立柱建物・道路・溝・土坑） …… 22
(3) 第３面遺構（掘立柱建物） …… 25
(4) 第４面遺構（土坑） …… 28
4．遺物 …… 29
(1) 第１面遺構出土遺物（瓦窯・瓦窯関連遺構・溝・土坑・その他の遺構） …… 29
(2) 第２面遺構出土遺物（掘立柱建物・溝・土坑・その他の遺構） …… 48
(3) 第３面遺構出土遺物（掘立柱建物） …… 54
(4) 第４面遺構出土遺物（土坑） …… 54
(5) 土層出土遺物 …… 54

Ⅴ．　自然科学分析 …… 65

Ⅵ．　まとめ …… 69
1．遺構の変遷 …… 69
2．249SB010 と 249SF015 …… 69
3．炉跡群と冶金関連遺物 …… 70
4．瓦窯 SX001 について …… 71
5．瓦窯 SX001 の生産瓦と般若寺跡の瓦について …… 71

付表 …… 83
遺構番号台帳 …… 83
遺物計測表 …… 88
出土遺物一覧表 …… 95

写真図版
遺構・遺物

CD-ROM
遺構・遺物・自然科学分析写真／丸・平瓦全点観察表／
表３～８　丸・平瓦各種表

Ⅰ．位置と環境（図１・２）

太宰府市は福岡平野の南東部に位置する。北に四王寺山脈、東に高尾丘陵とその奥に愛嶽山から宝満山へと連なる三郡山地を控え、幅２㎞程の二日市低地帯を挟んで西は牛頸低山地に囲まれた盆地状の平野を中心に所在する。

今回報告する大宰府条坊跡第249次調査（図1-39）は、高尾丘陵南端部に位置する標高45～50ｍ程の阿蘇４火砕流台地（約９万年前に堆積、般若寺丘陵と呼ぶ）の南裾にあたる。『太宰府市史　環境資料編』の付図「太宰府市地形分類図（1947年）」によれば調査地は土石流扇状地に分類されており、北と西が丘陵になる幅30ｍ程の狭小な谷地形に位置し、地表面の標高は約41ｍである。

次に本報告と関わりのある古墳時代、古代を中心に太宰府市域の歴史的概要を述べる。

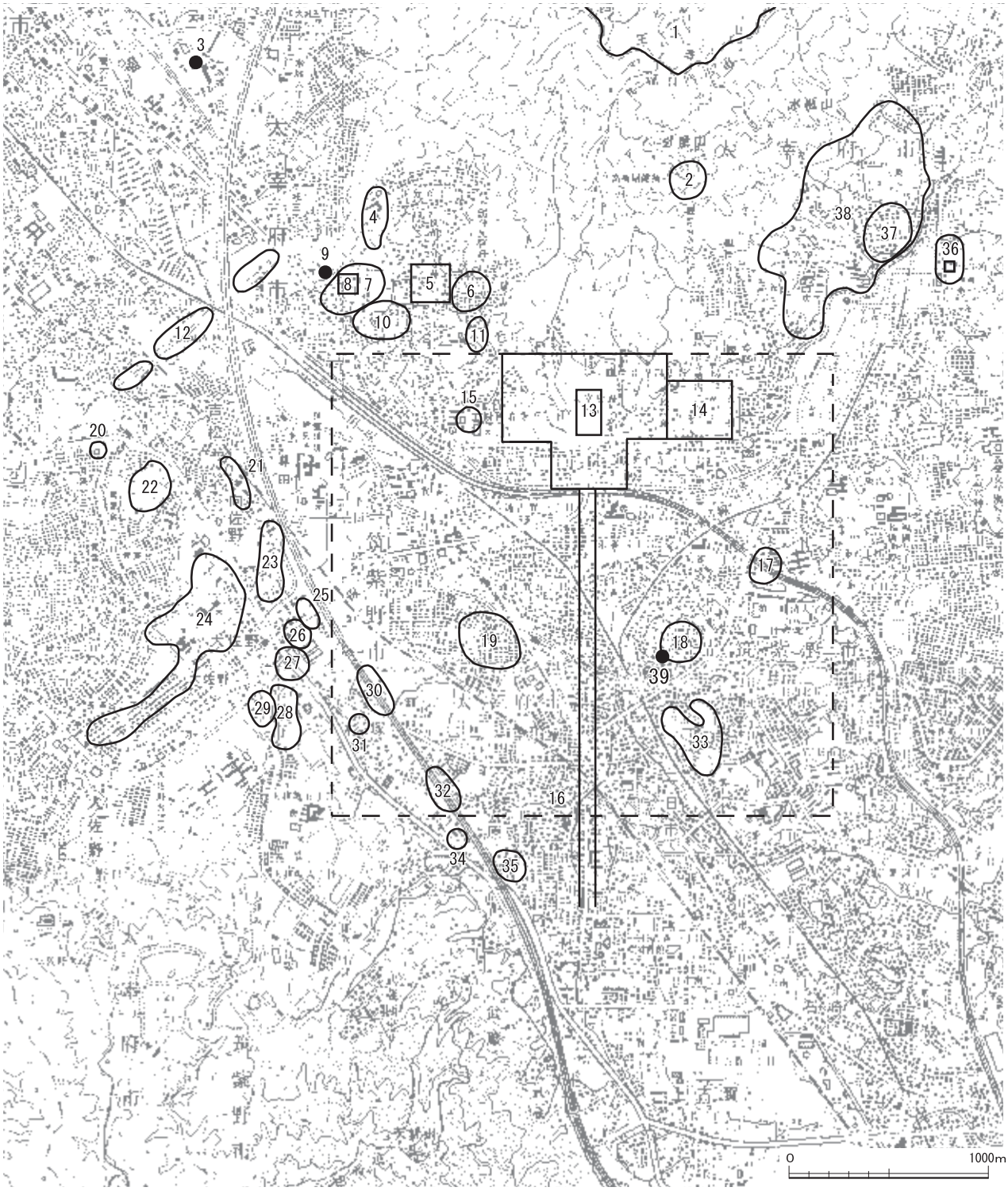
古墳時代には、宮ノ本遺跡（図1-24）の所在する丘陵で、内部主体が割竹形木棺で鏡を副葬する古墳など、前期を中心とした古墳群が営まれている。５世紀後半頃には帆立貝形の前方後円墳である成屋形古墳（図1-3）や６世紀後半の陣ノ尾古墳（図1-9）などが市北西部に築かれるが平野部で集落などの遺構が確認されることは少なく、般若寺丘陵およびその周辺でも遺構、遺物はまとまっては確認されていない。福岡平野と筑後平野の大規模集落の狭間に位置したことが窺える。

660年代になると白村江での敗戦により国際的緊張が高まり、狭間な平野である立地条件をもとに水城（図1-12）、大野城（図1-1）などの軍事防衛施設が置かれた。さらには、西海道九国二島を統括し、外交機能を有した地方最大の官衙「大宰府」が設置される。大宰府政庁跡（図1-13）は、1968年からの発掘調査により、掘立柱建物によって構成される第Ⅰ期（７世紀後半）、朝堂院形式の建物配置に変わる第Ⅱ期（８世紀前半）、天慶四年（941）の藤原純友による焼き討ちの後、再建された第Ⅲ期（10世紀中頃）に時期区分され、11世紀後半から12世紀前半には機能を停止すると理解されている。

大宰府政庁の前面には、都城のように都市計画に従った計画地割を持ついわゆる「大宰府条坊」（図1-16）という古代都市が作られた。鏡山猛は、「観世音寺文書」の記載内容や政庁の礎石、地割り等の検討から１区画を１町四方とする南北二十二条、東西十二坊に復元している。調査地は、鏡山復元案によるところの左郭十四条四坊に位置する。一方、発掘調査による条坊の確認作業も進められており、政庁第Ⅱ期（奈良時代）の大宰府条坊としては、路面幅約36ｍの中央大路（推定朱雀大路）を中心に、幅３ｍ程の南北路や東西路が複数箇所で確認されている。その位置関係から、約90ｍ間隔で道路を設定したとする90ｍ条坊案が提出されているが、いまだに確定をみていない。

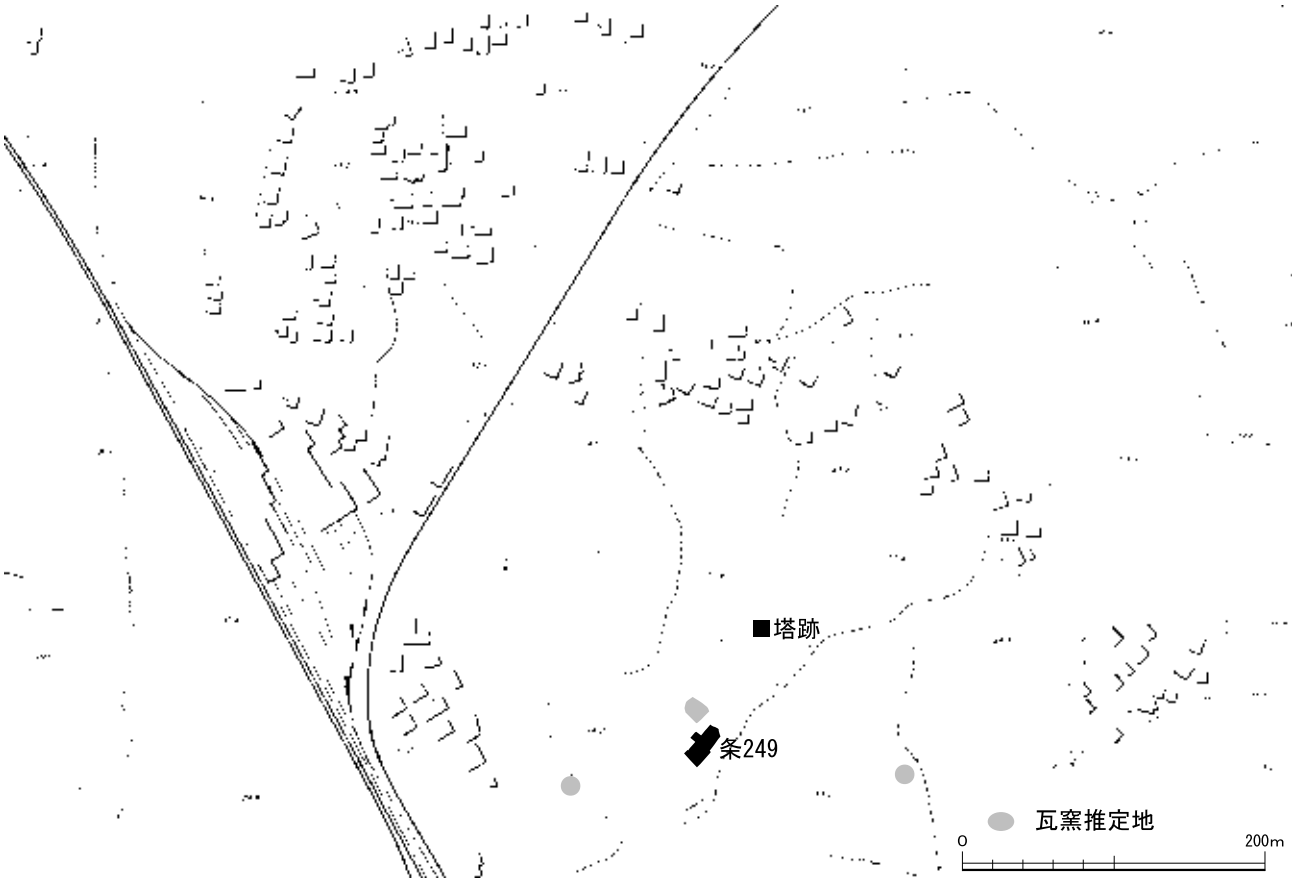
大宰府の古代寺院としては、政庁の東側に学校院を中に挟んで府の大寺と呼ばれた観世音寺（図1-14）が配置され、後背の大野山中には四王院跡（図1-1）がある。大宰府条坊内には般若寺跡（図1-18）と杉塚廃寺（図1-31）、条坊の北辺には、筑前国分寺跡（図1-5）、筑前国分尼寺跡（図1-8）、南辺には塔原廃寺（図1-34）がある。また、宝満山には竈門山寺が所在した。これらの内で、般若寺跡は調査地のある般若寺丘陵に所在する。九州歴史資料館と太宰府市教育委員会により開発にともなう調査が実施された。成果としては、基底部の１辺が11.9ｍになる瓦積み塔基壇と、それに先行する東西３間×南北１間以上の身舎の三面に庇が付く東西５間×南北２間以上の掘立柱建物がある。また、現存する塔心礎も原位置から動いていることが確認された。その他、丘陵の北側で寺域の北限と想定される柵列が確認された程度で、伽藍配置や寺域の規模は確定していない。出土瓦としては、老司式軒瓦や鴻臚館式軒瓦があり、造寺にともなう政庁や観世音寺からの支援を想定させる。

この他、1979年の九州歴史資料館による調査時に周辺の聞き取り調査が行われており、般若寺丘陵の南側に数箇所の瓦窯が存在することが指摘された（図２）。今回の調査地はそのうちの１箇所に該当する。



1. 大野城跡（四王院跡）
2. 岩屋城跡
3. 成屋形古墳
4. 陣ノ尾遺跡
5. 筑前国分寺跡
6. 辻遺跡
7. 国分松本遺跡
8. 筑前国分尼寺跡
9. 陣ノ尾古墳
10. 国分千足町遺跡
11. 御笠団印出土地
12. 水城跡
13. 大宰府政庁跡
14. 観世音寺
15. 遠賀団印出土地
16. 大宰府条坊跡（破線内）
17. 君畑遺跡
18. 般若寺跡
19. 市ノ上遺跡
20. 神ノ前窯跡
21. 原口遺跡
22. 篠振遺跡
23. 前田遺跡
24. 宮ノ本遺跡
25. 雛川遺跡
26. フケ遺跡
27. 尾崎遺跡
28. 脇道遺跡
29. 殿城戸遺跡
30. 剣塚遺跡
31. 杉塚廃寺
32. 唐人塚遺跡
33. 峯遺跡
34. 塔原廃寺
35. 桶田山遺跡
36. 太宰府天満宮（安楽寺跡）
37. 浦城跡
38. 原遺跡
39. **大宰府条坊跡第249次調査**

図１．太宰府市とその周辺の遺跡　(1/30,000)



旧地形図（昭和23年）

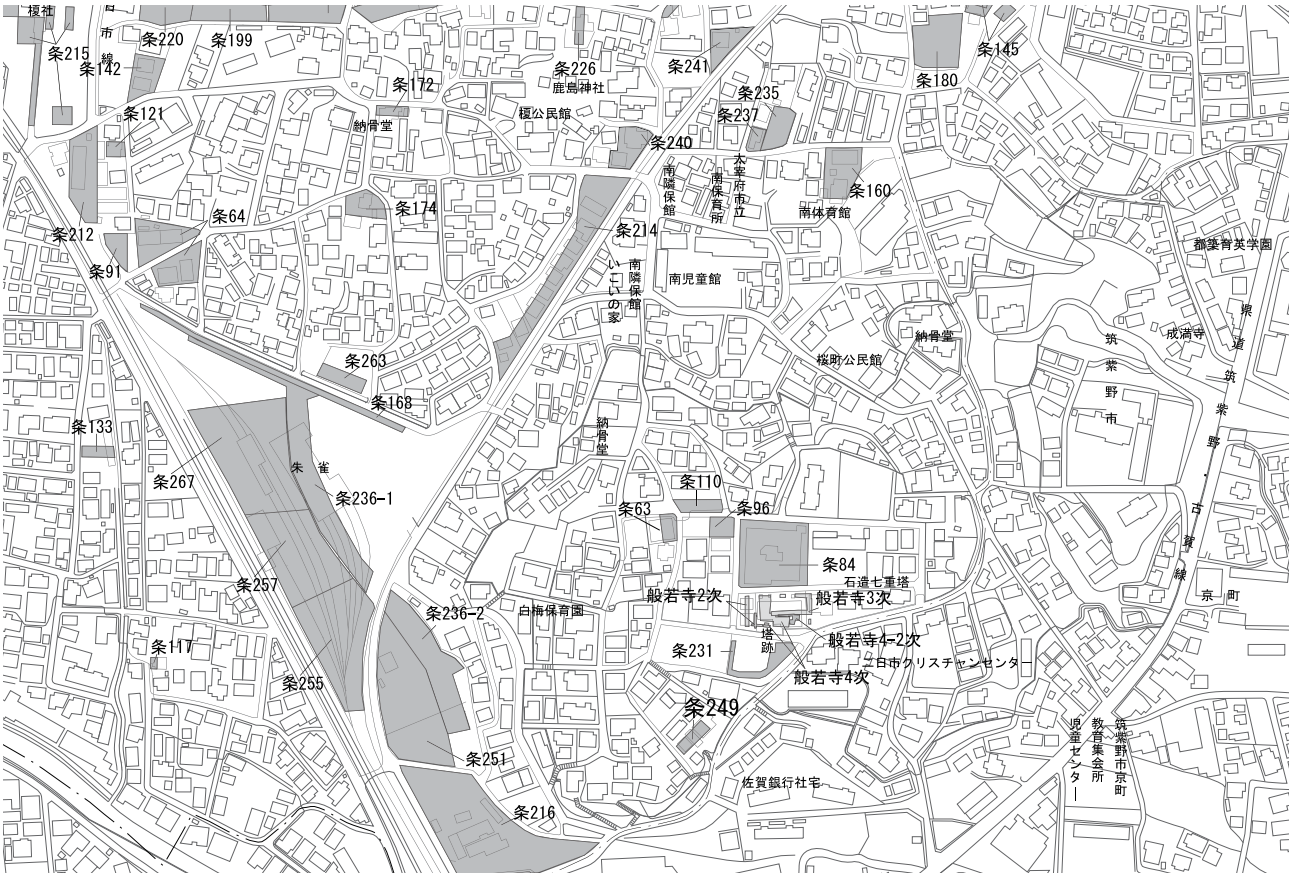


図２．第249次調査地位置図および旧地形図（1/5,000）

条○次・・・ 大宰府条坊跡第○次調査（太宰府市教委 調査分）
史○次・・・ 大宰府史跡第○次調査（九州歴史資料館 調査分）
南○次・・・ 御笠川南バイパス第○次調査（福岡県教委 調査分）

中世以降、政治的機能や都市の中枢は、観世音寺や太宰府天満宮（図 1-36）を中心とした太宰府市の東および北東部へと移っていった。般若寺跡も、出土瓦をみる限り平安時代には廃絶していたようである。塔跡の東方 120 mの位置には、鎌倉時代と推定される花崗岩製の七重塔があるが、その来歴は不明である。

江戸時代になると『筑前国続風土記』、『太宰府旧蹟全図』などに石塔や心礎、土壇などの記録も見られるが、般若寺丘陵は山林もしくは畑地であったようで、この事は明治時代の地籍図からも確認できる。その後、1960 年代になると急速に市街化が進み、現在の景観に近いものになった。

なお、般若寺跡は、平安時代前期の文献である『上宮聖徳法王帝説』裏書に筑紫大宰蘇我日向が白雉五年（654）に孝徳天皇の冥福を祈って「般若寺」を起こし、奈良時代に定額寺になったと記載のある、「般若寺」の候補地との考えがある。この「般若寺」は古く江戸時代から奈良市にある般若寺とされてきたが、福山敏男・田中重久が相次いで筑前説を提唱し、般若寺という字名の残るこの地に蘇我日向の「般若寺」を想定した。それに対して小田富士雄は、般若寺跡の塔心礎や軒瓦の様相から、筑紫野市に所在する塔原廃寺が創建年代にふさわしいと考え、奈良時代に今の般若寺跡に移転したとする塔原廃寺から般若寺跡への移転説を提唱した。一方、塔跡の調査を担当した高倉洋彰らは、遺構、遺物の上から移転を証明するものはなく、般若寺跡と塔原廃寺を別寺とする考え方もある。以上のように『上宮聖徳法王帝説』裏書にみえる「般若寺」の所在については問題を残している。

このように本調査地は、般若寺跡の塔跡から南西に 80 mの位置にあることから、寺域の南限との関係、聞き取り調査で記録された瓦窯の有無、般若寺跡が創建される以前の土地利用の実態についての解明が期待された。

参考文献

鏡山猛　1968『大宰府都城の研究』
九州歴史資料館　1980『般若寺跡　大宰府史跡　昭和 54 年度発掘調査概報別冊』
九州歴史資料館　1988『般若寺跡Ⅱ　大宰府史跡　昭和 62 年度発掘調査概報別冊』
太宰府市史編集委員会　1992『太宰府市史　考古資料編』太宰府市
太宰府市史編集委員会　2001『太宰府市史　環境資料編』太宰府市
太宰府市史編集委員会　2003『太宰府市史　古代資料編』太宰府市
太宰府市史編集委員会　2005『太宰府市史　通史編Ⅰ』太宰府市

Ⅱ．調査組織

発掘調査は平成 17 年度に実施し、その後の整理作業は主として平成 18 年度に行った。したがって調査に伴う組織は、現地調査を実施した平成17年度および、整理作業を主として進めた平成18年度を記す。

調査組織年度別一覧

（平成 17 ／ 2005 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美（～ 6 月 30 日）
		齋藤廣之（ 7 月 1 日～）

	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
	事務主査	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（委託監理担当）
	技術主査	**井上信正（事前調査担当）**
	主任技師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		柳　智子
		長　直信
		松浦　智

国際航業株式会社　文化事業部九州調査事務所

	事業部長	門屋鉄男
	副事業部長	小山規見
	所長	飯田英樹
	研究室長	森醇一朗
	主任研究員	**伊藤敬太郎（調査・整理担当）**
		土岐耕司　（調査・整理担当）
		東園千輝男　　安村　健　　長尾聡子

（平成 18 ／ 2006 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
		吉原慎一（７月１日～）
	事務主査	大石敬介（～６月 30 日）
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（委託監理担当）
	技術主査	井上信正
	主任技師	髙橋　学
		宮崎亮一

技師（嘱託）　　柳　智子
　　下高大輔

国際航業株式会社　文化事業部九州調査事務所
事業部長　　門屋鉄男
副事業部長　　小山規見
所長　　**伊藤敬太郎（調査・整理担当）**
研究室長　　森醇一朗
副室長　　清水宗昭
主任研究員　　**土岐耕司　（調査・整理担当）**
　　東園千輝男　　安村　健　　長尾聡子
研究員　　大山祐喜　　鳥越道臣　　**岡めぐみ（整理担当）**

Ⅲ．調査および整理の方法

調査および整理にあたっては「佐野地区遺跡群Ⅰ」（太宰府市教育委員会　1989『太宰府市の文化財』第14集）、および「太宰府市における埋蔵文化財調査指針」（太宰府市教育委員会　2000年４月作成、2001年９月改正）に準拠した。

グリッド杭は国土座標第Ⅱ座標系（日本測地系）に則って、調査区内を３ｍ方眼で設定し、グリッド名は南からＡ・Ｂ・Ｃ･･･、東から１・２・３･･･とした。遺構確認は３×３ｍの発掘区ごとに行い、発見された遺構は遺構番号（Ｓ－番号）を付与した後、１／100の遺構略測図に平面形と重複関係、土層堆積状況等を記録して出土遺物と整合性を持たせた。遺構実測図は立面図や個別図、土層断面図その他を１／10、１／20で適宜作成し、遺構全体図を１／20で作成した。発見遺構は段落に応じて写真撮影を行い、遺構全体が完掘に至った時点で、調査区全体を上空から写真撮影し記録作業を完了した。

整理作業は、出土遺物の洗浄を行った後、分類を行い台帳に記載し、遺構時期判断の基礎資料とした（巻末「出土遺物一覧表」として収録）。実測対象とした遺物には遺物実測番号（Ｒ－番号）を付し、台帳化した。今次報告する遺構に関しては、調査時の番号（Ｓ－１等）に性格を与えた（SX001等）。

Ⅳ．調査の概要

１．調査経過

今回の調査は共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査であり、大宰府条坊跡第249次調査として実施した。調査対象地は太宰府市朱雀２丁目９－47外３筆に所在し、開発対象面積857.03㎡、調査面積250㎡を測る。

平成16年８月より共同住宅建設に先立ち埋蔵文化財取り扱いの有無に関する問合せが、建物建設会社数社より本市文化財課へなされた。当地は周知の遺跡である大宰府条坊跡に包括され、特に飛鳥期創建と考えられる般若寺跡が近接して存在するなど、極めて重要な地域に位置している。そこで本市文化財課によって、建物建設に先立ち埋蔵文化財の有無ならびに規模を確認することを目的として、平成17年４月19日に確認調査を実施した。その結果、現状地表より下位1.45ｍに遺構が確認され、確認遺構面も２面以上存在することが予想された。その後、工事施工者である㈱エース建設と埋蔵文化財保

存について協議を行った結果、保護法第93条に基づいて提出された施工計画図では、建物建設範囲において遺構破壊の可能性が高いことが判明し、この範囲を発掘調査することで合意した。

発掘調査ならびに整理報告事業を行うにあたって、本市文化財課における当時の緊急発掘調査計画・実施状況等を考慮し、本市教委の体制内に取り込む形で民間調査組織の活用を図るため指名競争入札を行った。その結果、国際航業株式会社と調査整理報告書作成業務委託契約を行い、事業の推進を図った。

現地調査は平成17（2005）年７月25日から計画準備に着手し、８月２日から重機による表土除去作業を開始した。場外に排土置場を確保できなかったこともあり、調査区を南北に二分する反転調査を実施した。前半の南区の調査は10月19日に、後半の北区は12月26日に終了し、翌年１月10日には現地撤収作業を終えた。調査終了後は整理報告作業へと移行した。

調査に関わる事前調整協議ならびに確認調査は井上信正が、調査委託監理は中島恒次郎（両者とも太宰府市教育委員会文化財課）が行った。調査ならびに整理の主たる担当は伊藤敬太郎があたり、調査補佐として土岐耕司、安全監理者として川口洋次郎が担当した（三者とも国際航業株式会社文化事業部）。なお調査ならびに整理作業にあたっては、『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（文化庁）』ならびに『九州地区埋蔵文化財発掘調査基準（福岡県）』を遵守し、市民の埋蔵文化財を管理するために作成した『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』に規定した基準に基づき事業監理を行った。なお調査地は北緯33度30分13秒、東経130度31分９秒に位置する。

２．層序　（図３・４）

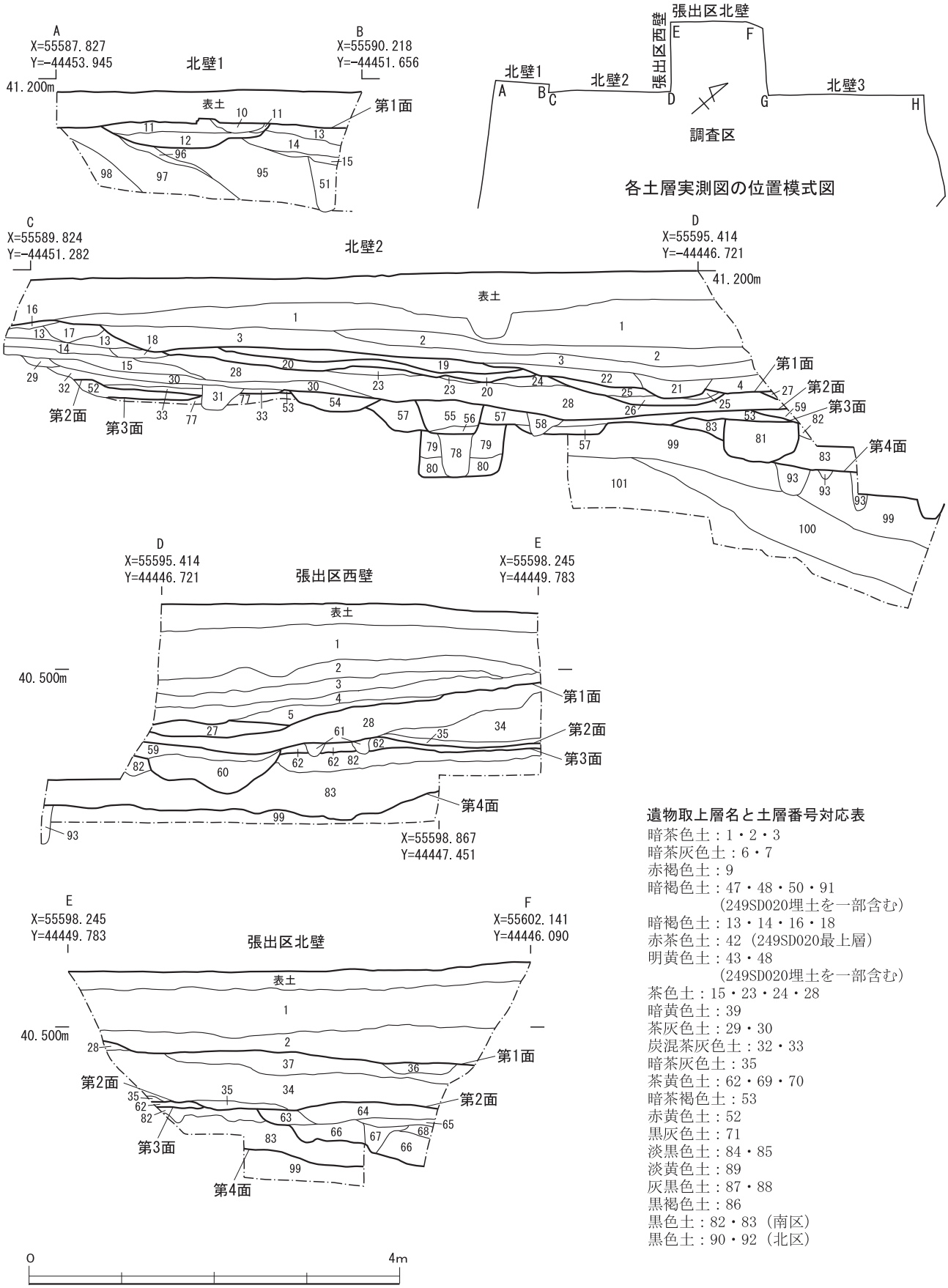
今回の調査区は、南東向きに開く谷地形の北西側斜面から谷底にかけてがその対象である。そのため現在では盛土により平坦にならされているが、現地表面から地盤までの深さは浅い箇所で0.5ｍ、深い箇所は3.3ｍを測る。基本層序は、斜面地への流れ込み層と古代の整地層から構成されており、４面の遺構面を確認した。これらの堆積状況と遺構面について最も下位の地盤から説明する。なお層名は遺物取り上げ時のものとする。

地盤は、阿蘇４火砕流にともなう堆積層で灰黄褐色～灰白色土（95層）や明茶色土（99層）などがあり、これらの上面が第４面となる。

その上は６世紀前半～７世紀中頃の遺物包含層である黒色土（82・83・90・92層）が調査区の中央付近から堆積がはじまり、もっとも厚い部分では層厚0.65ｍ程になる。その上は、７世紀代の遺物を含む黒褐色土（86層）、さらにその上に７世紀後半～８世紀前半までの遺物を含む灰黒色土（87・88層）、淡黄色土（89層）、淡黒色土（84・85層）などが堆積し、層厚は0.2～0.4ｍ程になる。これらの層と地盤の上面が第３面となる。

その上は、調査区の中央付近で、８世紀前半～中頃の遺物を含む整地層である黒灰色土（71層）、赤黄色土（52層）、暗茶褐色土（53層）、茶黄色土（62・69・70層）が層厚0.1～0.2ｍ程で堆積し、第２面となる。

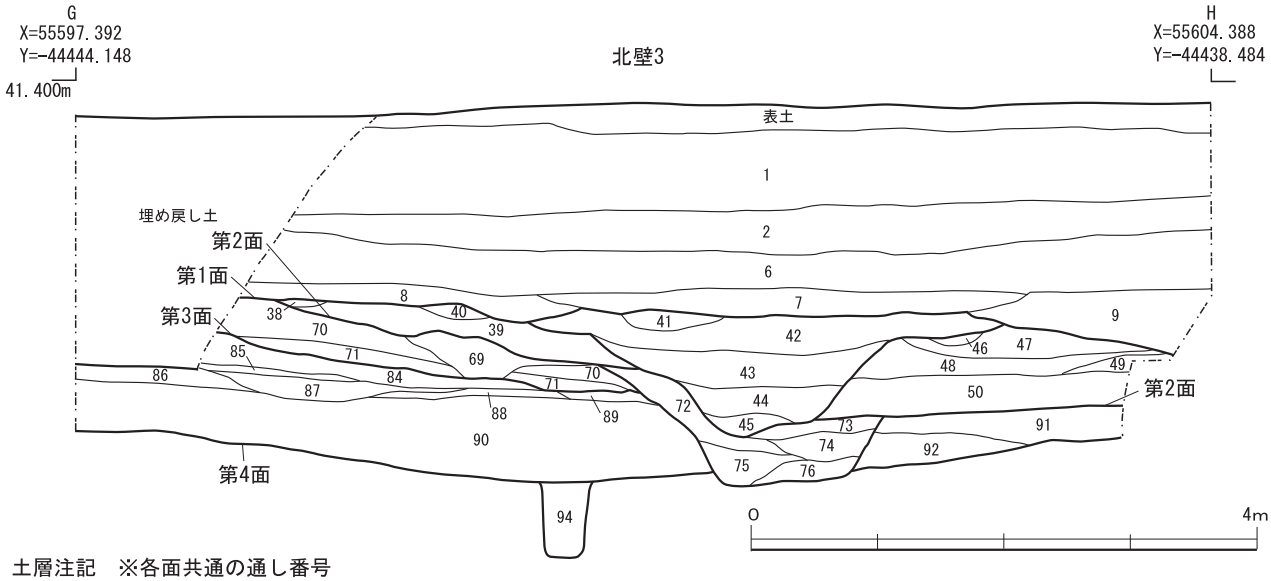
第１面は、８世紀後半の遺物を含む流れ込み層である暗茶灰色土（35層）、炭混茶灰色土（32・33層）、茶灰色土（29・30層）、暗黄色土（39層）、茶色土（15・23・24・28層）、暗褐色土（13・14・16・18層）が層厚0.2～0.6ｍ程で堆積し、遺構面となる。１面より上は、中世から近世の遺物を包含する堆積層の暗茶灰色土（６・７層）、暗茶色土（１・２・３層）が層厚0.4～1.2ｍを測り、さらにその上を表土が層厚0.2～0.5ｍで覆う。



遺物取上層名と土層番号対応表

暗茶色土：1・2・3
暗茶灰色土：6・7
赤褐色土：9
暗褐色土：47・48・50・91
(249SD020埋土を一部含む)
暗褐色土：13・14・16・18
赤茶色土：42（249SD020最上層）
明黄色土：43・48
(249SD020埋土を一部含む)
茶色土：15・23・24・28
暗黄色土：39
茶灰色土：29・30
炭混茶灰色土：32・33
暗茶灰色土：35
茶黄色土：62・69・70
暗茶褐色土：53
赤黄色土：52
黒灰色土：71
淡黒色土：84・85
淡黄色土：89
灰黒色土：87・88
黒褐色土：86
黒色土：82・83（南区）
黒色土：90・92（北区）

図３．基本土層図１（1/60）



土層注記　※各面共通の通し番号

1：北壁2・3　張出区西壁・北壁　暗褐色土。磁器片を含む。
2：北壁2・3　張出区西壁・北壁　暗褐色土。1層より色調は明るい。
3：北壁2・張出区西壁　暗褐色土。暗色が強い。
4：北壁2・張出区西壁　褐灰色土。22層より混入物少ない。
5：張出区西壁　茶褐色土。
6：北壁3　暗茶色土。
7：北壁3　暗茶灰色土。瓦片(2～5cm角)・灰色粘土を含む。
8：北壁3　暗褐色土。灰色粘土を斑点状に含む。
9：北壁3　赤褐色土。瓦片(2cm角)・土器片を多く含む。
10：北壁1　暗褐色土。S-28。
11：北壁1　暗褐色土。黄褐色土を含む。
12：北壁1　灰白色土。249SK077。
13：北壁1・2　暗褐色土。249SX001の基盤層。
14：北壁1・2　暗褐色土。炭化物を多く含む。
15：北壁1・2　暗褐色土。
16：北壁2　褐色土。
17：北壁2　暗褐色土。S-16。
18：北壁2　暗褐色土。
19：北壁2　暗褐色土。249SK018。
20：北壁2　暗褐色土。炭化物(5～10mm大)と瓦片多い。249SK022。
21：北壁2　灰色土。
22：北壁2　褐灰色土。
23：北壁2　褐色土。
24：北壁2　暗褐色土。
25：北壁2　暗灰褐色土。瓦片・土器片多い。249SK029。
26：北壁2　黒褐色土。黒～暗灰色の粘土塊を含む。249SK029。
27：北壁2　張出区西壁　暗褐色土。瓦片を多く含む。249SX049。
28：北壁2　張出区西壁・北壁　茶褐色土。
29：北壁2　暗褐色土。
30：北壁2　暗灰褐色土。大ぶりな瓦片含む。
31：北壁2　暗灰褐色土。
32：北壁2　黒灰色土。炭化物を多く含む。
33：北壁2　黒灰色土。暗灰色粘土塊(30～50mm大)多い。
34：張出区西壁・北壁　明茶褐色土。
35：張出区西壁・北壁　茶灰褐色土。
36：張出区北壁　茶褐色土。
37：張出区北壁　茶褐色土。
38：北壁3　暗褐色土。249SK153埋土。
39：北壁3　暗黄色土。
40：北壁3　灰色粘土。
41：北壁3　暗灰褐色土。249SK153埋土。
42：北壁3　赤茶色土。部分的に赤褐砂を含む。(SD020最上層)
43：北壁3　明黄色粘質土。249SD020。
44：北壁3　茶褐色粘質土。249SD020。
45：北壁3　茶褐色粘質土。249SD020。
46：北壁3　赤褐色砂質土。少量の炭片を含む。
47：北壁3　暗褐色土。他の暗褐色土に比べて黒味が強い。
48：北壁3　暗黄褐色土。
49：北壁3　暗黄茶色土。
50：北壁3　暗褐色土。
51：北壁1　橙褐色土。
52：北壁2　橙褐色土。
53：北壁2　茶褐色土。
54：北壁2　暗灰褐色土。249SD094。
55：北壁2　暗褐色土。249SK092
56：北壁2　黒灰色土。炭化物多い。249SK092。
57：北壁2　暗褐色土。S-128。
58：北壁2　暗褐色土。
59：北壁2・張出区西壁　暗茶褐色土。249SD106。
60：張出区西壁　暗茶色土。249SD106。
61：張出区西壁　暗褐色土。
62：張出区西壁・北壁　明茶褐色土。
63：張出区北壁　茶灰褐色土。249SD025(S-112)。
64：張出区北壁　茶灰色土。249SD025(S-112)。
65：張出区北壁　黒灰粘土質。249SD025(S-112)。
66：張出区北壁　暗褐色土。249SD025(S-112)。
67：張出区北壁　明茶色土。249SD025(S-112)。
68：張出区北壁　茶橙色土。249SD025(S-112)。
69：北壁3　茶黄色土。多量の炭化物を含む。黄褐色土を斑点状に含む。
70：北壁3　茶黄色土。黄褐色土(φ2～3mm)を斑点状に含む。
71：北壁3　黒灰色土。黄褐色土(φ2～3mm)を斑点状に含む。
72：北壁3　暗灰色土。249SD025。
73：北壁3　暗褐色砂質土。249SD025。
74：北壁3　暗褐色土。249SD025。
75：北壁3　暗灰色砂質土。249SD025。
76：北壁3　淡黄色粘質土。249SD025。
77：北壁2　橙褐色土。
78：北壁2　暗褐色土。249SB010c抜取痕か。
79：北壁2　暗褐色土。褐色土塊多い。249SB010c掘形。
80：北壁2　暗褐色土。褐色土少量。249SB010c掘形。
81：北壁2　暗褐色土。249SB010j掘形。
82：北壁2　張出区西壁・北壁　暗茶褐色土。
83：北壁2　張出区西壁・北壁　黒褐色土。
84：北壁3　淡黒色土。
85：北壁3　黒茶色土。
86：北壁3　黒褐色土。
87：北壁3　灰黒色粘質土。
88：北壁3　灰黒色粘質土。赤褐色砂を含む。
89：北壁3　淡黄色土。
90：北壁3　黒褐色土。多量の土器片を含む。
91：北壁3　暗褐色土。黄褐色土を含む。50層よりやや明るい。
92：北壁3　暗褐色土。
93：北壁2　張出区西壁　黒褐色土。82層にほぼ同質。
94：北壁3　黒灰粘質土。S-188。
95：北壁1　灰黄褐色～灰白色土。
黒色土粒(φ0.5～2mm)・火山ガラスが多い。
96：北壁1　暗灰色土。炭化物(自然木か、原形を留めた形で完全に炭化している)が見られる。黒色小礫(φ3～10mm)が多量。その他赤褐色粒・青灰色粒・淡黄褐色粒(φ5～10mm)も含む。
97：北壁1　灰褐色～白黄色土。混入物は95層土に同じ。
98層との層離面から3～8cm厚の鉄分沈着が見られる。
98：北壁1　赤褐色土。粘性有。φ2～5mmの小礫を多量に含む。
火山ガラスもわずかに見られる。
99：北壁2　張出区西壁・北壁　明茶色土。
100：北壁2　黒褐色土。白色土粒(φ2mm)ごくわずかに見られる。
火山ガラスあり。
101：北壁2　暗褐色土。にぶい黄褐色土が混合する。
火山ガラスあり。

図４．基本土層図２（1/60）

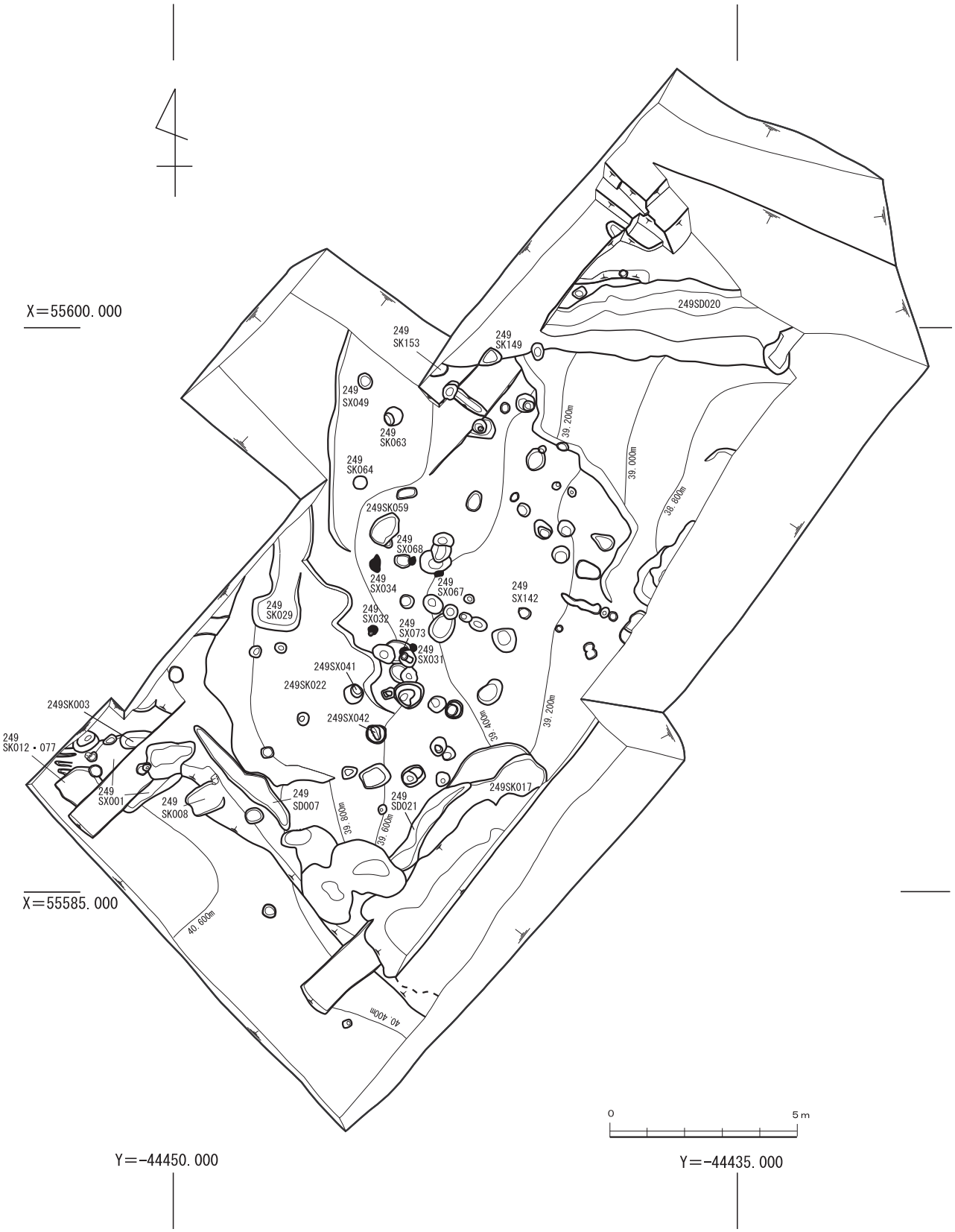


図５．大宰府条坊跡第249次調査　第１面全体図（1/150）

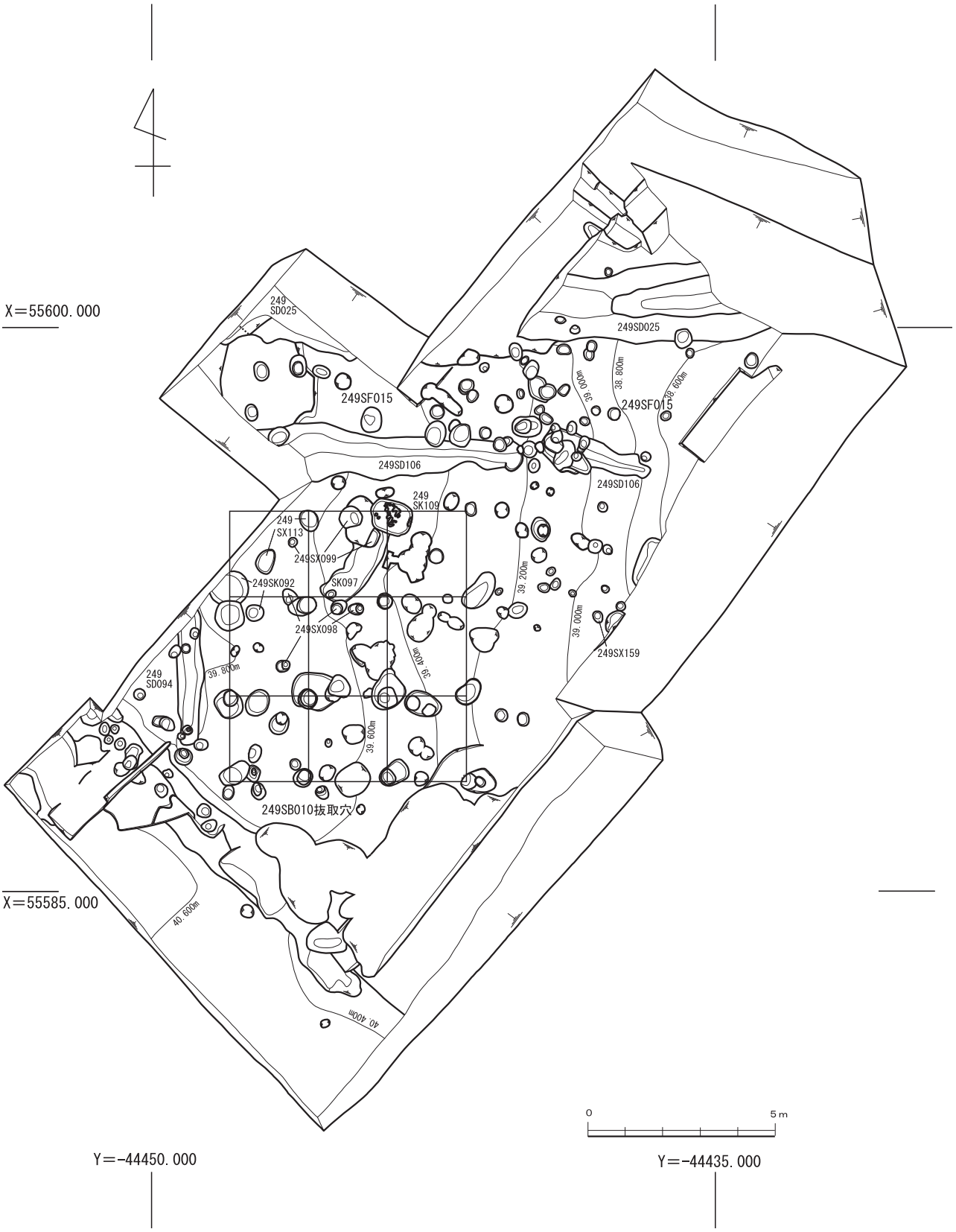


図６．大宰府条坊跡第249次調査　第２面全体図（1/150）

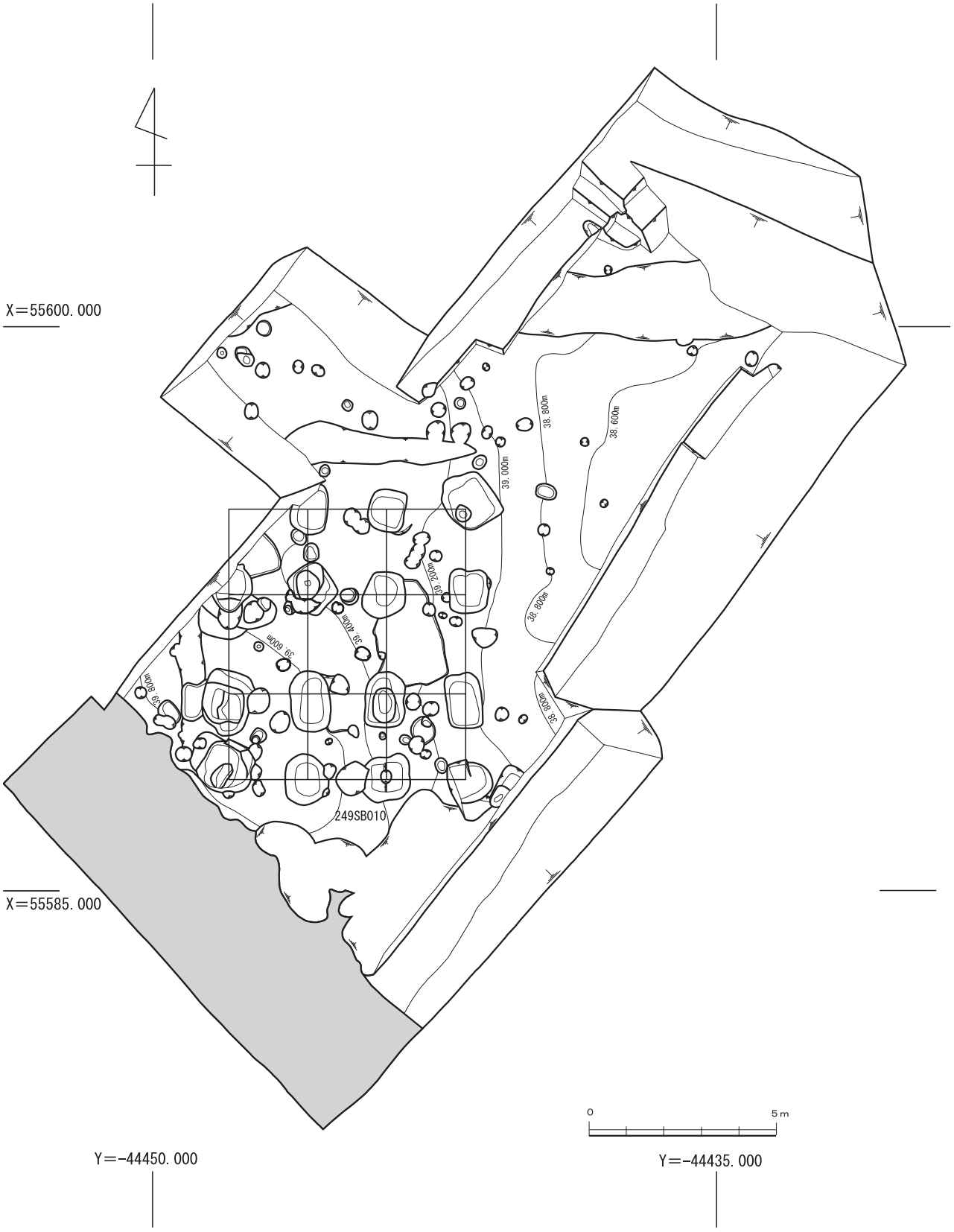


図７．大宰府条坊跡第249次調査　第３面全体図（1/150）

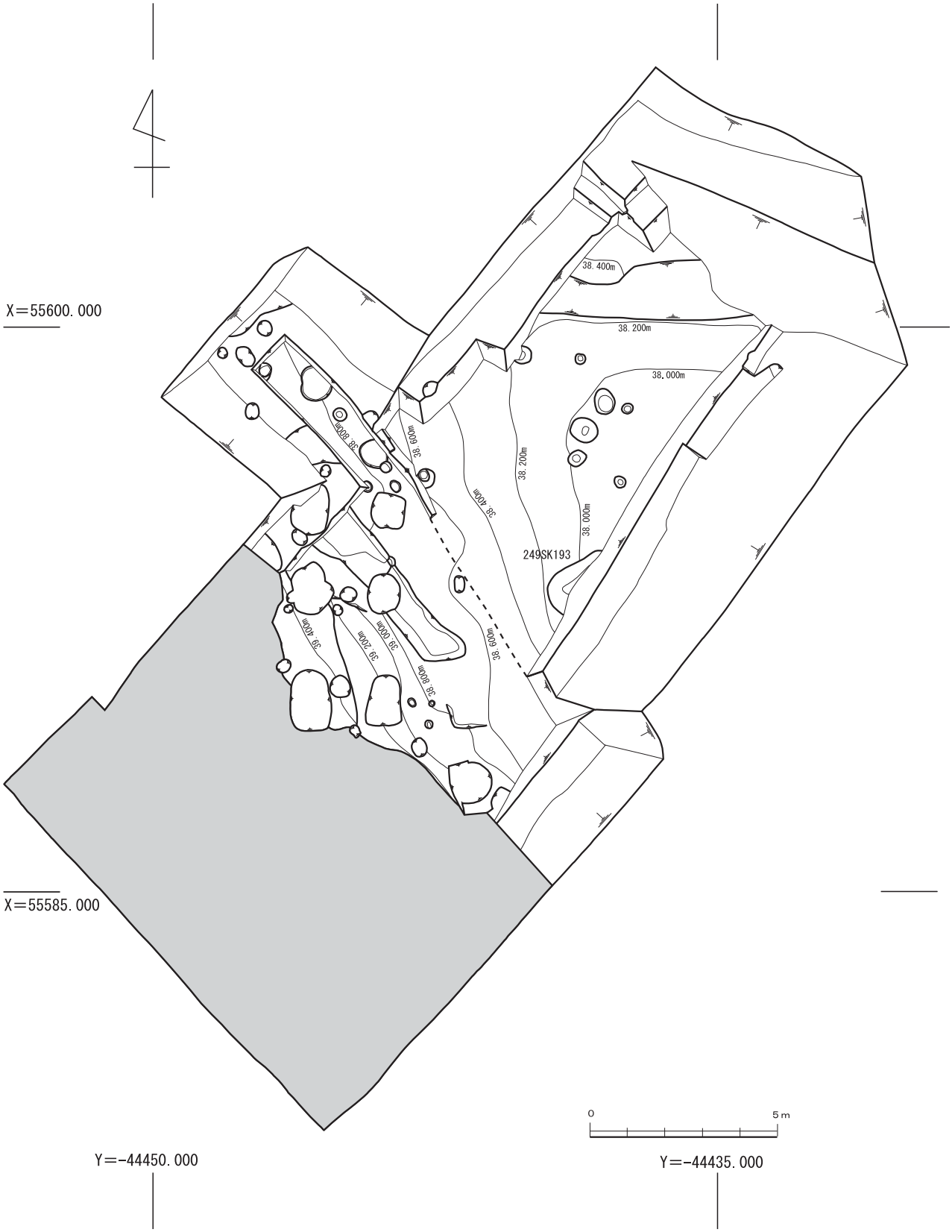


図８．大宰府条坊跡第249次調査　第４面全体図（1/150）

３．遺構

(1) 第１面遺構

ａ．瓦窯

249SX001（図９～11、図版１－１、２－１）

調査区南西隅の表土直下で検出した。遺構は削平のため天井と壁はまったく残存せず、かろうじて被熱による酸化層や還元層からなる床面を確認した。平面形状は、扇形で柄にあたる方が焚口にあたるが、確認調査時の試掘トレンチが遺構中央を通る形で設定されたため、その部分が欠失した形となっている。また、当初設定した調査区の範囲以上に被熱面が広がるため、北西側を部分的に拡張したが、遺構の全体を確認することはできなかった。規模は、長軸 3.5 m以上、最大幅 1.9 mを測る。

焚口は、残存状況が悪く詳細は不明だが、開口部と推定される箇所の南脇には高さ 0.14 m程の立石が１つあり、あるいは袖石の可能性もある。

燃焼部には、炭化物の溜まる長軸 1.3 m、短軸 0.7 m、深さ 0.05 m程の浅い窪みがあり、部分的に酸化層が広がる。この他の焚口・燃焼部の詳細、燃焼部と焼成部の境の段差となる「階」の有無は試掘トレンチや後世の削平により不明である。

焼成部は、焚口に向かって約５度の傾斜をもったほぼ平らな面である。平窯を想定させるが、生瓦を置く台にあたる牀については、図９で示した酸化層や還元層の広がりから存在しなかったと判断される。床面には、部分的に還元層が上下２面ある箇所があり、部分的に床面を補修した可能性がある。また被熱を受けた高さ 0.15 m程の立石がある。これは図 10 のＣ－Ｃ’土層図で示すように据付掘形を埋めた後に床面を構築していることから、249SX001 に伴うことになるが、瓦窯の構造としてどのような役割であったかは不明である。あるいは、焼成部の天井を作るための支え柱の基礎石の可能もある。埋土からは、スサ混りの窯壁が出土しているため、瓦窯は地下式ではなく、半地上式で天井部をスサ混り粘土により構築した可能性がある。

上述の扇形プランとは別に、やや方形を呈する瓦窯構築に伴う掘形を検出している。深さは 0.1 m程の浅いものだが、明らかに基盤層とは異なる明赤色土や灰黄褐色土が埋土になる。また、焼成部の直下には、249SK012 と 249SK077 がある。当初 249SK012 は、249SX001 よりも新しいものと判断して掘削したが、壁面の土層観察により、遺構の範囲が 249SX001 の下層まで広がることが確認されたため古いものと所見を改めた。そのため、249SK012 と 249SK077 は別番号で掘削したが、一連の遺構で、249SK012 が上層、249SK077 が下層の可能性が大きい。249SK077 の平面形状は、長方形で長軸 1.3 m以上、短軸 1.3 m、249SK012 を含めた深さは 0.25 mを測る。埋土は下層から暗灰色土、暗灰色粘土、249SK012 が茶色土になる。

瓦窯の時期は、床面直上の炭化物層の遺物が９世紀前半、掘形からも９世紀前半（大宰府編年ⅥＡ期）の遺物が出土していることから、操業年代は９世紀前半と考えられる。

ｂ．瓦窯関連遺構

249SK018（図 11）

249SX001（瓦窯）の北東側斜面の下方に位置する溜まり状の遺構である。平面形は不整形で、長軸 6.0 m以上、短軸 4.5 m、深さは 0.3 m程を測る。埋土には多くの瓦片に混じって、窯壁らしき焼成土塊や炭化物が多く見られる。図 11 の土層図が示すように、削平のため 249SX001 と連続土層として 249SK018 との関係を明確にできなかったが、その位置関係と遺物から、249SX001 の崩壊に伴う流れ込

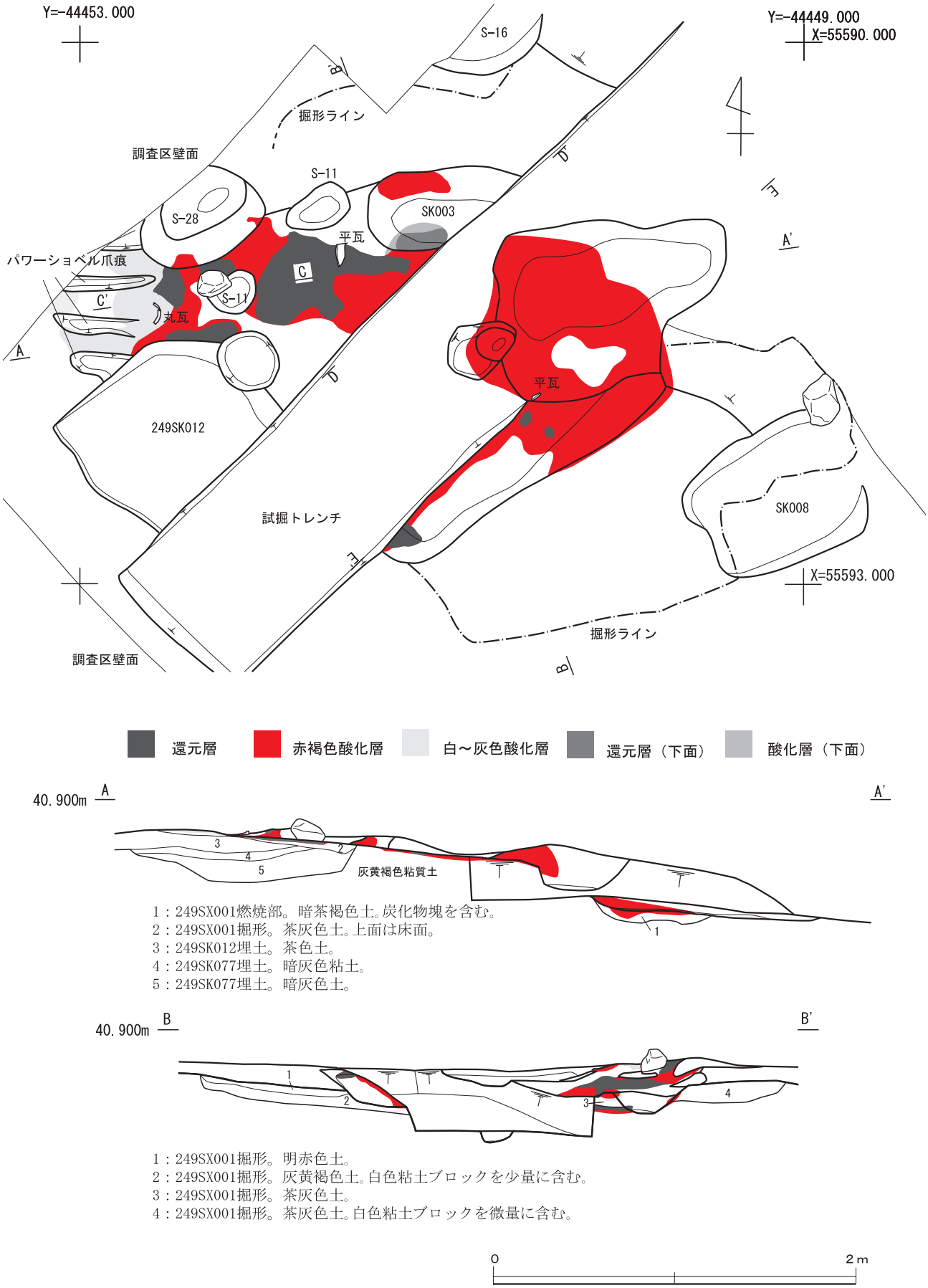
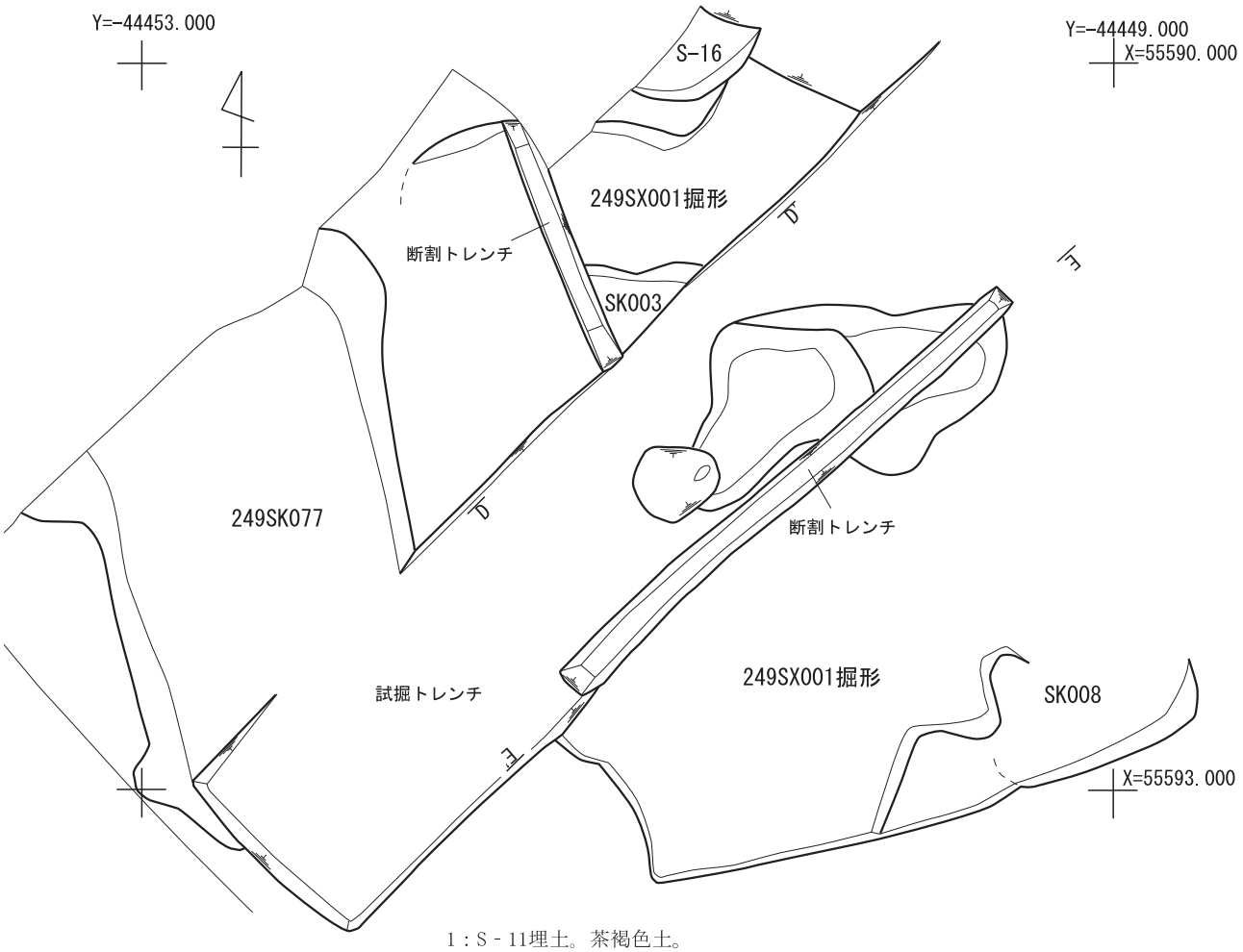
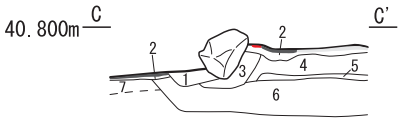
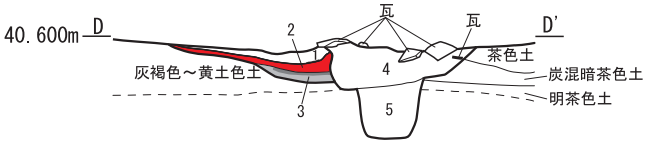


図９．249SX001実測図（1/30）

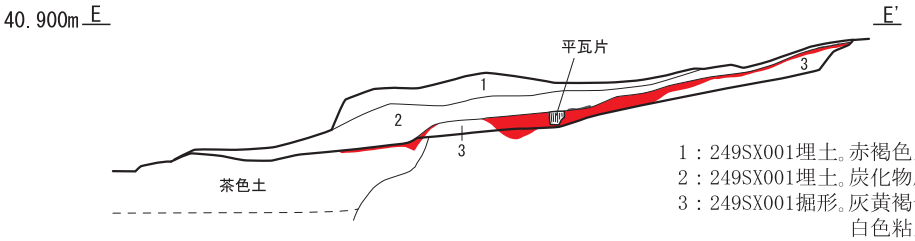


1：S－11埋土。茶褐色土。
2：249SX001掘形。茶灰色土。上面は床面。
3：石据え付けの掘形。茶色土。白色粘土粒～塊を多く含む。
4：249SK012埋土。茶色土。炭化粒・白色粘土粒・黄土色土粒をわずかに含む。
5：249SK077埋土。暗灰色粘土。
6：249SK077埋土。暗灰色土。灰色・橙褐色・黄土色土が多く混入する。
7：灰黄褐色粘質土。





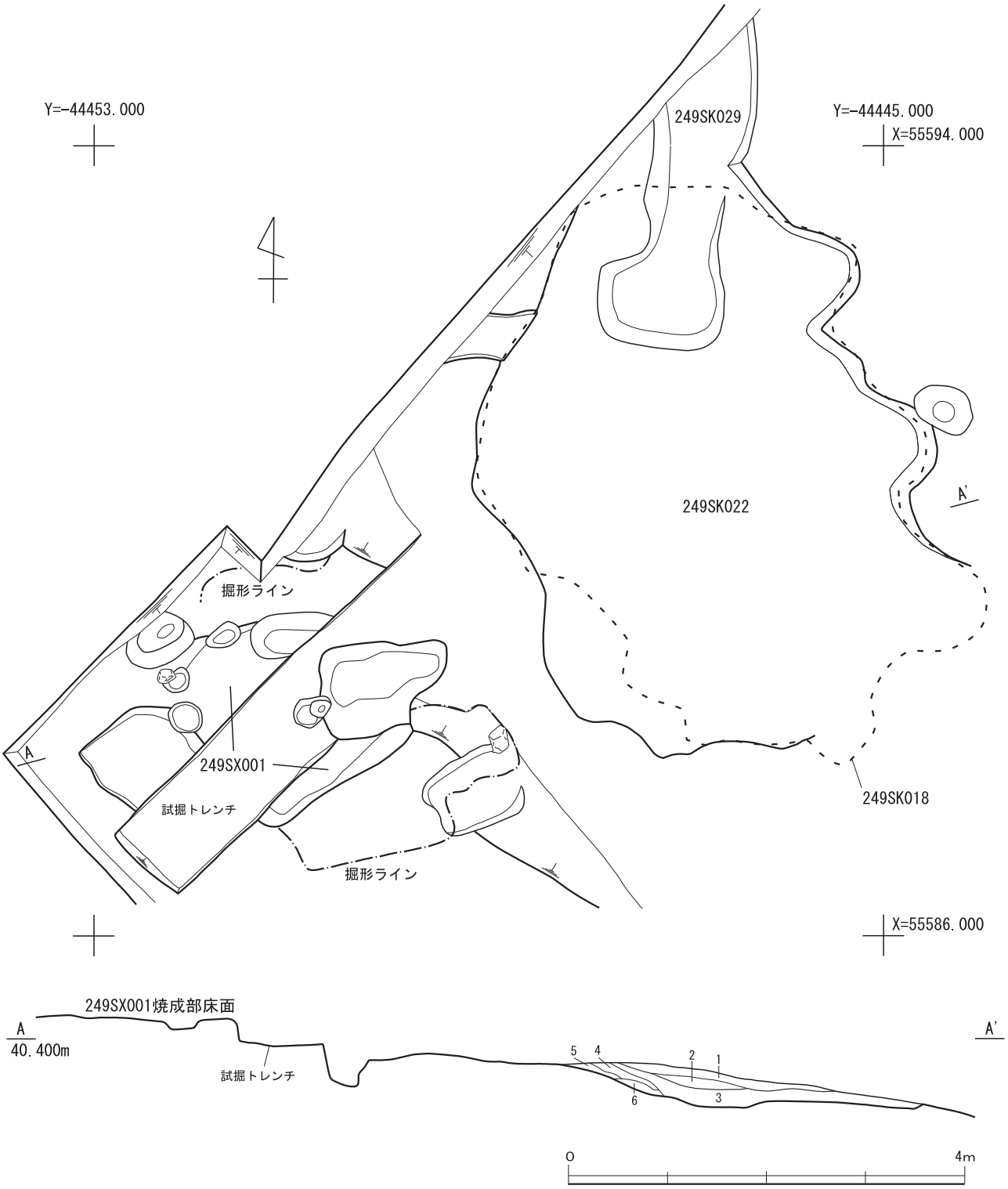
1：249SX001埋土。炭化物層。
2：249SX001掘形。橙色土。上面は床面。
3：249SX001掘形。褐色土。下面の還元層がある。
4：249SK003埋土。茶色土。瓦片を多く含む。
5：249SK003埋土。茶黄色土。



1：249SX001埋土。赤褐色土。窯壁崩落土。
2：249SX001埋土。炭化物層。
3：249SX001掘形。灰黄褐色土。上面が床面。
白色粘土ブロックを少量含む。

0　2m

図10. 249SX001掘形実測図（1/30）



1：249SK018埋土。茶褐色土。白色粘土混じる。
2：249SK018埋土。明茶色土。
3：249SK022埋土。暗茶褐色土。瓦片・炭化物多い。
4：249SK022埋土。明茶色土。炭化物微量。黄色土粒見られる。
5：249SK022埋土。茶褐色土。炭化物粒含む。
6：249SK022埋土。茶褐色土。

図11. 249SX001・249SK018・022・029実測図（1/60）

み層が堆積したものと判断した。出土遺物から時期は９世紀前半になる。

249SK022（図 11、図版２－１）

249SK018 の完掘後、ほぼ同位置で検出した。249SK018 と同じ溜まり状の遺構であり、平面形は不整形で、長軸 6.0 m以上、短軸 4.5 m、深さは 0.2 m程を測る。埋土には多量の瓦片・瓦の材料もしくは未焼成品と思われる粘土塊、炭化物が混入している。削平のため 249SX001 焚口からの連続土層として、249SK022 との関係は明確にできなかったが、その位置関係と遺物から、SX001 に伴う灰原遺構と判断した。ただし、灰原特有の焼け歪み瓦片はほとんど確認できなかった。時期は出土遺物から９世紀前半になる。

249SK029（図 11）

249SK018･022 の北側､調査区北壁際に位置する。新旧関係は､平面検出の段階で 249SK018 よりも古く、249SK022 より新しいと判断した。溜まり状の遺構であるが、平面形は細長の溝状を呈し、遺構は北壁より奥に延びる。検出部分での規模は長さ 2.9 m、最大幅 1.3 m、深さ 0.15 mを測る。埋土や出土遺物が 249SK022 に類似しているため、瓦窯に伴う遺構であることが考えられるが、位置関係からは本調査で検出されている 249SX001 との直接的な関連を想定しにくい。遺構が北壁の奥に延びることや、張出区西壁の４・５・27 層（図３）で示されているように瓦片や炭化物が混じる土が調査区の北西側から流れ込んでくることから、丘陵斜面の上方に別の瓦窯跡が存在する可能性がある。なお、この遺構からは炉壁などの遺物も出土しており調査区外に瓦窯の他、冶金関連の遺構が存在する可能性がある。時期は出土遺物から９世紀前半（大宰府編年ⅥＡ期）になる。

ｃ．炉跡

調査区中央の約５m四方の狭い範囲で６基を確認した。残存状況は良好とは言えないが、位置や規模の面で共通点が認められる。瓦窯との前後関係は平面検出の段階で、249SK022 埋土の最上層である炭化物混じりの暗茶褐色土が炉跡群側に薄く堆積しており、これを除去した後、検出することができた。そのため新旧関係は、炉跡群が古く、瓦窯が新しくなると考えられる。時期については埋土の遺物から年代は特定できないが、後述する 249SB010 の廃絶より後で瓦窯より古いことから、８世紀後半から９世紀前半の間になる。

249SX031（図 12、図版２－３）

炉跡群内の南側に位置し、S-74 によって一部を欠失するが椀形の浅い窪みをもつ。平面形状は径 0.18 m、深さ 0.03 m程の円形で、黄灰色の色調を呈する還元層となる。また、窪みを中心とする径 0.23 m の範囲は赤褐色の酸化層になる｡窪みの底面にはごくわずかではあるが炭化物層と鉱滓が残存していた。

249SX032（図 12、図版２－４）

炉跡群内の南側に位置する。本調査で検出された炉跡群中、最も残存状況が良好であるが一部が S-62 に切られる。椀形の窪みをもち、平面形状は長軸 0.21 m、短軸 0.16 mの不整楕円形、深さ 0.06 m程である。この窪みを中心にして径 0.24 m程の範囲で灰褐色の色調を呈する還元層となる。ただし、炉底部の還元の度合いはそれほど強くない。還元層の周囲および下位は赤褐色の酸化層となる。埋土は炭化物層で炉壁が出土している。

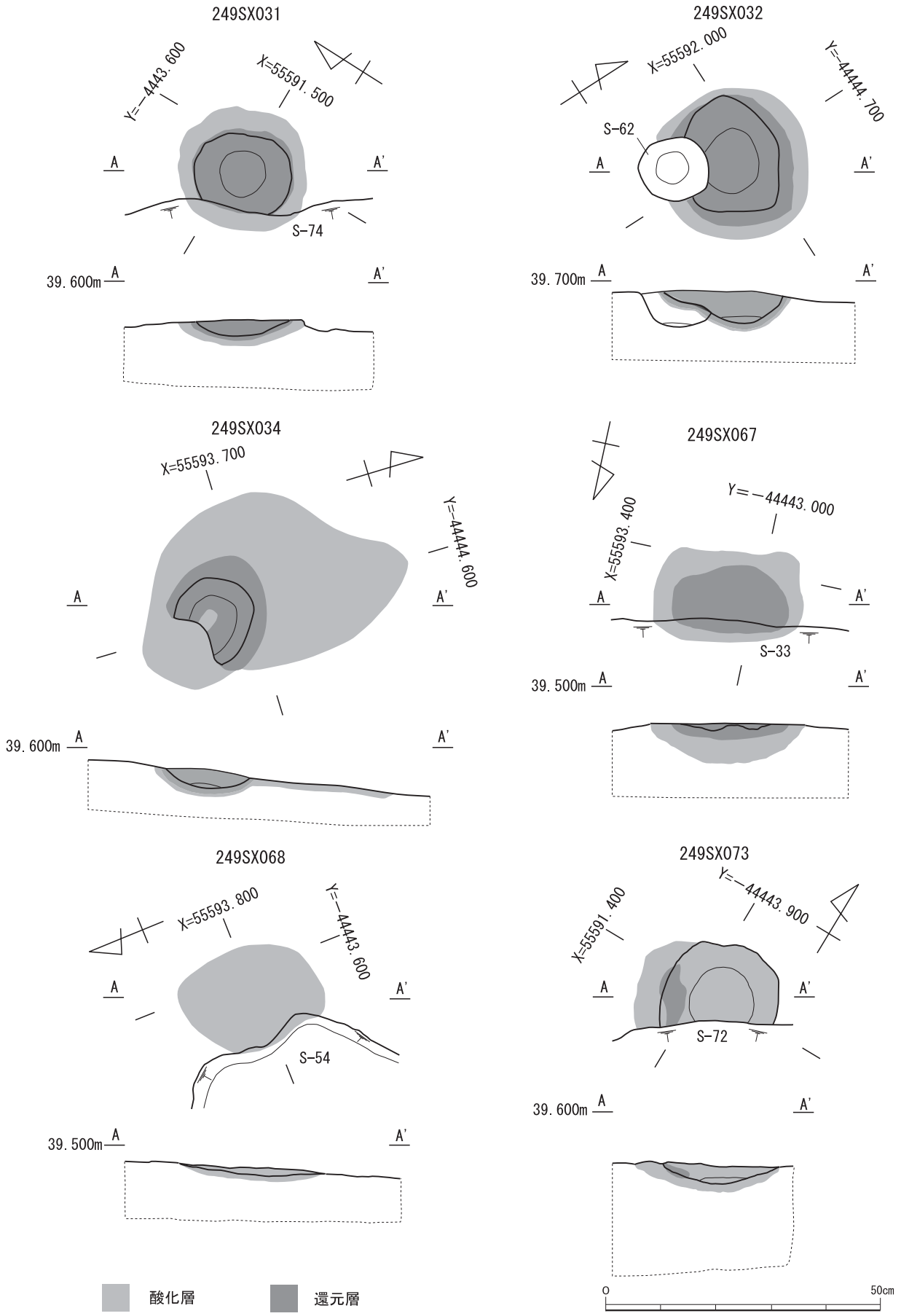


図12. 炉跡群実測図（1/10）

249SX034（図 12）

炉跡群内の北側に位置する。椀形の浅い窪みをもち、平面形状は径 0.15 m程の不整楕円形、深さ 0.02 m程である。この窪みを中心にして径 0.2 m程の範囲で黄灰色の色調を呈する還元層となる。ただし、炉底部は還元していない。還元層の周りに見られる赤褐色の酸化層の範囲は広く、長軸 0.5 m、短軸 0.3 m程の不整楕円形を呈する。窪みにはわずかな炭化物層とともに銅滓が出土した。

249SX067（図 12）

炉跡群内の北側に位置する。S-33 に切られ、半分ほどを欠失している。土坑状の窪みはなく、径 0.2 m程の範囲で灰褐色の還元層がある。その周囲および下位は赤褐色の酸化層である。

249SX068（図 12）

炉跡群内の北側に位置する。S-54 に切られ、また上位も大きな削平を受けるため、残存状況は良くない。土坑状の窪みはなく、赤褐色を呈する酸化層の平面規模は、長軸 0.27 m、短軸 0.2 mを測る。還元層は確認できない。

249SX073（図 12）

炉跡群内の南側に位置し、一部が S-72 に切られる。椀形の浅い窪みをもち、平面形状は径 0.21 m、深さ 0.03 m程の円形である。青灰色の還元層は立ち上がりの一部にのみ見られ、窪み全体としては赤褐色の酸化層である。

ｄ．溝

249SD020（図５）

調査区北側に位置する東西溝である。当初は赤茶色土（図４北壁３の 42 層）を１面の基盤層と考え調査を進めていたが、本層を除去した段階で１面に伴う溝と認定し調査を開始した。その後北壁の観察結果により赤茶色土が 249SD020 の最上層と考えるにいたった。規模は、最大幅 2.0 m、深さ 0.6 mを測る。溝底の高低差は、東端が 0.3 m程低くなる。第２面で検出した 249SD025 とほぼ同一位置にあるが、第１面段階で再度掘削されている。また、第２面の 249SD025 は、調査区北側の張出区でも検出されているが、249SD020 は延長を検出できなかった。確認している範囲が狭いため断定はできないが張出区の第１面の状況は、北西側斜面からの流れ込み層（図３張出区西壁・張出区北壁の 28・34 層）が 249SD025 を覆う形で堆積しており、249SD020 が同一位置で延長していた可能性は少ない。埋土は、下層から茶褐色粘質土、明黄色粘質土になる（図４北壁３の 43 ～ 45 層）。埋没時期は、赤茶色土から平安時代前期の遺物が出土しているため、その頃に最終的に埋没したと考えられる。なお、249SD020 からは鉄滓、銅滓などの遺物が出土しているため、調査区中央にある炉跡群からの廃棄物や調査区外の丘陵斜面からの流れ込みが想定される。

遺構の性格としては、北側丘陵からの排水処理が挙げられる。その他、瓦窯や炉跡群との関係は、遺構と周辺の関係が明確でないため判然としない。

ｅ．土坑

249SK059（図 13）

調査区のほぼ中央に位置する。平面形状は楕円形で、規模は長軸 0.9 m、短軸 0.63 m、深さ 0.18 m

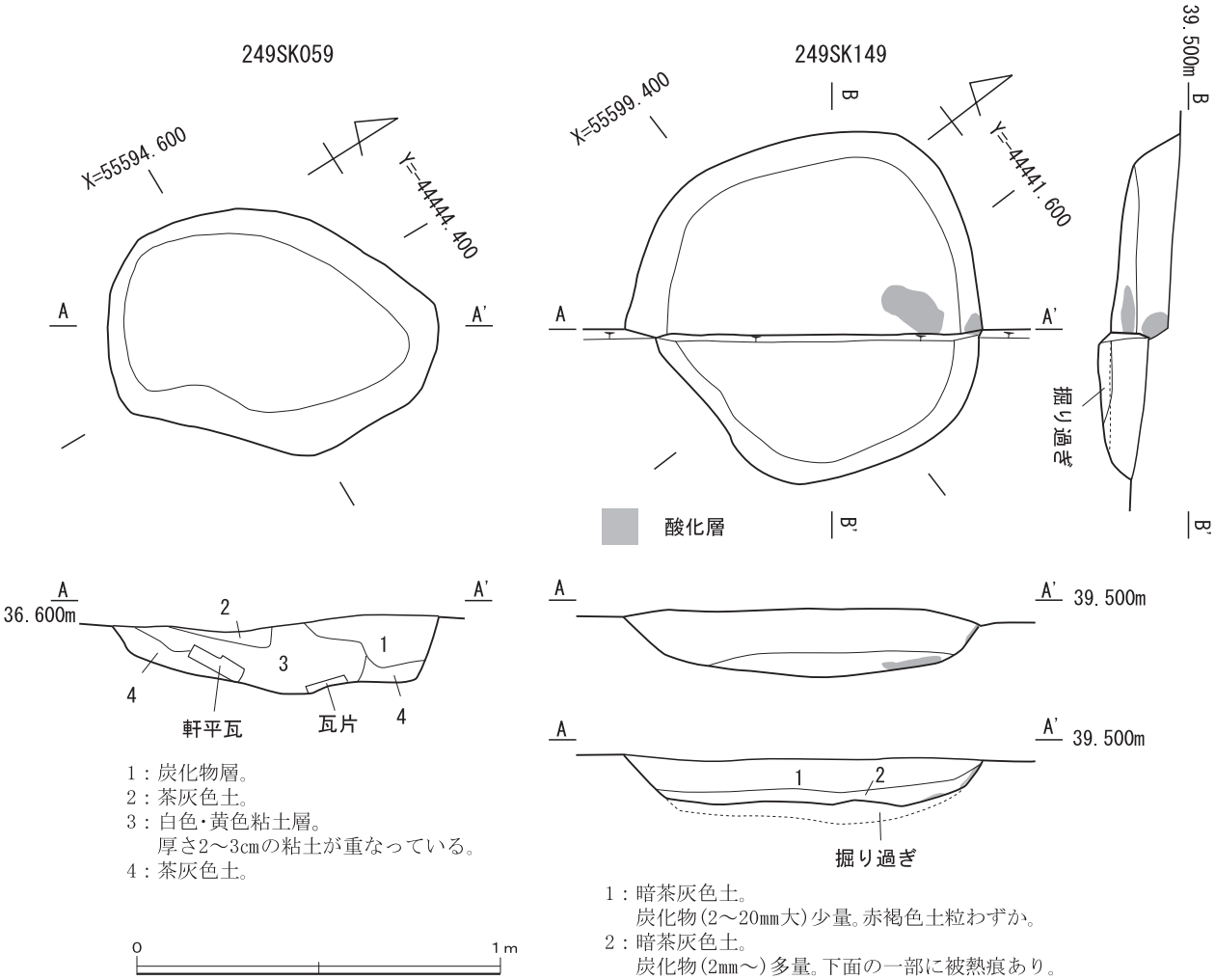


図13. 249SK059・149実測図（1/20）

を測る。埋土には多量の白色・黄色粘土を含む。出土遺物の時期は８世紀後半になる。

249SK063（図５）

調査区のほぼ中央に位置し、暗茶色土を除去後に検出した。平面形状は楕円形で、規模は長軸 0.5 m、短軸 0.46 m、深さ 0.63 mを測る深い土坑である。埋土は暗褐色土で、多量の瓦片（軒平瓦含む）を含む。出土遺物の時期は８世紀後半になる。

249SK064（図５）

調査区のほぼ中央に位置する。平面形状は円形で、規模は径 0.37 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は茶灰色土で、甑炉の一部とおぼしき大型の炉材や焼成土塊が出土している。

249SK149（図 13）

調査区やや北側に位置する。遺構壁面に焼土面が確認できる焼土坑である。試掘トレンチによりやや欠失するが、平面形状は楕円形で、規模は長軸 0.98 m、短軸 0.94 m、深さ 0.15 mを測る。断面形状は皿形に近い。遺構の北東側の底面及び壁面の一部に、赤褐色に被熱した酸化層が認められた。埋土は２層で、下層には多量の炭化物を含む。

(2) 第２面遺構

ａ．掘立柱建物

249SB010 抜取穴（図 14・15）

調査区のほぼ中央に位置する。東西３間、南北３間の総柱式掘立柱建物である。第２面で柱の抜取穴を確認した。多くの第１・２面遺構と切り合うため欠失している部分が多く、検出作業も難航した。当初はS-５a～ｈの７基と既に第１面で完掘していたS-57が位置・検出状況・形状等から同一遺構になるものとし、この段階では２間×２間の総柱式掘立柱建物を想定した（249SB005と設定）。しかし、その後の調査進行に伴い、第３面遺構である249SB010柱掘形と平面位置が重なったことから、本遺構は249SB010の柱抜取穴と判断した。つまり、第３面で掘形を掘削し、柱を据えた後、整地層（図３北壁２の52・53層など）により第２面を構築する。そのため第２面では、抜取穴しか確認できないと判断するにいたった。再度、本遺構を検討したところ、S-５cとしたものについては柱筋があわず同一建物になり得ないこと、一方で、第１面で検出したS-44が249SB010m抜取穴、S-52が249SB010h抜取穴、S-57が249SB010i抜取穴、S-104が249SB010n抜取穴、第２面のS-114が249SB010ℓ抜取穴、S-158が249SB010o抜取穴になると判断した。なお、第１面で抜取穴を検出できたのは、整地層が西になるほど薄くなるため、掘り下げすぎにより検出してしまったと理解した。

このように、検出当初から本遺構は掘立柱建物として認識はしていたものの、第２面と第３面を別々の掘立柱建物と考えていたため、同一建物で、第２面の遺構が柱抜取穴、第３面が柱掘形と確定するまでに混乱や誤解があり、結果、遺構番号や作図にあたって不備があることを付記する次第である。

建物は北側が道路249SF015に面し、南西側は近接するように丘陵が迫る。当時の正確な地形は削平により不明だが、第２面の整地層と丘陵側では比高差が0.6ｍ以上ある。

柱間の規模は、東西6.24ｍ、南北7.13ｍを測る。１小尺を0.297ｍとするなら、東西21小尺、南北24尺に復元できる。柱間は、東西が2.08ｍ（７小尺）の等間、南北が北から2.23ｍ（7.5小尺）、2.67ｍ（９小尺）、2.23ｍ（7.5小尺）となり中央間だけ広くなる。各抜取穴の規模は、円形で径0.4～0.5ｍのものや、楕円形で長軸0.9～1.1ｍ、短軸0.4～0.5ｍを測るものがある。特に249SB010a・g・m・ℓの各抜取穴は、その平面・断面形状から北東側、つまり道路側に柱を抜き取った可能性がある。建物の解体時期は、抜取穴から８世紀後半の遺物が出土しているため、その頃になる。

その他、遺構に伴う可能性のあるものとして、西側に南北溝249SD094がある。建物の柱筋と溝の心々距離は、1.0ｍ程であることから雨落溝の可能性がある。また、249SF015の南側溝249SD106との心々距離は1.6ｍになり、道路に近接した位置に建物があることになる。

ｂ．道路

249SF015（図６、図版２-２）

調査区の北側に位置する。249SD025を北側溝、249SD106を南側溝とする東西道路である。両側溝の心々距離は4.0ｍ、路面幅は2.2～2.8ｍを測る。路面は、硬化面などの痕跡は確認できなかったが、茶黄色土の整地層（図４北壁３の69・70層）が広がる。この層は249SD106を越え249SB010の北側でも一部検出されたことから、249SB010と道路が一連の整地事業により構築されたと考えられる。道路の施設時期は、整地層である茶黄色土の出土遺物から、８世紀中頃になる。

この道路の性格を条路として考えた場合、鏡山条坊案や90ｍ条坊案とは位置が一致しない。また、現状で東西の延長は他の調査で確認されていない。特徴として両側溝の内、北側溝249SD025の規模が大きいことや、遺構面に高低差（道路面が高く般若寺跡側が低くなる）があることが挙げられる。北

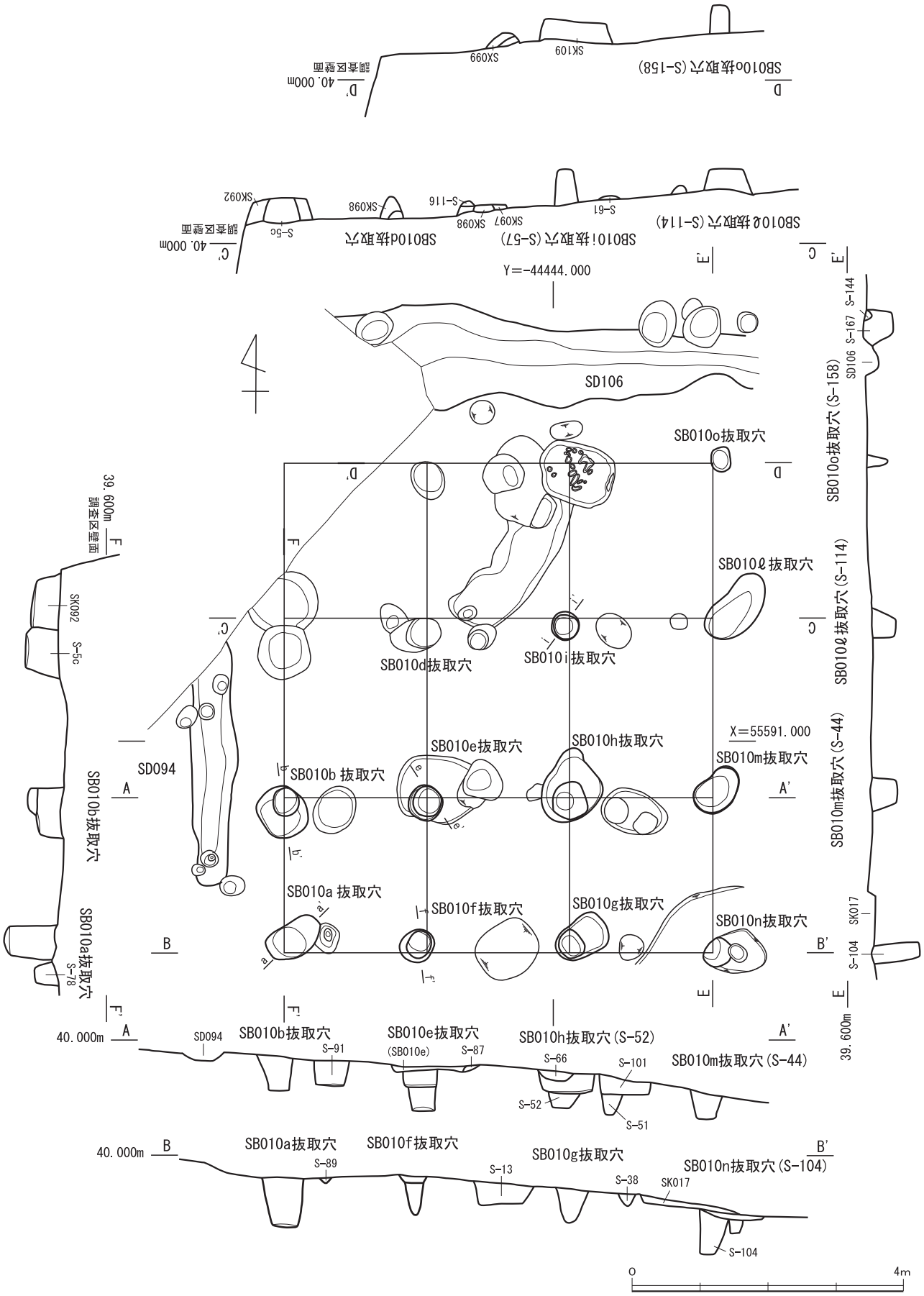


図14. 249SB010抜取穴実測図（1/80）

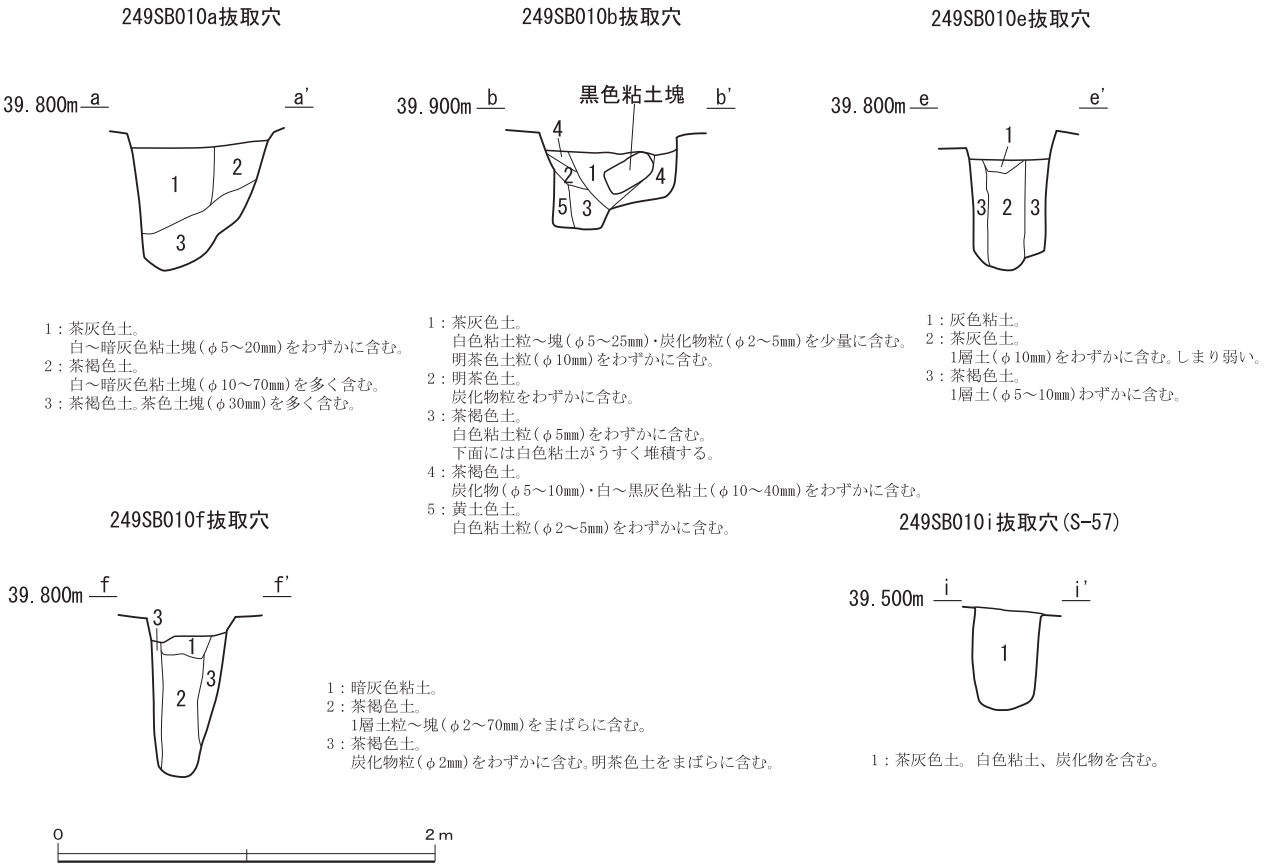


図15. 249SB010抜取穴土層図（1/40）

側丘陵からの排水処理だけでなく般若寺跡の南側を区画する道路（溝）の可能性もあるが、北側溝249SD025の北側がすぐに調査区外になるため、詳細は不明である。

c．溝

249SD025（図６）

249SF015の北側溝になる。第１面遺構である249SD020とほぼ同一の位置にあり、調査区北側の張出区で検出したS-112を西側延長部分と判断した。最大幅2.0ｍ、深さは西側で0.9ｍ、東側では一段落ちて1.1ｍになる。溝底の高低差は東端で0.5ｍ程低くなる。また、溝の両岸では、遺構面に高低差があり、道路面より北側が一段低くなる。埋土は、下層から淡黄色粘質土、暗灰色砂質土、暗灰色土、暗褐色土、暗褐色砂質土になる（図４北壁３の72～76層）。出土遺物の年代は、下層の淡黄色粘質土、暗灰色土が８世紀中頃、上層は年代が特定できない。８世紀中頃から埋没が始まり、最終的な埋没は249SD106と同じ８世紀後半と考えられる。

249SD094（図14）

249SB010西側の雨落溝かと考えられる南北溝である。深さ0.2ｍ、最大幅0.7ｍを測る。溝底は、北側がわずかに低くなる。埋土は、暗灰褐色土である。出土遺物の時期は奈良時代になる。

249SD106（図６）

249SF015の南側溝になる。西側では幅1.4ｍ、深さ0.7ｍであるが、東に行くほど細く浅くなり東

端では延長が確認できなかった。溝底の高低差は、東端が 0.9 m程低くなる。埋土は、下層から暗茶色土、暗茶褐色土になる（図３北壁２・張出区西壁の 59・60 層）。出土遺物から埋没年代は８世紀後半になる。

ｄ．土坑

249SK109（図 16）

調査区ほぼ中央に位置する。遺構壁面に焼土面が確認できる焼土坑である。規模は長軸 1.14 m、短軸 0.9 m、深さ 0.4 mを測る。壁面には被熱の痕跡が見られ、還元により硬化した部分は黄灰色、酸化層は赤褐色を呈する。これらの痕跡は、底面及び底面から上 0.08 m程の高さまでは見られない。埋土は３層あり、いずれも炭化物片が混入するが、最も多量に含むのは最下層である。また、炭化物を除去した底面には小穴が多数検出された。性格は不明であるが、類例が宮ノ本遺跡（『太宰府・佐野地区遺跡群 19』太宰府市教育委員会　2005 年）で確認されている。

(3) 第３面遺構

ａ．掘立柱建物

249SB010（図 17 ～ 19、図版１-２、２-５・６）

第２面遺構の 249SB010 抜取穴と同一位置にて、第２面の整地層を除去後に掘形を検出した。３間×３間の総柱式掘立柱建物で 16 基の掘形のうち、調査区内で確認できる 15 基すべてを検出した。掘形は、平面形状が長方形状で長辺 1.2 ～ 1.6 m、短辺 1.0 ～ 1.2 mである。深さは 0.4 ～ 0.9 mとバラつきがあるが、これは図 17 のＡ－Ａ’～Ｄ－Ｄ’方向の断面見通し図で示すように、底面の深さを揃えながらも、

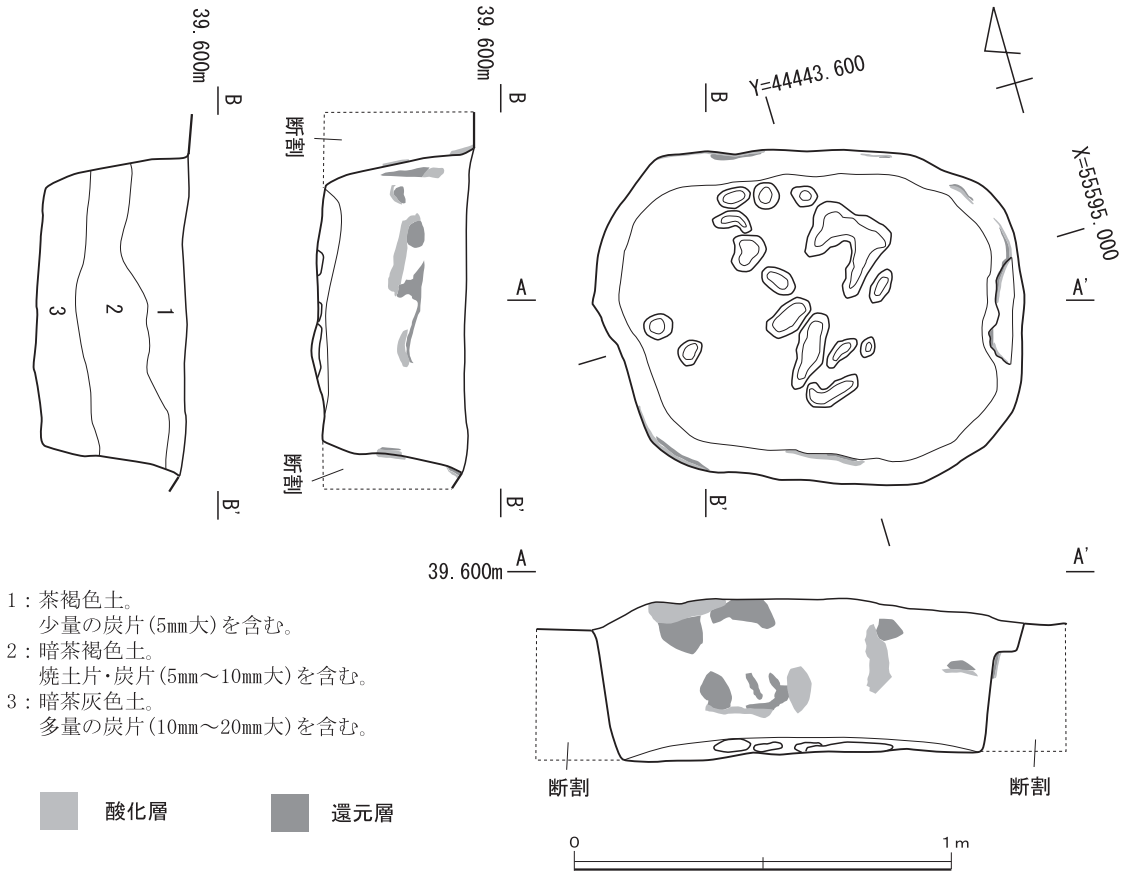


図16. 249SK109実測図（1/20）

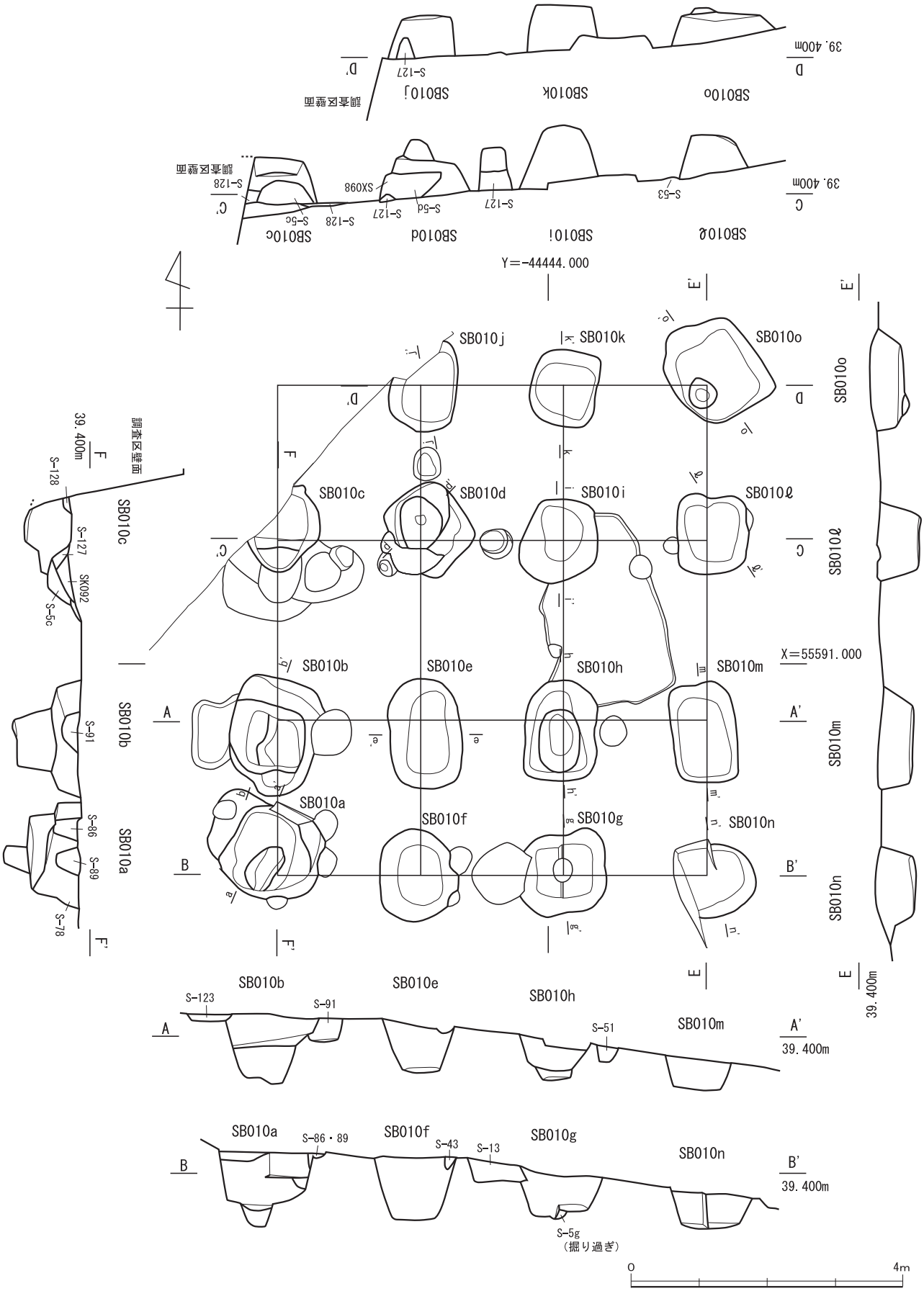
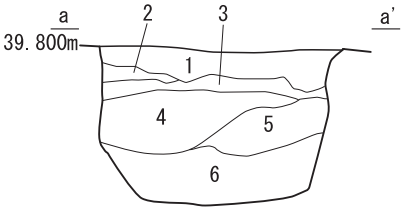


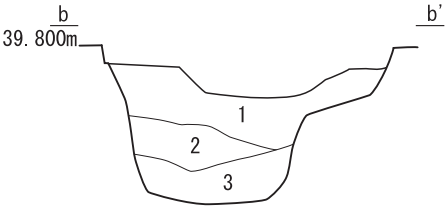
図17. 249SB010実測図（1/80）

249SB010a



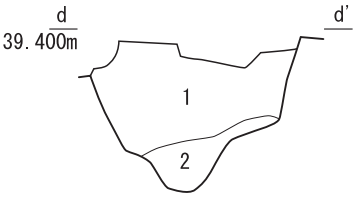
1：淡黄色土。
白色粘土塊（φ10～100㎜）・明茶色土を多く含む。
2：暗灰色土。
白色粘土（φ5～20㎜）・明茶色土塊（φ10㎜）を多く含む。
3：明茶色土。
淡黄色土少量と炭化物粒（φ2～3㎜）をわずかに含む。
4：淡黄色土。
1層に類似するが、明茶色土の割合が少ない。
5：明茶色土。
淡黄色土塊（φ20～50㎜）を多く含む。
6：淡黄色土。
白色粘土塊（φ15～30㎜）を多量と
明茶色土をわずかに含む。

249SB010b



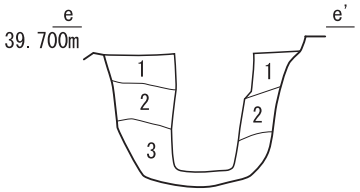
1：淡明茶色土。
白色粘土粒（φ5～10㎜）・黒色粒（φ1～3㎜）
を少量に含む。
2：淡明茶色土。
淡黄色土塊・白色粘土粒（φ10～20㎜）を多く含む。
3：明茶色土。
白色粘土（φ20㎜）をわずかに含む。

249SB010d



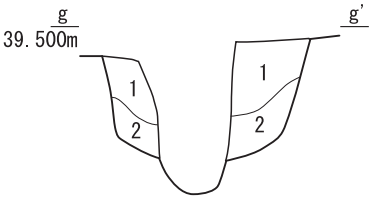
1：茶灰色土。
茶色土塊を多くと、
白色粘土粒（φ2～15㎜）をわずかに含む。
2：黒褐色土。

249SB010e



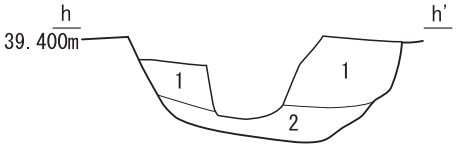
1：茶色土。
白色粘土粒（φ1～10㎜）、
黄土色土粒（φ3～5㎜）をわずかに含む。
2：茶灰色土。
白色粘土粒（φ1～15㎜）をわずかに含む。
3：茶灰色土。
白色粘土粒（φ2㎜）・黄土色土粒（φ2～5㎜）をごくわずかに含む。

249SB010g



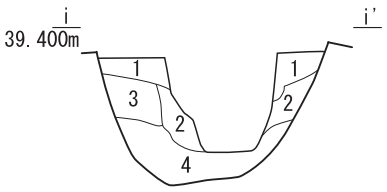
1：黄褐色土。
白色粘土粒（φ2～15㎜）をわずかに含む。
2：茶色土。
白色粘土（φ2～30㎜）をわずかに含む。

249SB010h



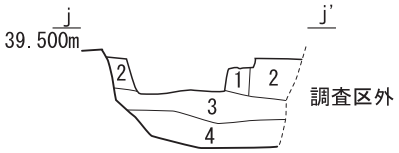
1：茶色土。
白色粘土（φ3～15㎜）を少量と、
炭化物粒（φ2～10㎜）をわずかに含む。
2：茶色土。
白色粘土粒（φ2～5㎜）をわずかに含む。

249SB010i



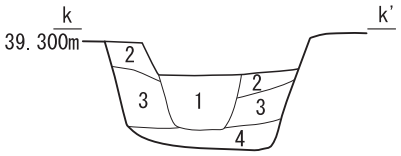
1：茶色土。
白色粘土（φ5～20㎜）を少量に含む。
2：黒灰色土。
白・黄色粘土（φ10～40㎜）・茶色土塊を少量に含む。
3：暗茶灰色土。
白色粘土（φ10㎜）わずか、茶色土塊を少量に含む。
4：暗褐色土。
茶色土塊を多くと、白色粘土粒（φ2～10㎜）をわずかに含む。

249SB010j



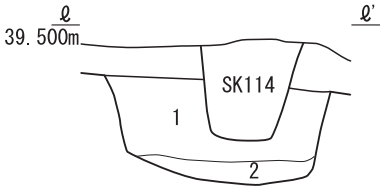
1：黒褐色土。
2：黒灰色土。
茶色土（φ5～30㎜）を少量に含む。
3：黒灰色土。
茶色土少量と、
白色粘土粒（φ1～10㎜）をわずかに含む。
4：黒褐色土。
茶色土塊をわずかに含む。

249SB010k



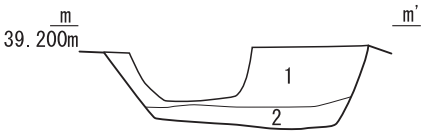
1：暗茶灰色土。　柱抜取痕。
白色粘土（5～40㎜）・炭化物粒（φ2～15㎜）を少量に含む。
2：茶色土。
白色粘土（φ5～20㎜）・炭化物粒（φ5㎜）をわずかに含む。
3：茶灰色土。
白色粘土粒（φ2～10㎜）をごくわずかに含む。
4：暗褐色土。
茶色土塊を少量に含む。

249SB010ℓ



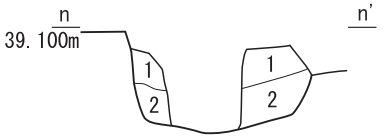
1：茶褐色土。
白色粘土粒（φ2～20㎜）を多く含む。
2：黒色土。
1層土塊・白色粘土粒（φ5～30㎜）を少量に含む。

249SB010m



1：茶色土。
白色粘土粒（φ1～25㎜）を少量に含む。
2：暗褐色土。
茶色土塊を多く含む。

249SB010n



1：茶灰色土。
白色粘土（φ2～30㎜）を少量に含む。
2：茶灰色土。
白色粘土（φ1～15㎜）をごくわずかに含む。

0　2m

図18. 249SB010掘形土層図１（1/40）

斜面地形のため、西側は深く東側は浅くなっている。建物の主軸方位は柱が残っていないため抜取穴と掘形の中心点をもとに検討したが、座標北に対してほとんど振れを認めることはできなかった。建築時期としては、掘形から８世紀前半、掘形を覆う整地層からは８世紀前半から中頃の遺物が出土している。

近辺では、般若寺第３・４次調査で検出した東西５間×南北２間以上になる掘立柱建物（SB010）の掘形が一辺 1.7 ～ 1.8 m、深さ 1.4 ～ 1.6 mで、主軸方位はＮ－１°強－Ｅである。

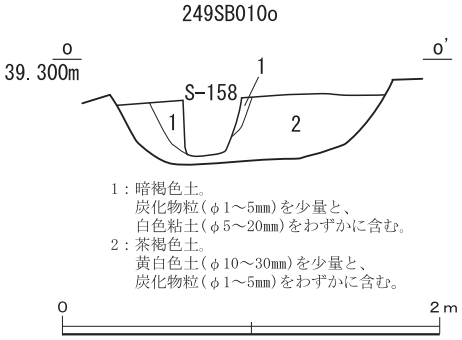


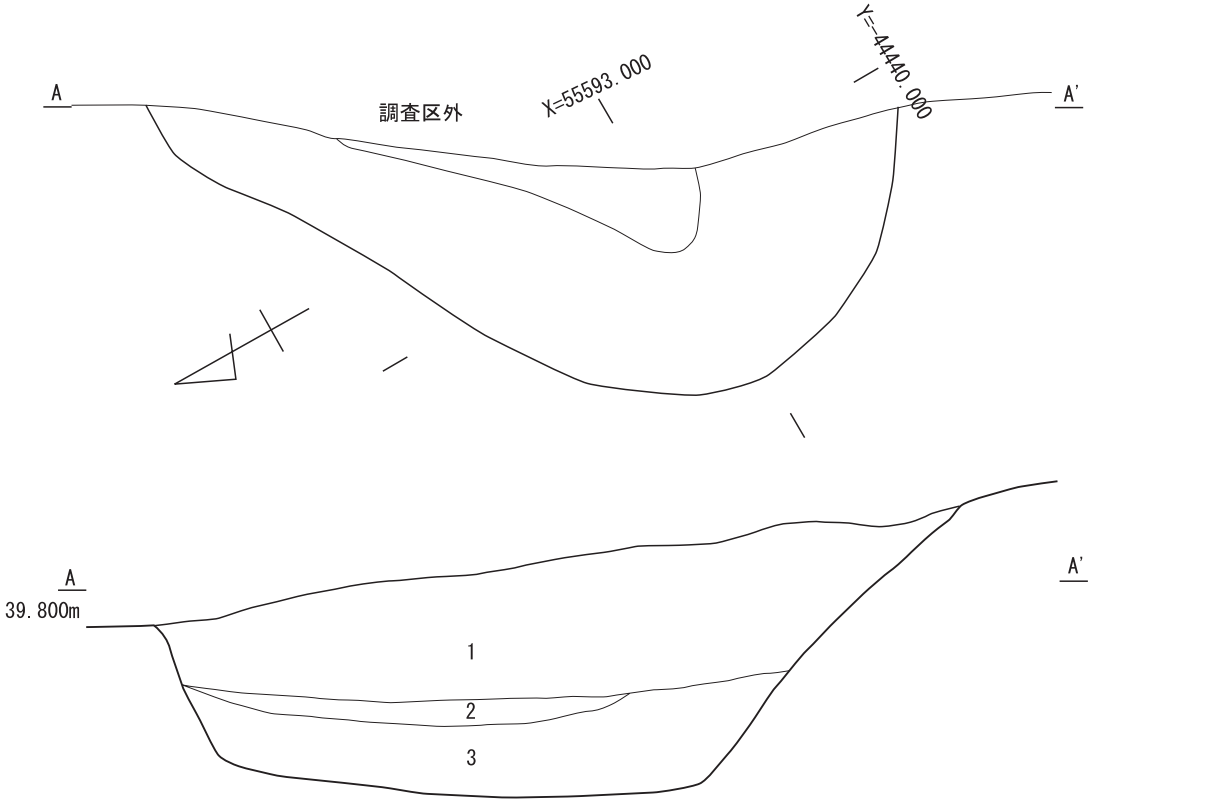
図19. 249SB010掘形土層図２（1/40）

(4) 第４面遺構

ａ．土坑

249SK193（図 20）

調査区南壁付近に位置する。遺構の大半が調査区外に広がっているため、全体的な規模は不明である。現状で１辺が 1.98 m、深さ 0.6 mを測り、第４面遺構の中ではもっとも大きな遺構である。出土遺物の時期は古墳時代になる。



１：黒褐色土。炭化物（2～10mm大）をわずかに含む。
２：暗褐色土。粘性が強い。
３：黒褐色土。２層より黒味・粘性が強い。

0　1m

図20. 249SK193実測図（1/20）

４．遺物

本調査では、瓦類、土器、鋳型や羽口を含む冶金関連遺物などがコンテナ（内法 38 × 54 × 14cm）にして 62 箱出土した。その内、丸・平瓦が 40 箱と半数以上を占める。そのため丸・平瓦については、全点を対象に重量と凹凸面、側面、端面などの調整技法を記録した。以下の文中で使用した側面や端面の調整記号や全点を分析した結果は、「Ⅵ．まとめ　５．瓦窯 SX001 の生産瓦と般若寺跡の瓦について」を参照されたい。

(1) 第１面遺構出土遺物

ａ．瓦窯

249SX001 出土遺物（図 21、図版３－１）

赤褐色土

土師器

坏×皿（１）　口縁部の小破片で、内外面に回転ナデを施し、口縁端部は右上がりにナデ上げている。

瓦類

平瓦（２）　凸面は縦位の縄叩きで、凹型台からの剥離を良くするための離れ砂が付着する。凹面に布目痕と糸切痕が残る。側面はＢ3a で、３面のヘラ削りになる。

炭化物層

土師器

皿×坏（３）　口縁部の小破片で、内外面に回転ナデが施される。内面に一部黒変がみられる。

皿ａ（４）　復元口径 14.4 ㎝を測る。底部外面は回転ヘラ切りで、見込みには黒色の煤が付着している。胎土中に白色雲母細片と赤色粒子がやや多く含まれる。

瓦類

平瓦（５）　凸面は縦位の縄叩きで離れ砂が付着する。凹面に布目痕と糸切痕が残る。端面は面取り調整をしないＡである。

鉄製品

鉄釘（６・７）　いずれも軸部先端が細く尖る断面方形の角釘で、頭部を欠損している。

赤色土

瓦類

平瓦（８）　凸面は縦位の縄叩きで離れ砂の付着はない。凹面に布目痕と糸切痕が残る。側面はA2a で、端面はＡになる。

掘形

土師器

坏ａ（９）　復元口径 13.0 ㎝で、底部外面に回転ヘラ切りの痕跡と板状圧痕が残る。体部外面下位と見込みに煤状炭化物が付着し、胎土中には白色雲母細片がやや多く含まれる。ⅥＡ期に位置づけられる。

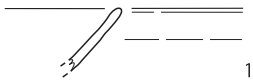
土製品

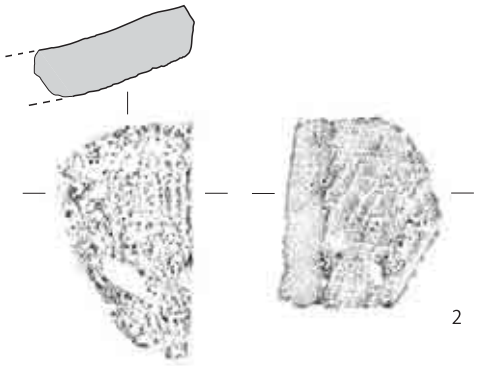
用途不明土製品（10）　底径が 11.0 ㎝の円筒形に復元される。ナデと指押さえによって成形され、内面のみ熱を受けて灰色を呈するため、鋳型の可能性が考えられる。鋳型面の真土は完全に剥離したものと思われる。胎土中にスサを少量含み、籾殻状の圧痕が外面全体に観察される。

瓦類

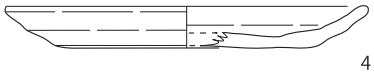
平瓦（11）　凸面は、縦位の縄叩きと離れ砂が付着する。凹面の布目は粗い。側面はＢ2b になる。

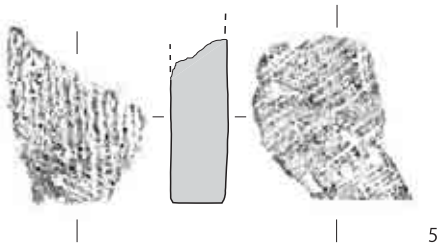
249SX001 赤褐色土

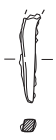


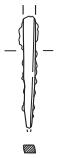


249SX001 炭化物層



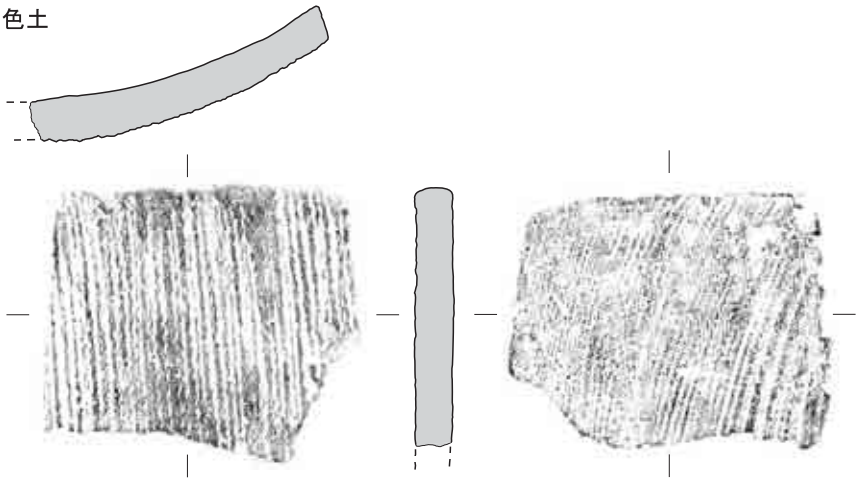




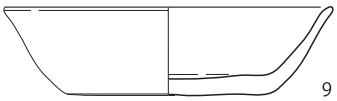


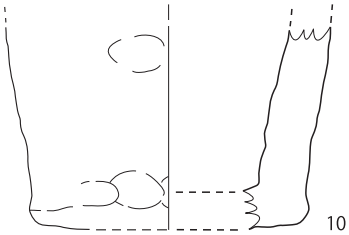
0 5cm

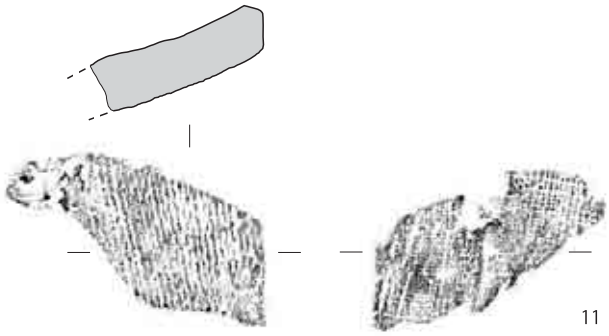
249SX001 赤色土



249SX001 掘形







0 10cm

図21. 249SX001　出土遺物

ｂ．瓦窯関連遺構

249SK018 出土遺物（図 22、図版３－２）

土師器

坏ａ（１） 底部の小破片で、底部外面に回転ヘラ切りの痕跡と体部外面下位にヘラ切り直前の面取りがみられる。

坏ｃ（２） 貼り付け高台をもつ底部の小破片で、外面に強い回転ナデが施される。胎土中には白色雲母細片と赤色粒子がやや多く含まれる。

土製品

鋳型（３） 現存高 4.7cm、現存最大幅 5.7cm を測る。胎土が粗く器面が脆いため本来の形状は若干損なわれているが、ナデと指押さえによって成形されたものと思われる。弾丸形状の鋳型面は、現存高 3.2cm、最大径 1.4cm で、境界は不明瞭であるが精良な真土を貼り付けており、熱を受けて硬化している。特に底面から約 1.5cm 上までの表面が黒く焼けており、この部分の寸法と形状が暗茶色土出土の投弾形の鉄製品（図 39-4）と同じため、この製品の鋳型の可能性もある。またこの黒変した部分の上端にバリ状に突出した粘土の付着がみられるため、この部分より上に別の型を貼り付けて型を完成させ、製品を取り出す際に上の型をはずした可能性も考えられる。

瓦類

軒丸瓦（写真 105 ～ 107） いずれも小破片のため型式不明である（型式番号は、九州歴史資料館が設定した「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館 2002 年による。他の軒瓦も同じ）。

丸瓦（４） 玉縁式である。胴部と玉縁を一体の粘土板で作り肩部に粘土を足す手法であるが、肩部の粘土が剥落しており、粘土板の糸切痕が確認できる。凹面にＵ字状の痕跡があるが、性格は不明。

平瓦（５） 凸面に粗い斜格子叩きがある。凹面は布目痕を残す。側面は、分割破面を残す１ａ。端面は、凹面側を幅 1.1cm 程にヘラ削りしたＢである。

鉄製品

鉄鏃（６） 方頭平根斧箭式鏃である。錆によって不明瞭ではあるが箆被を有すると思われる。現存長 4.75 cm、鏃身部長 3.1 cm、刃部最大幅 1.6 cm、刃部厚 0.2 cm、頸部幅 0.5 cm、頸部厚 0.4 cmを測る。

鉄釘（７・８） いずれも断面方形の角釘で、頭部を欠損し、軸部先端は細く尖り屈曲している。釘を打ち込んだ際に突き抜けた先端を叩いて折り曲げた可能性も考えられる。

249SK022 出土遺物（図 22・23、図版３－３～６）

須恵器

坏（９） 口縁部の小破片で、内外面に回転ナデが施される。全体に灰色を呈するが、外面の口縁部周辺のみ暗灰色に変化する重ね焼きの痕跡がみられる。

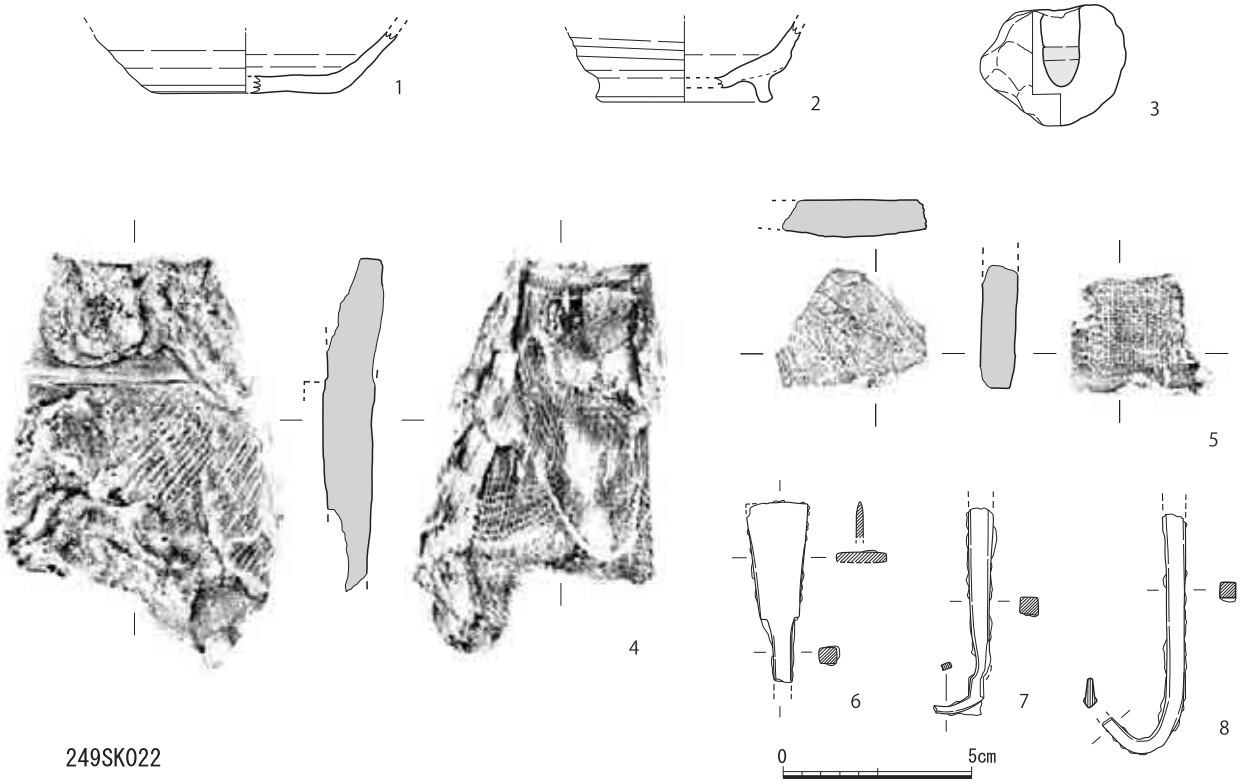
壷（10） 壷の肩部破片で、内外面に回転ナデが施される。外面全体にオリーブ褐色の自然釉がかかっており、東海産の可能性がある。

土師器

坏ａ（11 ～ 15） いずれも底部の小破片で、14 のみ復元口径 12.4 cmを測る。11 ～ 14 の底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残り、そのうち 11･12 には体部外面下位にヘラ切り直前の面取りが観察できる。また 12 は内外面に部分的に煤状炭化物が付着し、11・14 は胎土中に赤色粒子がやや多く含まれる。11 ～ 13、15 はⅥＡ期、14 はⅥＢ期に位置づけられる。

大椀（16） 口縁部の小破片で、体部が直線的に立ち上がる形状をとる。

249SK018



249SK022

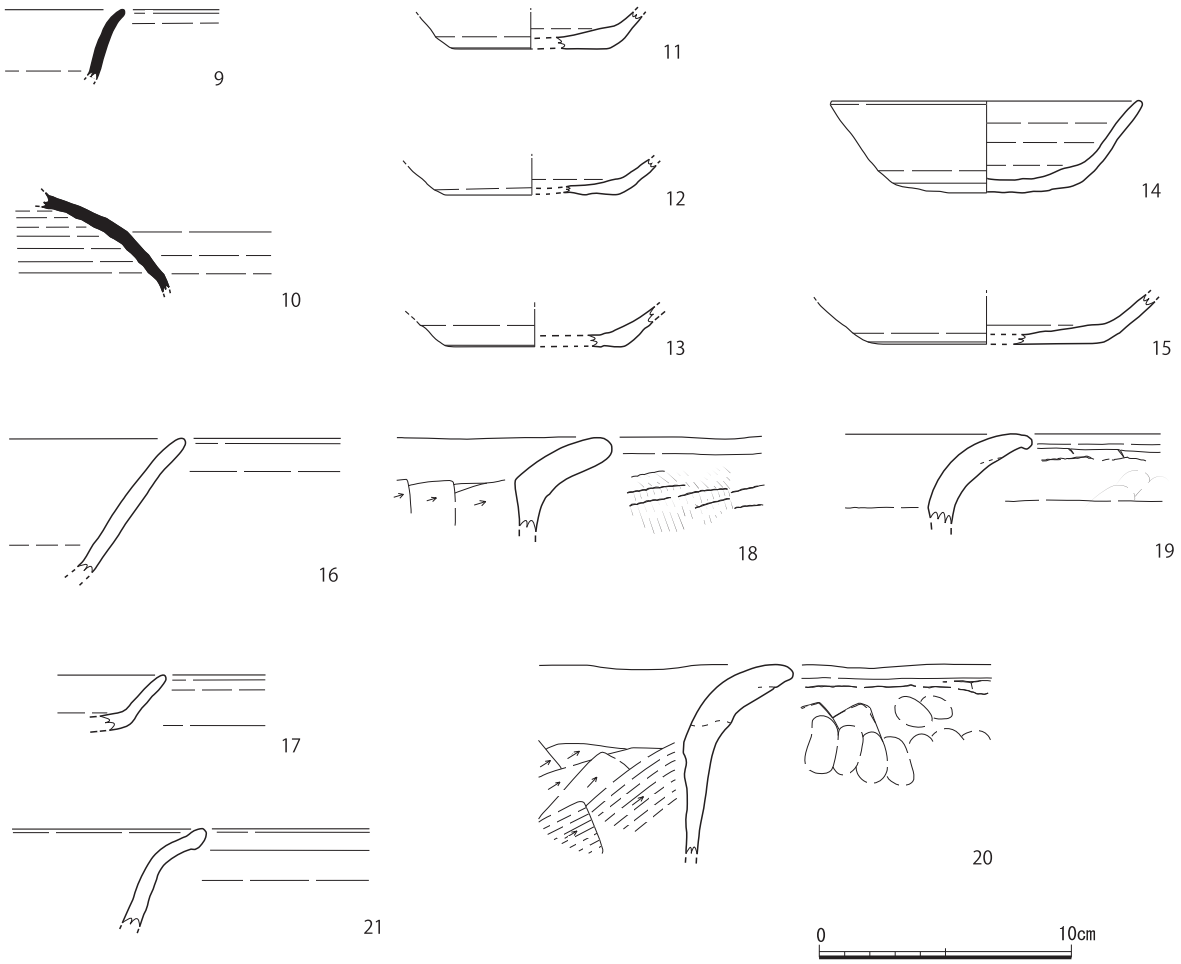


図22. 249SK018・022　出土遺物（1）

249SK022

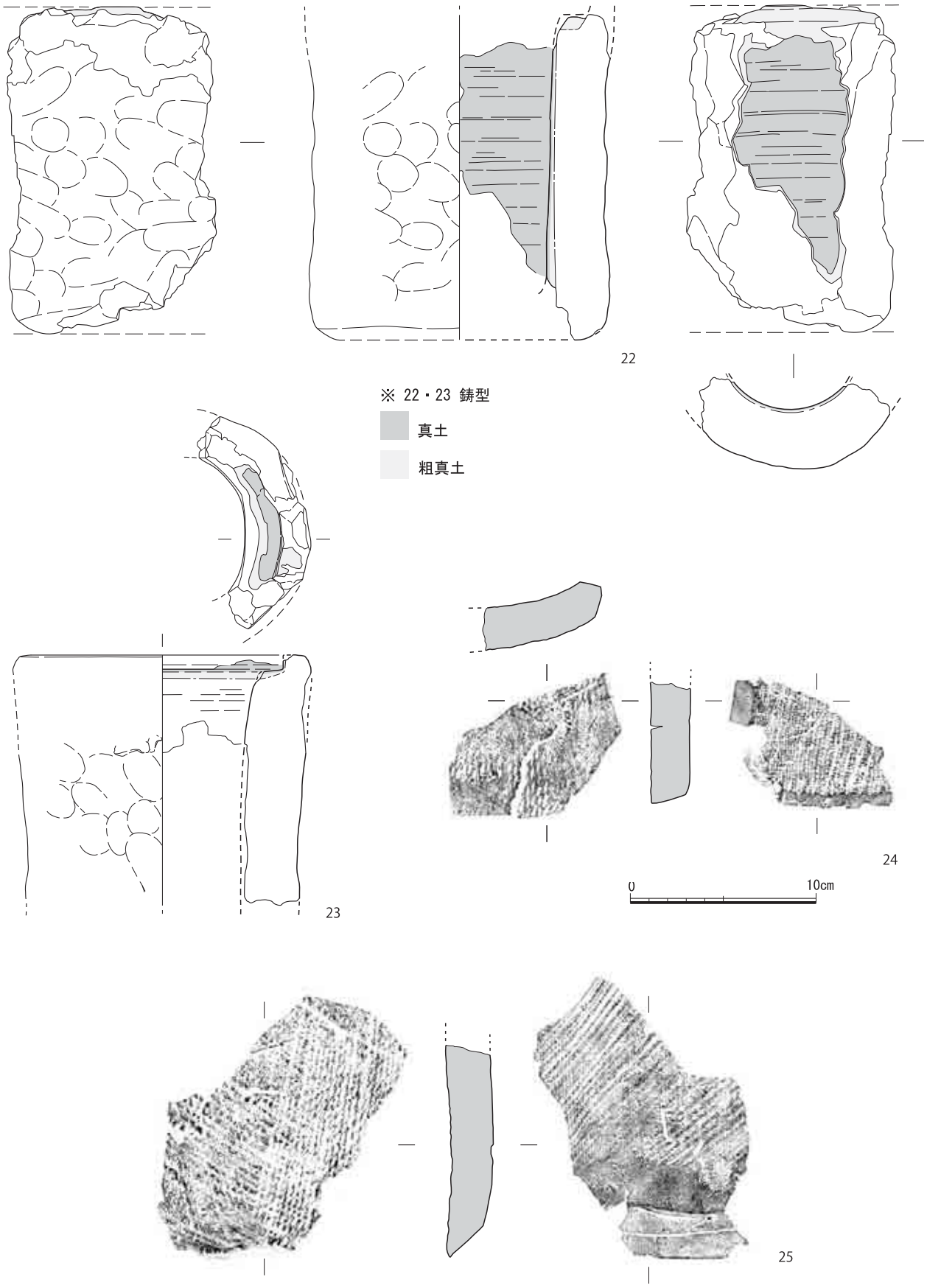


図23. 249SK022　出土遺物（2）

皿（17）　口縁部小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。胎土に赤色粒子がやや多く含まれる。

甕ａ（18 ～ 20）　いずれも口縁部の小破片である。外面調整は、18 は口縁部までハケ目の痕跡が残るが、19・20 は器面磨耗のためかハケの端部痕跡しか残っておらず、接合痕と成形時の指頭痕が明瞭に残るため、やや粗雑な印象を受ける。胴部内面はいずれもケズリで、20 はケズリに用いた板状工具の板目痕が残る。

鉢（21）　精製の鉢である。口縁部の小破片で、口縁端部の立ち上がりがだれた形状をとる。器面磨耗のため調整は不明である。胎土中に白色雲母細片を多く含み、赤色粒子もやや多く含む。

土製品

鋳型（22・23）　いずれも径が約 16 ㎝の円筒形に復元され、22 は現存高 14.6 ㎝を測る。外面はナデと指押さえによる成形で、胎土はやや粗く、スサを少量含む。内側の鋳型面は、22 は細かい砂粒を含む粗真土と精良な真土が部分的に残存するが、23 は粗真土・真土ともに剥落している。表面は、ともに挽型による製作と推測される回転に伴う擦痕がみられる。またいずれも口縁部に段を有するが、この部分が中子を支持する巾木と考えられ、この部分に残存する真土も熱を受けて硬化している。249SX001 掘形出土の土製品（図 21-10）も同様の鋳型の可能性があるが、この円筒形の鋳型でどのような製品を作ったかは製品が出土していない現段階では不明である。

瓦類

平瓦（24・25）　いずれも凸面は、縦位か斜位の縄叩きで離れ砂が付着する。24 は、焼け歪みによるものかひび割れがある。側面はＢ3a で、３面のヘラ削りになる。端面は凹面側を幅 1.1cm 程にヘラ削りしたＢである。25 は、糸切痕が凹凸面ともに明瞭に残る。端面は凹面側を幅 4.9cm 程にヘラ削りしたＢである。

249SK029 出土遺物（図 24 ～ 26）

須恵器

蓋４（１）　復元口径 13.8 ㎝を測る。天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、天井部内面は不定方向のナデ、それ以外は内外面に回転ナデが施される。口縁端部を丸く仕上げている。

坏ｃ（２）　復元口径 17.4 ㎝で、底部外面は回転ヘラ切り後、底部外側に低い高台を貼り付けている。体部は直線的に立ち上がり、内外面に回転ナデ、見込みには不定方向のナデが施される。

甕ａ（３）　口縁部の小破片で、平坦な口縁端部の下位に一条の浅い沈線が巡る。内外面とも回転ナデが施され、口縁部内面には重ね焼きの痕跡が残る。

土師器

坏ａ（４～９）　４～７はいずれも底部外面に回転ヘラ切り、見込みには不定方向のナデが施され、体部外面下位にはヘラ切り直前の面取りがみられる。４には成形時の粘土紐巻上げ痕も残る。６は復元口径 12.8 ㎝。内面全体と外面が部分的に黒変し炭化物の付着もみられるため、灯明皿の可能性がある。胎土中には白色雲母細片がやや多く含まれる。７は口径 13.6 ㎝で、板状圧痕が残る。いずれもⅥＡ期に位置づけられる。８・９は器面磨耗のため調整は不明である。８は復元口径 13.2 ㎝、９は底部外面に板状圧痕が残り、胎土中に赤色粒子がやや多く含まれる。

坏×皿（10）　口縁部の小破片で、口縁端部はやや肥厚する。器面磨耗により調整は不明。胎土中に赤色粒子を多く含み、白色雲母細片もやや多く含む。

坏ｃ（11）　底部外面と見込みに成形時の粘土紐巻上げ痕が残る。胎土中に赤色粒子を多く含む。

椀 c1（12）　底部外面を回転ヘラ切りした後ナデを施し、高台を貼り付けている。また、内外面ともに部分的に黒変し、胎土には赤色粒子と白色雲母細片がやや多く含まれる。

249SK029

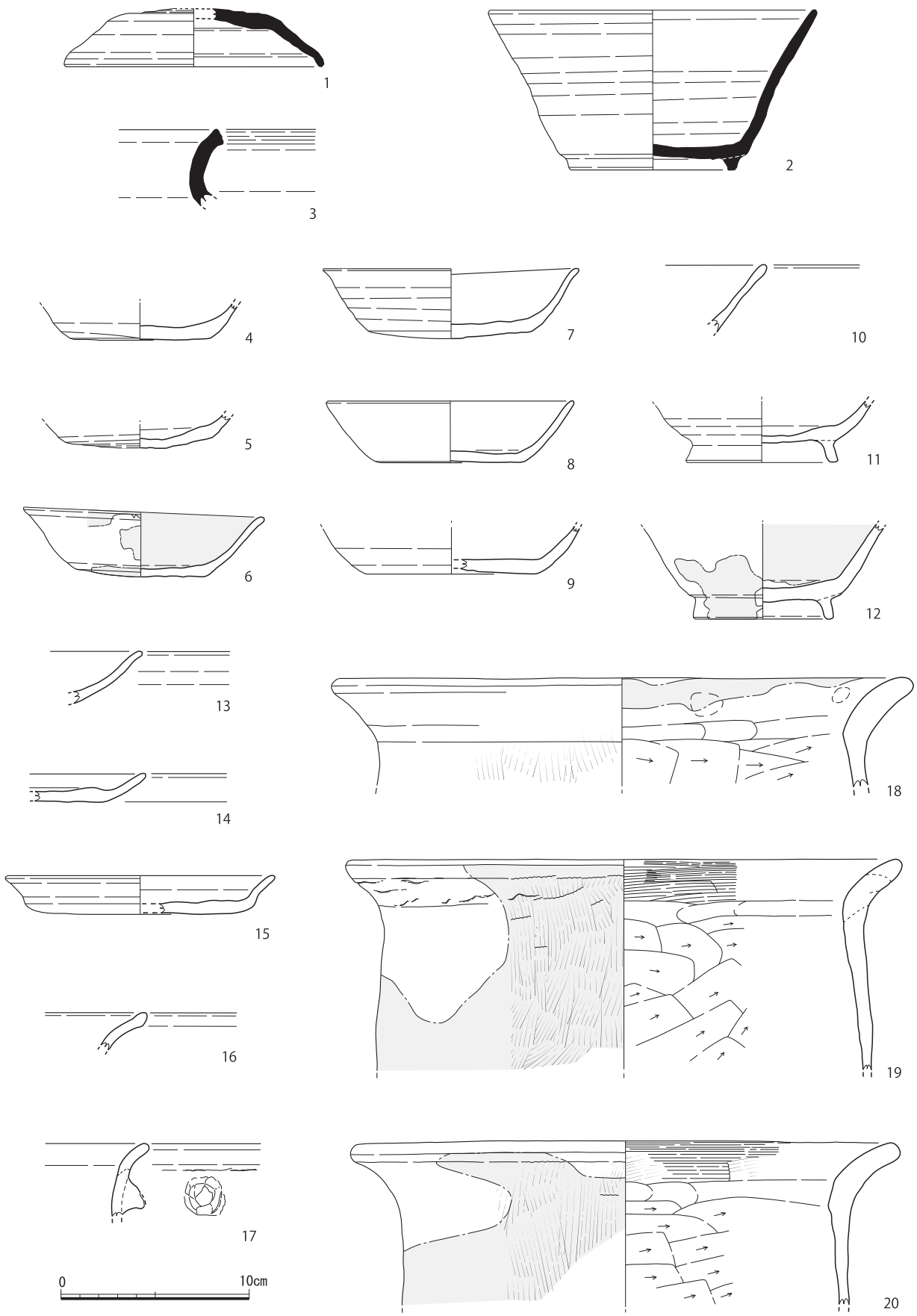


図24. 249SK029　出土遺物（1）

249SK029

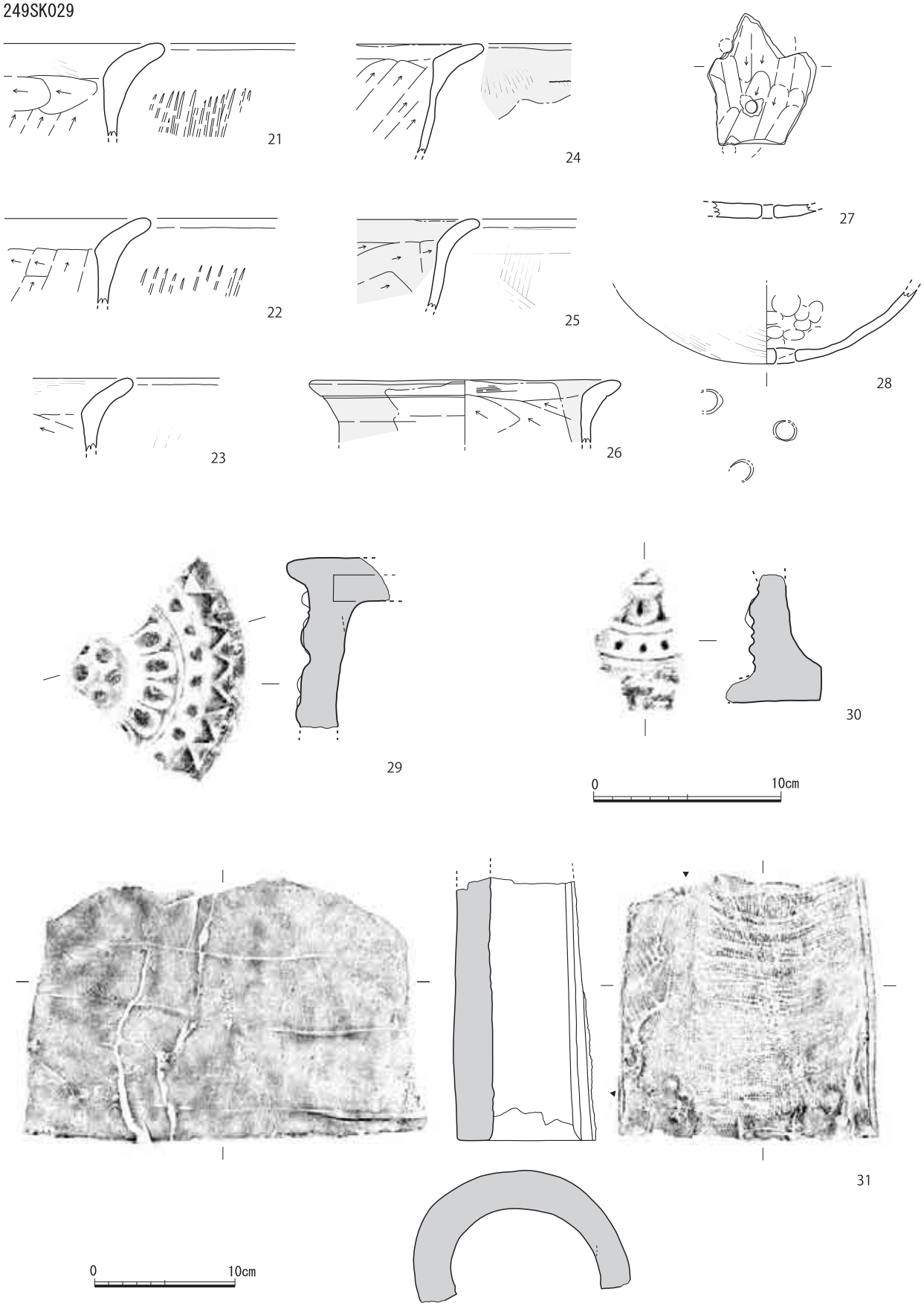


図25. 249SK029　出土遺物（2）

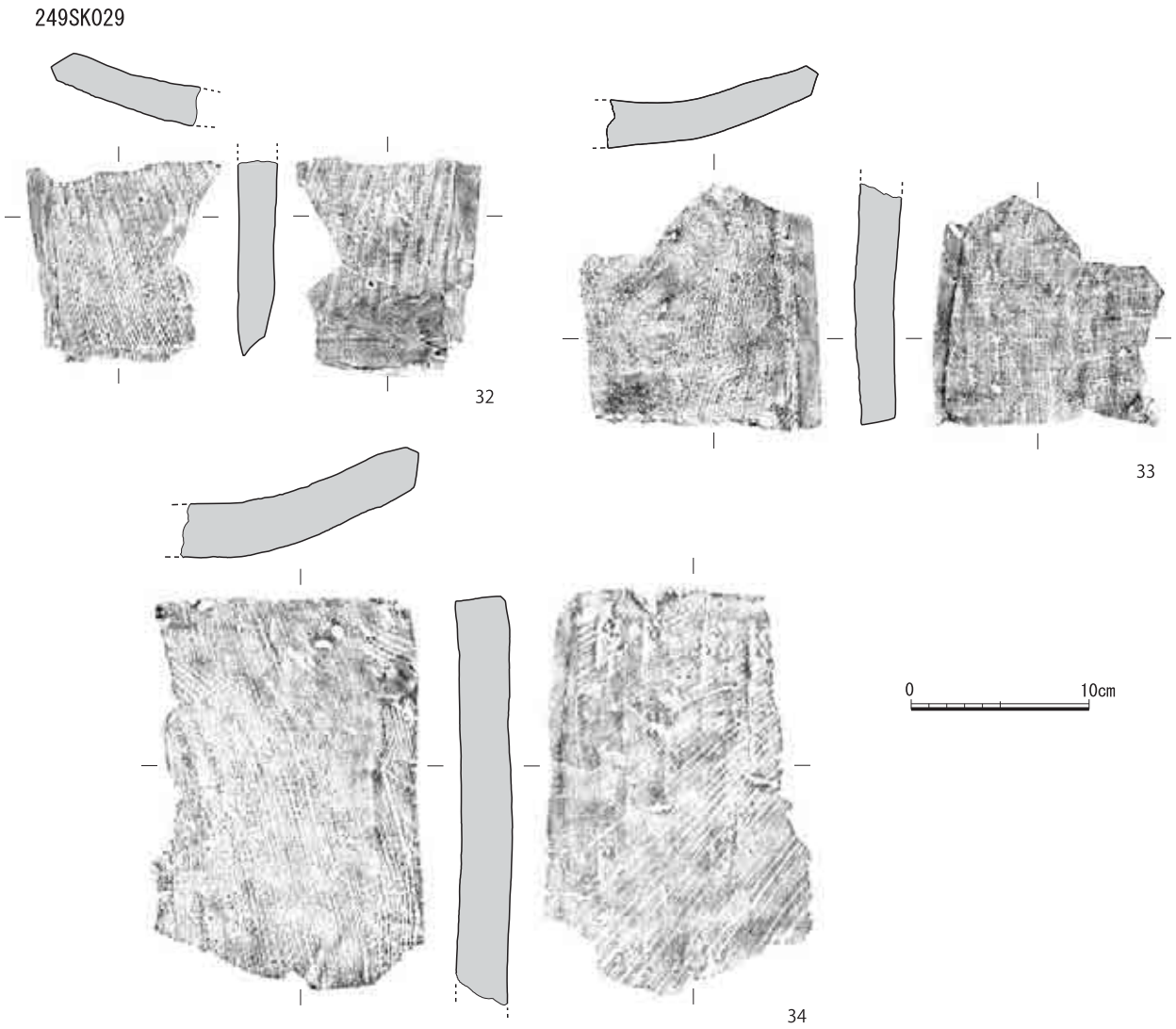


図26. 249SK029　出土遺物（3）

坏ｄ（13）　口縁部の小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。体部が若干内湾して立ち上がり、口縁部がやや外反する。

皿ａ（14・15）　いずれも器面磨耗のため調整は不明であるが、14 は底部外面に回転ヘラ切りの痕跡が残り、胎土に赤色粒子をやや多く含む。15 は復元口径 14.3 ㎝で、胎土に白色雲母細片を多く含む。

鉢（16）　精製の鉢の口縁部小破片で、口縁端部の立ち上がりがだれた形状をとる。器面磨耗のため調整は不明。胎土に赤色粒子と白色雲母細片をやや多く含む。

把手付甕（17）　精製の甕の口縁部小破片で、内外面に回転ナデが施され、ナデと指押さえで成形された小さな把手が貼り付く。胎土に白色雲母細片をやや多く含む。

甕ａ（18 ～ 25）　18 ～ 20 は復元口径が約 27 ～ 30 ㎝で、いずれも外面は縦方向のハケを施し、胴部内面はナデを一段残してケズリを施している。18 は口縁部に丁寧なヨコナデを施すが、部分的に指頭痕が残る。口縁部内面には煤が付着し、胎土には白色雲母細片が多く含まれる。19・20 は口縁部内面にも横方向のハケを施し、外面に煤が付着する。21 ～ 25 は口縁部の小破片で、いずれも外面はハケ、胴部内面はケズリを施し、口縁部をヨコナデで仕上げている。21・22 は外面に粗いハケが施され、21 は口縁部内面にもハケ目の痕跡が残る。23 も口縁部内面にハケ目の痕跡がみられ、胎土に白色雲母細

片を多く含む。24 は口縁部内外面に煤が付着し、胎土に白色雲母細片をやや多く含む。25 は胎土が比較的精良で、口縁部も薄く調整も丁寧である。内面の大半が黒変している。

甕（26） 復元口径 16.6 ㎝を測る。胴部内面はケズリが施されるが、それ以外はヨコナデが施される。口縁部外面にはヨコナデによる擦痕が沈線状に巡り、口縁部内面にはハケ目の痕跡がわずかに残る。内外面ともに広範囲に黒変し、煤状炭化物も付着している。胎土には白色雲母細片が多く含まれる。

甑（27･28） 27 は多孔式の甑の底部小破片である。現状で３孔確認でき、内外両面から穿孔している。外面は回転ヘラケズリ後不定方向のナデを施し、内面はケズリ状の強いナデを施す。胎土は比較的精良で白色雲母細片をやや多く含む。28 も底部の破片で、現状で３孔を内外両面から穿孔している。胴部は内湾して立ち上がり、外面は縦方向のハケを施し、内面はケズリ後に指押さえを底部全体に施している。

土製品

炉材（写真 146・147） 厚さ 3.0 ～ 4.5cm の炉材の小破片で、ナデと指押さえによって成形され、上端は平坦面をなす。胎土中にスサを少量含む。本調査では同様の破片が数点出土しており、内面に溶解面がみられないため、未使用の甑炉の最下段か地中に埋め込んで甑炉を乗せる炉台の可能性が考えられる。

瓦類

軒丸瓦（29・30） 29 は 291 型式である。瓦笵の痛みがなくシャープな文様である。軒丸瓦は、瓦当面（文様面）の裏面に丸瓦を接合して製品になるが、本例は丸瓦の先端を未加工で取り付ける。30 は小破片のため型式認定が難しいが 290Ｂ型式であろうか。裏面に突帯が残る。

丸瓦（31） 凸面は縄叩きの後、板状工具ですり消す。凹面には粘土板のとじ合せ痕跡がある。凹凸面に焼け歪みによるひび割れがある。側面は、分割破面を残す a0 手法。

平瓦（32 ～ 34） いずれも縦位もしくは斜位の縄叩きである。32 は、凸面に離れ砂が付着し、凹面には糸切痕、布目痕が残る。側面はＢ3a、端面は凹面側を幅 3.2cm 程にヘラ削りしたＢである。33 は、凹面に布目痕と糸切痕が残る。側面はＢ3a、端面はＡである。34 は、凸面に離れ砂が付着し、凹面に側板痕らしきものを残すが断定はできない。側面はＢ3a、端面は凹面側を幅 1.3cm 程にヘラ削りしたＢである。

ｃ．溝

249SD007 出土遺物（図 27）

土師器

坏（１） 口縁部の小破片で、内外面に回転ナデが施される。胎土に白色雲母細片と赤色粒子を多く含む。

瓦類

軒丸瓦（２） 全体に摩滅が激しいが 290Ｂ型式になる。取り付ける丸瓦は、先端が未加工のものを接合している。

249SD020（赤茶色土）出土遺物（図 27・28、図版４－１）

須恵器

蓋３（３） 天井部外面は回転ヘラ切り後に粗い回転ナデを施し、見込みは不定方向のナデを施している。口縁端部をわずかに折り曲げ外面を面取りしており、口縁部整形の工程に①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。

甕×壷（４） 口縁部の小破片で、外面に一段の稜を有する。内面全体に自然釉がかかり、外面も気泡が多く器面が粗い。

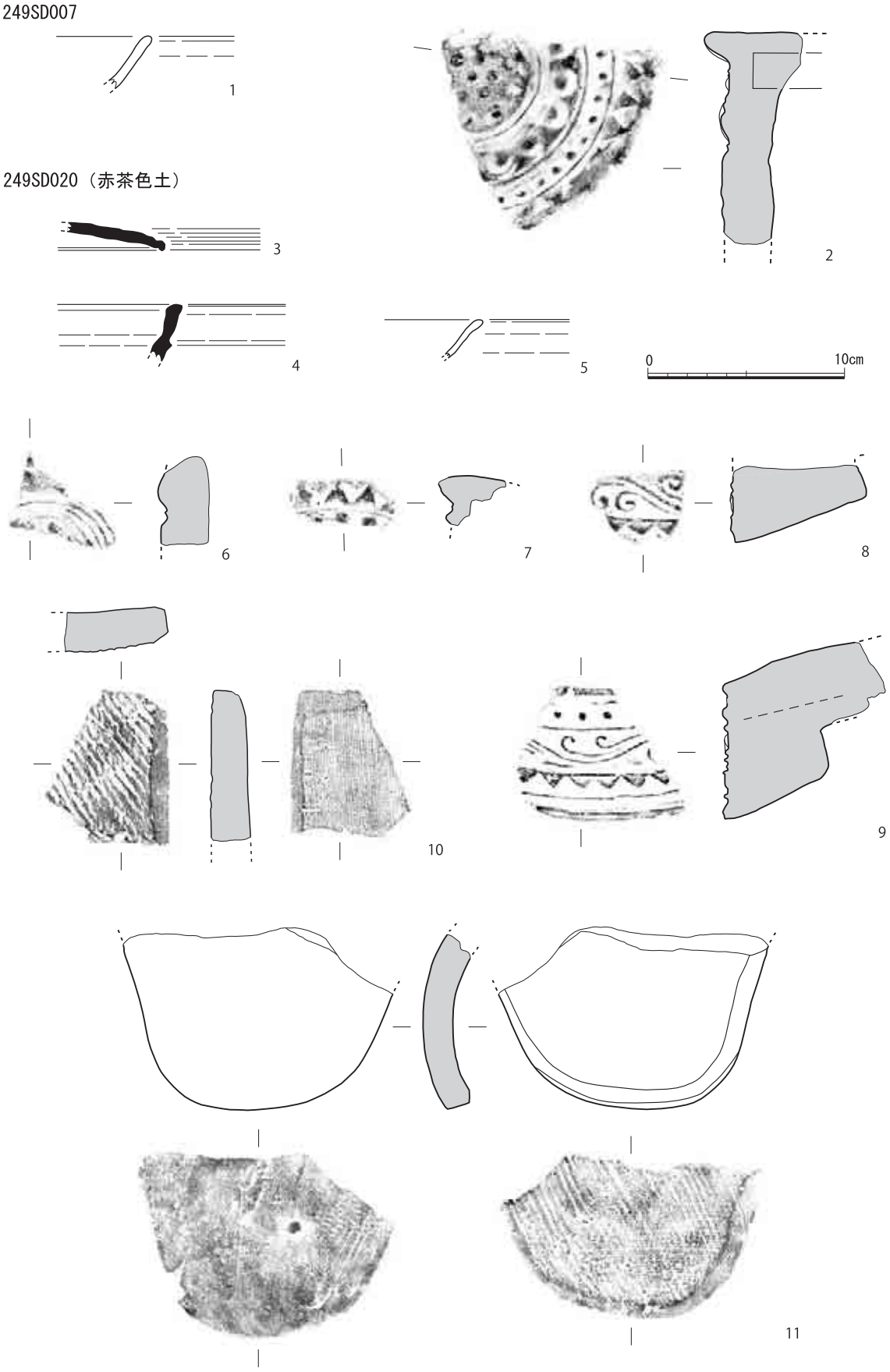
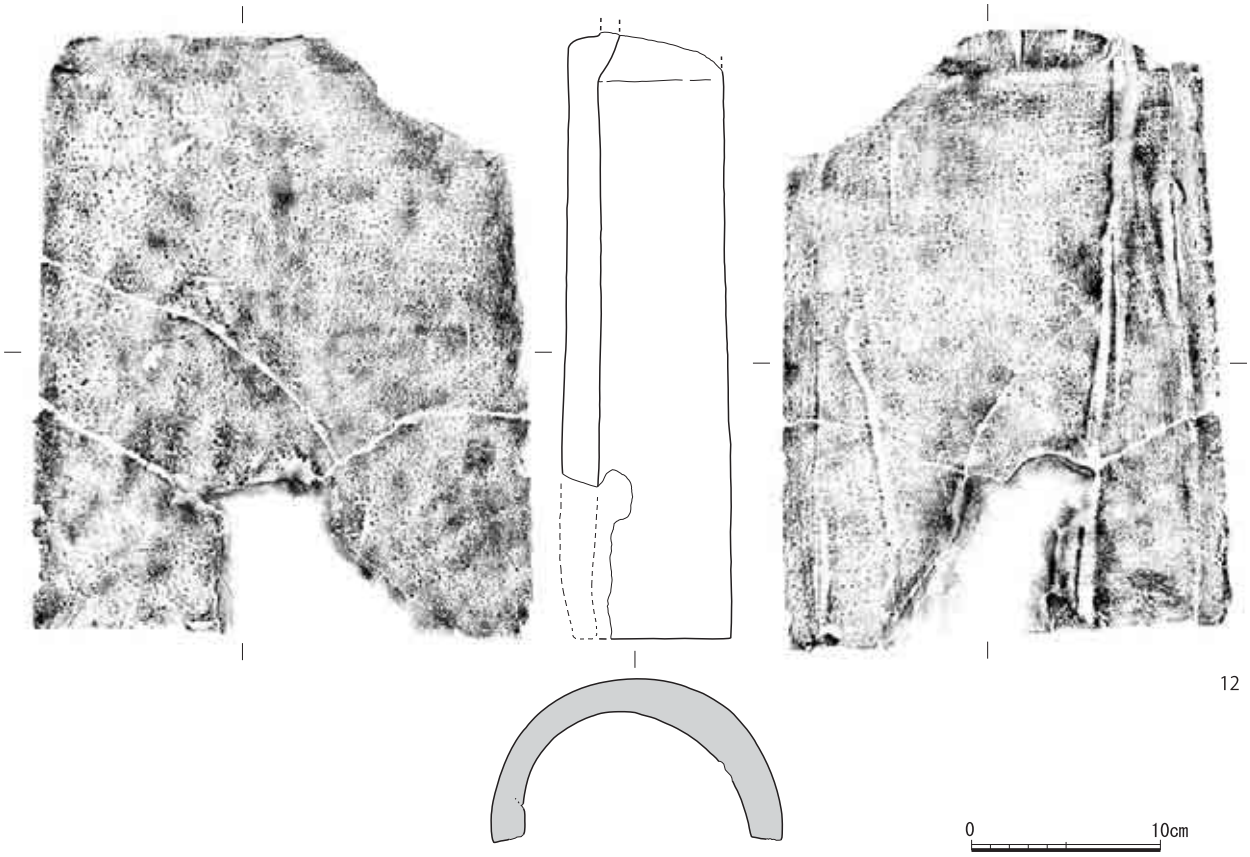
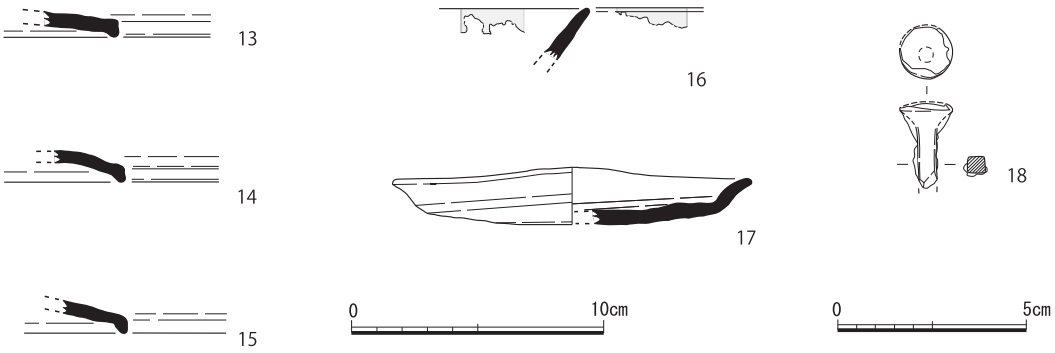


図27. 249SD007・020（赤茶色土）出土遺物（1）

249SD020（赤茶色土）



249SD020



249SD021

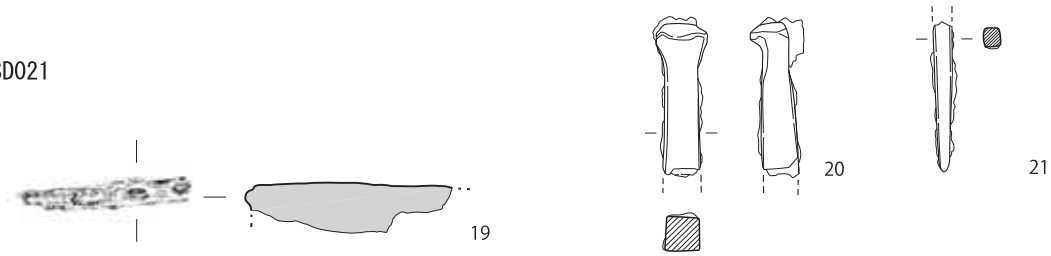


図28. 249SD020（赤茶色土）・020・021　出土遺物（2）

土師器

皿（５）　口縁部の小破片で、口縁端部がやや肥厚する。器面磨耗のため調整は不明である。

瓦類

軒丸瓦（６・７）　６は、型式不明。全体に摩滅が激しいが、中房と弁の一部が残る。７も型式不明。凸鋸歯文と珠文の一部が残る。

軒平瓦（８・９）　８は、560Aa 型式であろうか。内区は左偏向唐草文、下外区は凸鋸歯文である。顎が粘土板貼り付けのため、その部分のみ剥離したものか。９は、560Ba’型式である。この型式は、文様が外界線のさらに外側の笵端が突線として表出されており、560Ba 型式と同笵であるか断定できないため 560Ba’型式として設定されている。顎に粘土板貼り付けの痕跡が残る。

平瓦（10）　凸面は斜位の縄叩き。凹面には布目痕が残るが側板痕はなし。側面は、凹凸面を削る３面調整で 2c になる。端面は、凹面側を幅 1.1cm 程にヘラ削りしたＢである。

丸瓦（12）　全体に摩滅が激しいが、凹面に粘土板の閉じあわせ目が残る。側面は a0 手法である。

面戸瓦（11）　棟の下で丸瓦と平瓦の間をふさぐ道具瓦である。焼成前に成形する切り面戸瓦である。

土製品

炉壁（写真 156・157）　器壁が厚く、緩やかに内湾する形状を呈する。全体に熱を受けて硬化しているが、特に内面が灰色に硬く焼きしまり、鉄錆状の赤褐色の滓が薄く付着する。胎土は白色砂粒を多く含み、外面側には銅の緑青が多く含まれる。炉の中段にあたる可能性がある。

その他

銅塊（写真 158－１・２）　いずれも扁平な銅の塊で、全体が緑青に覆われ、やや緩やかに内湾する形状を呈する。１は 223 ｇ、２は 74 ｇを量る。

鉄滓（写真 158－３）　不整円形の鉄塊系遺物で、酸化土砂が付着し、黄褐色から茶褐色を呈する。全面に 0.5 ～ 1 ㎝程の木炭を含み、含鉄部も部分的にみられる。

249SD020 出土遺物（図 28）

須恵器

蓋 3（13 ～ 15）　いずれも口縁部の小破片で、断面三角形の口縁端部を有する。13・14 は器面磨耗のため口縁部整形の工程は不明であるが、15 は①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。また 13 は外面に重ね焼きの痕跡が傷として残り、14 は口縁部内面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡がみられる。

坏×皿（16）　口縁部の小破片で、器面が磨耗するが、内面のみ回転ナデの痕跡が残る。内外面に煤状の炭化物が付着し、灯明皿の可能性がある。

皿ａ（17）　焼け歪みを生じており、復元口径 14.2 ㎝を測る。底部外面は回転ヘラ切り後に回転ナデが施され、粘土紐巻上げ痕と板状圧痕も残る。見込みは不定方向のナデが施される。また口縁部外面と見込みに円形に暗灰色を呈する重ね焼きの痕跡がみられる。

鉄製品

鉄釘×鋲（18）　やや扁平な円形の頭部と断面方形の軸部からなるが、軸部先端と頭部上面が欠損する。軸部欠損部分がやや太いため円頭釘の可能性もある。

土製品

炉壁（写真 168・169）　炉の内面が溶解し、黒色にガラス質化しており、鉄錆状の滓が部分的に付着する。気泡も多くみられる。外面は赤く焼けており、胎土中には白色砂粒が多く含まれる。炉底や胴部とは異なり、溶解面の方が外反するため、通風孔装着部位の壁面である可能性も考えられる。

249SD021 出土遺物（図 28）

瓦類

軒平瓦（19）　上外区の破片で、わずかに珠文が確認できる。型式は不明である。

鉄製品

鉄釘（20・21）　20 は断面方形の角釘の軸部上端を叩き折り曲げて頭とする叩折釘で、薄く叩くことで頭部幅が軸部より広がっている。軸部先端は欠損する。頭部の折れ曲がった部分は短いが、破損によるものかは鉄銹により不明である。21 も断面方形の角釘で、頭部は欠損し、軸部先端は細く尖る。

ｄ．土坑

249SK003 出土遺物（図 29）

瓦類

軒丸瓦（１）　239 型式にあたる。瓦笵の痛みが激しいようで文様の細部が表出されていない。丸瓦は先端未加工のものを取り付ける。

平瓦（２）　凸面は縦位の縄叩きで、離れ砂が付着する。凹面には布目痕と糸切痕が残る。側面は、B3a である。

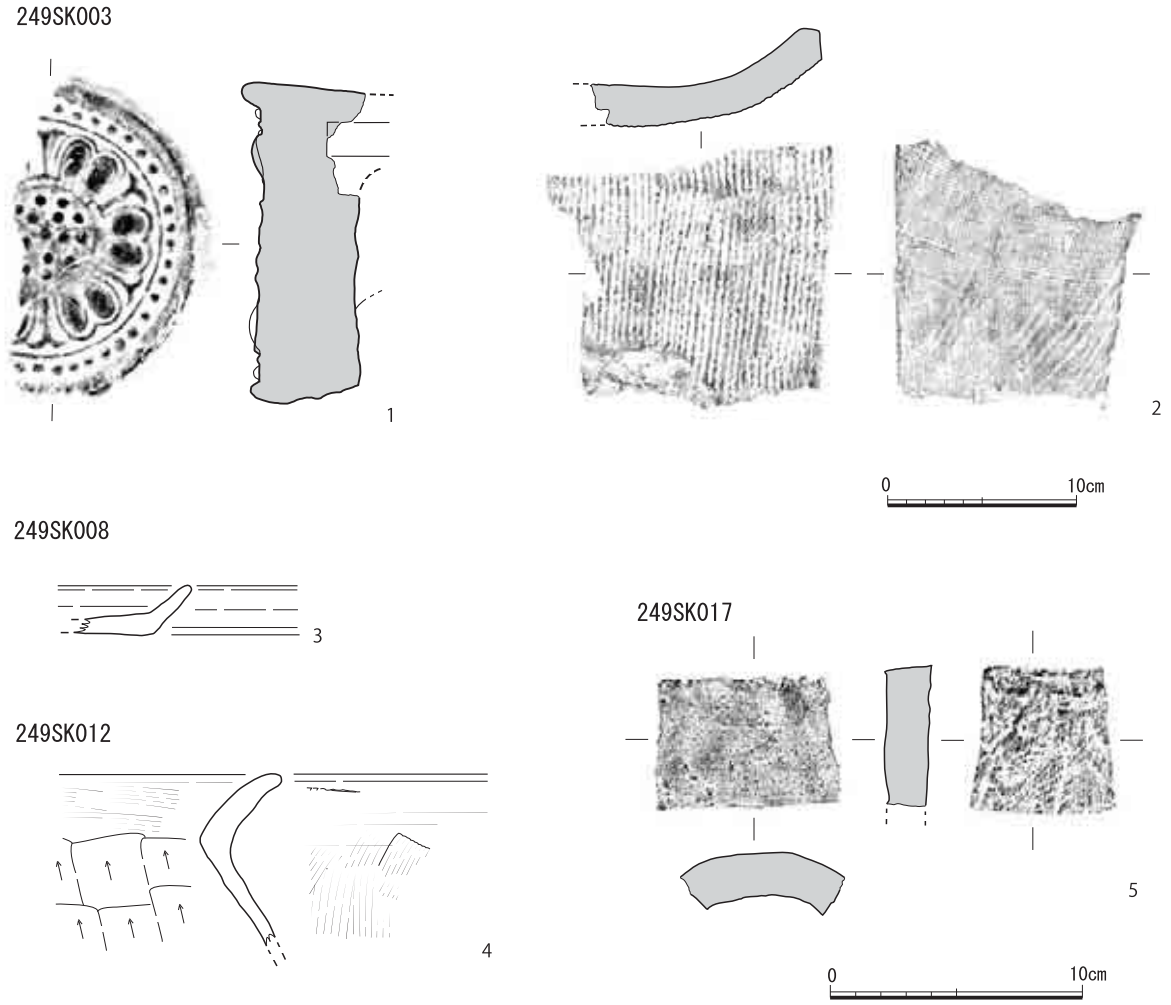


図29. 249SK003・008・012・017　出土遺物

249SK008 出土遺物（図 29）

土師器

皿ａ（３） 底部外面に回転ヘラケズリ、それ以外は内外面に回転ナデが施される。口縁端部と内面に部分的に黒変がみられ、胎土中には赤色粒子がやや多く含まれる。

249SK012 出土遺物（図 29）

土師器

甕ａ（４） 外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケを施した後、口縁部をヨコナデで仕上げている。胴部内面はケズリが施される。

249SK017 出土遺物（図 29）

瓦類

道具瓦（５） 用途不明の道具瓦である。丸瓦を幅 6.5cm で切り落とす。側面は分割破面を残す a0 である。端部の片方が割れているため完形品ではない。

249SK059 出土遺物（図 30）

須恵器

蓋３（１・２） いずれも口縁部の小破片で、断面三角形の口縁端部を有する。器面磨耗のため口縁部整形の工程は不明である。２は口縁部外面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡がみられる。

皿（３） 口縁部の小破片で、外面は器面が磨耗するが、内面は回転ナデの痕跡が明瞭に残る。重ね焼きのためか、内面と口縁端部は灰色を呈するが、外面は黄灰色の一部分を除き暗灰色を呈する。

土師器

把手付甕（４） 把手部分をほとんど欠損するが、把手貼り付け時のナデが明瞭に残る。外面調整は丁寧なナデで、胴部内面にはケズリを施し、口縁部はヨコナデで仕上げている。

土製品

羽口（５） 先端部分を若干欠損するが、径 6.5 ～ 7.5 ㎝、現存長 13.5cm と短く、先端から元口側に向かって裾が緩やかに広がる。ナデと指押さえによって成形される。通風孔の径は 1.9 ～ 3.8 ㎝で、先端と元口側の両側から細棒状の道具で押し広げた痕跡が残り、器壁の厚さは 1.1 ～ 2.7 ㎝を測る。全体は淡黄色を呈するが、先端と元口側のみ熱による硬化によって青灰色に変化し、元口側の通風孔にわずかに黒色のガラス質化したものが付着する。胎土は砂粒の粒子が細かく、比較的精良である。

瓦類

軒平瓦（６） 560Ｂa’型式である。体部凸面は縦位の縄叩きの後、横位の縄叩き。凹面はヘラ削りとすり消しにより布目痕を消す。

平瓦（７） 全体に磨滅が激しいが、凸面は縄叩きである。凹面には、布目痕と側板痕、粘土板のとじ合せ痕がある。側面はA2b、端面は凹面側を幅 1.1cm 程にヘラ削りしたＢである。

249SK063 出土遺物（図 31）

須恵器

壷（１） 頸部から肩部までの破片で、内外面に回転ナデが施される。頸部と肩部の境目には接合痕がみられ、成形時の指押さえの痕跡も一周する。

瓦類

軒平瓦（２） 型式は不明である。下外区のみで凸鋸歯文のみが残るが、文様が重複しているため２度押しの可能性がある。

平瓦（３・４） ともに凸面は縦位の縄叩きで、糸切痕を残し離れ砂も付着する。凹面は布目痕と糸

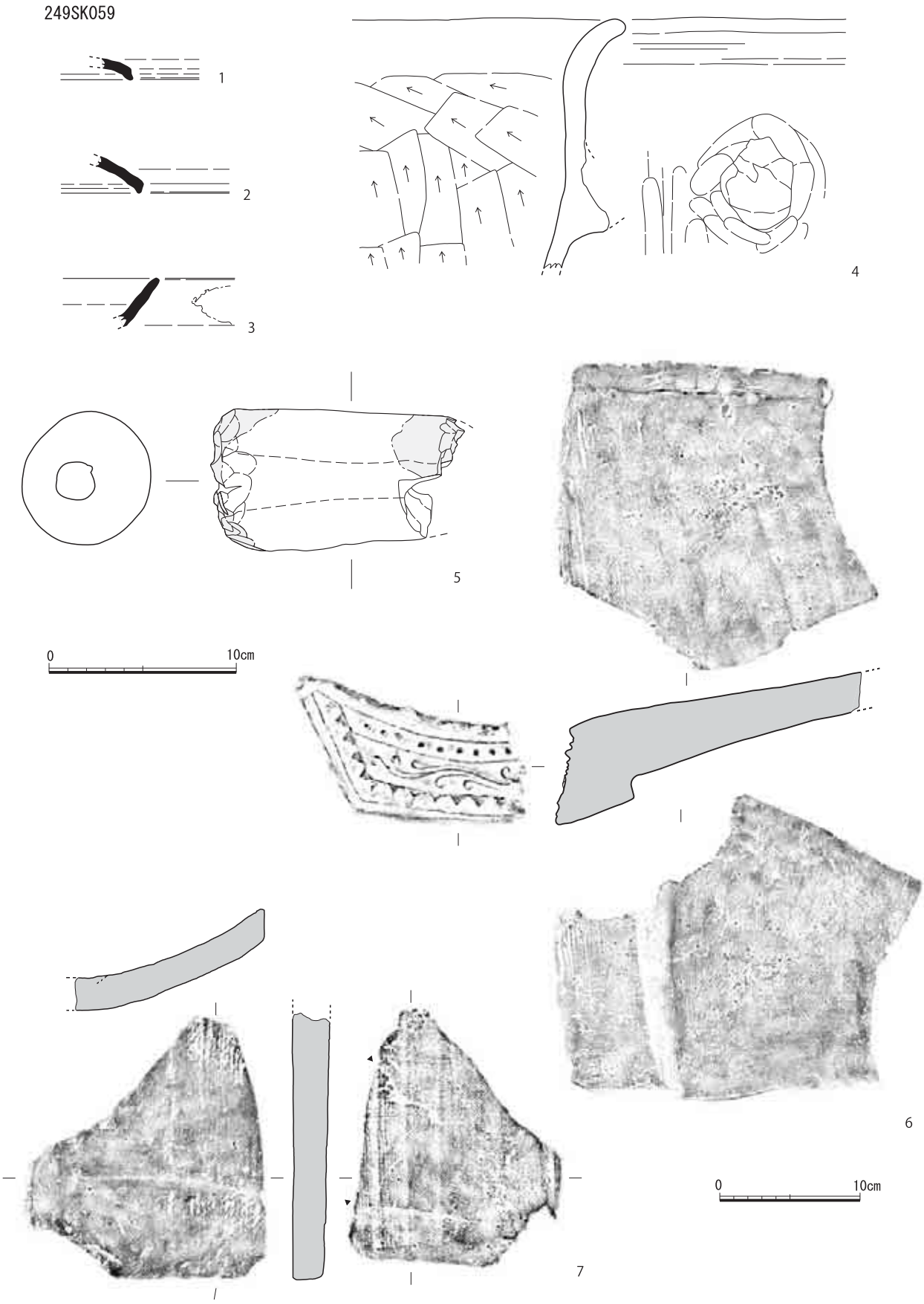


図30. 249SK059　出土遺物

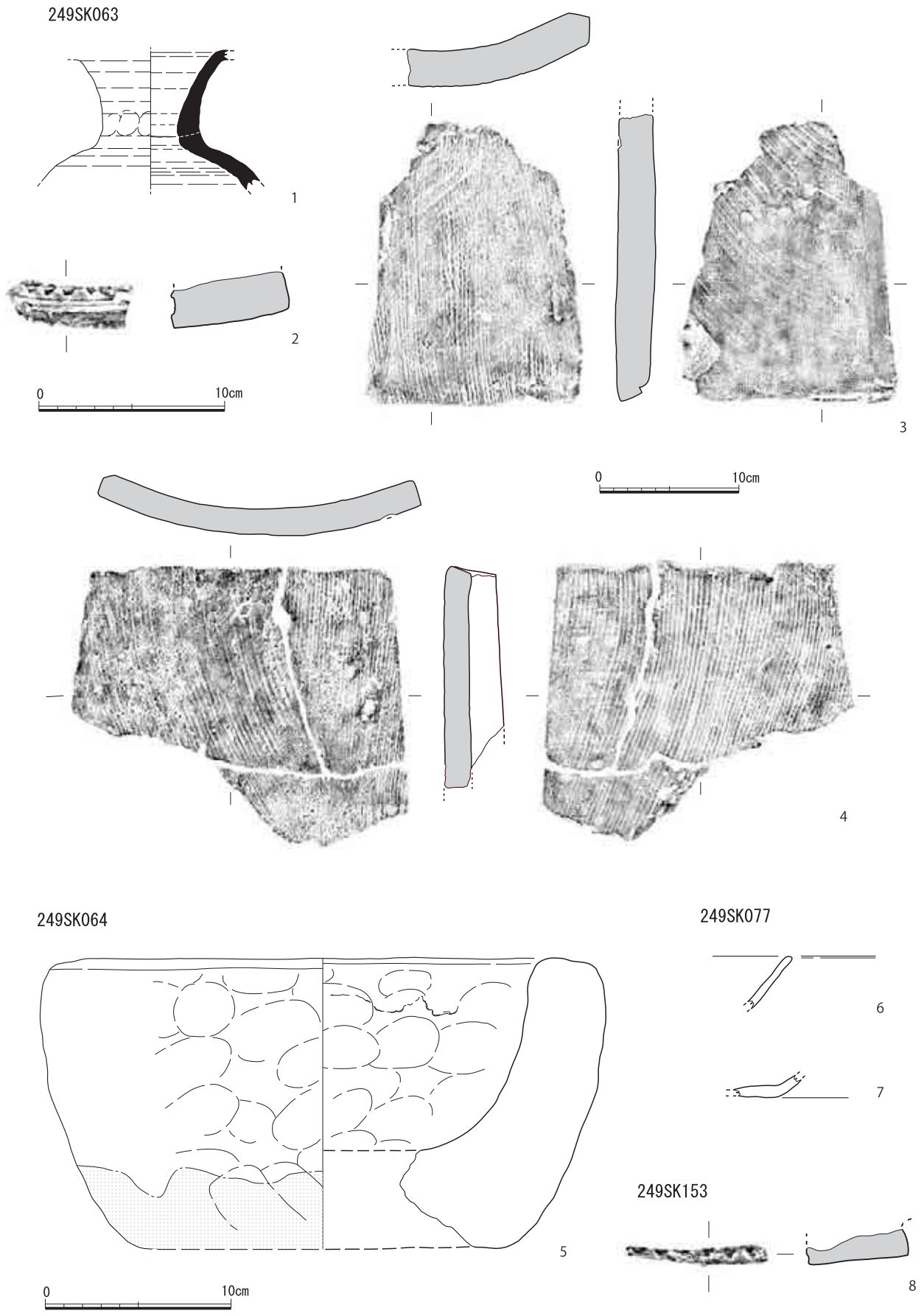


図31. 249SK063・064・077・153　出土遺物

切痕が残る。３の側面はＢ3a、端面はＡで布目痕が端面にまで残る。４の側面はＢ2a、狭端側の端面は、凹面側を幅 0.8cm 程にヘラ削りしたＢである。

249SK064 出土遺物（図 31、図版４－２）

土製品

炉材（５） 復元口径 29.4 cm、高さ 15.65 cmを測る。厚さは 3.2 ～ 6.0 cm程で、ナデと指押さえによって鉢形に成形される。内外面ともに網目状に亀裂が入り、粘土塊の付着も部分的にみられるため、粘土紐巻上げによる成形か、粘土塊を貼り付けて成形したものかは現状では不明である。胎土中にはスサと籾殻が少量含まれる。内面には凹凸や粘土塊の付着があり、上端は平坦で中子を支持する巾木もないことから鋳型ではなく、炉材と思われる。内面に溶解面や鉱滓などの付着がみられないため、未使用の甑炉の最下段か地中に埋め込んで甑炉を乗せる炉台の可能性が考えられる。全体はにぶい黄橙色を呈し部分的に黒斑もみられるが、外面下位のみ焼成が弱く灰白色を呈するため、おそらく地面に設置されていた部分であると推測される。

249SK077 出土遺物（図 31）

土師器

坏×皿（６） 口縁部の小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。胎土中に白色雲母細片をやや多く含む。

坏ａ（７） 底部の小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。胎土中に赤色粒子をやや多く含む。

249SK153 出土遺物（図 31）

瓦類

軒平瓦（８） 型式不明である。下外区の凸鋸歯文のみが残る。

ｅ．その他の遺構

249SX041 出土遺物（図 32）

土師器

甕ａ（１） 口縁部の小破片で、外面に縦方向のハケ、胴部内面にケズリが施される。口縁部内面と外面全体が二次焼成を受けてにぶい赤橙色に変化し、胴部内面は煮炊きのためか黒変している。

249SX042 出土遺物（図 32）

須恵器

坏（２） 口縁部の小破片で、焼成不良により灰白色を呈する。器面が磨耗し調整は不明である。

249SX049 出土遺物（図 32）

須恵器

甕ｂ（３） 口縁部から肩部の破片で、口縁部内外面は回転ナデ、肩部外面には平行叩きが縦方向と横方向に施されており、一部格子目状を呈する。肩部内面には接合痕と当て具痕が残る。

瓦類

平瓦（４・５） ４は凸面が格子叩きである。側面は 2b になる。５は凸面が縄叩きで離れ砂が付着。糸切痕も残す。凹面は布目痕と糸切痕が残る。側面はＢ2b になる。

249SX142 出土遺物（図 32）

土師器

坏ａ（６） 口径 15.3 cmを測る。内外面に回転ナデが施され、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡と粘土紐巻上げ痕が残る。外面は口縁部から底部まで広範囲に黒変し、内面も部分的に黒変する。また胎土は赤色粒子をやや多く、白色雲母細片を多く含む。ⅥＡ期に位置づけられる。

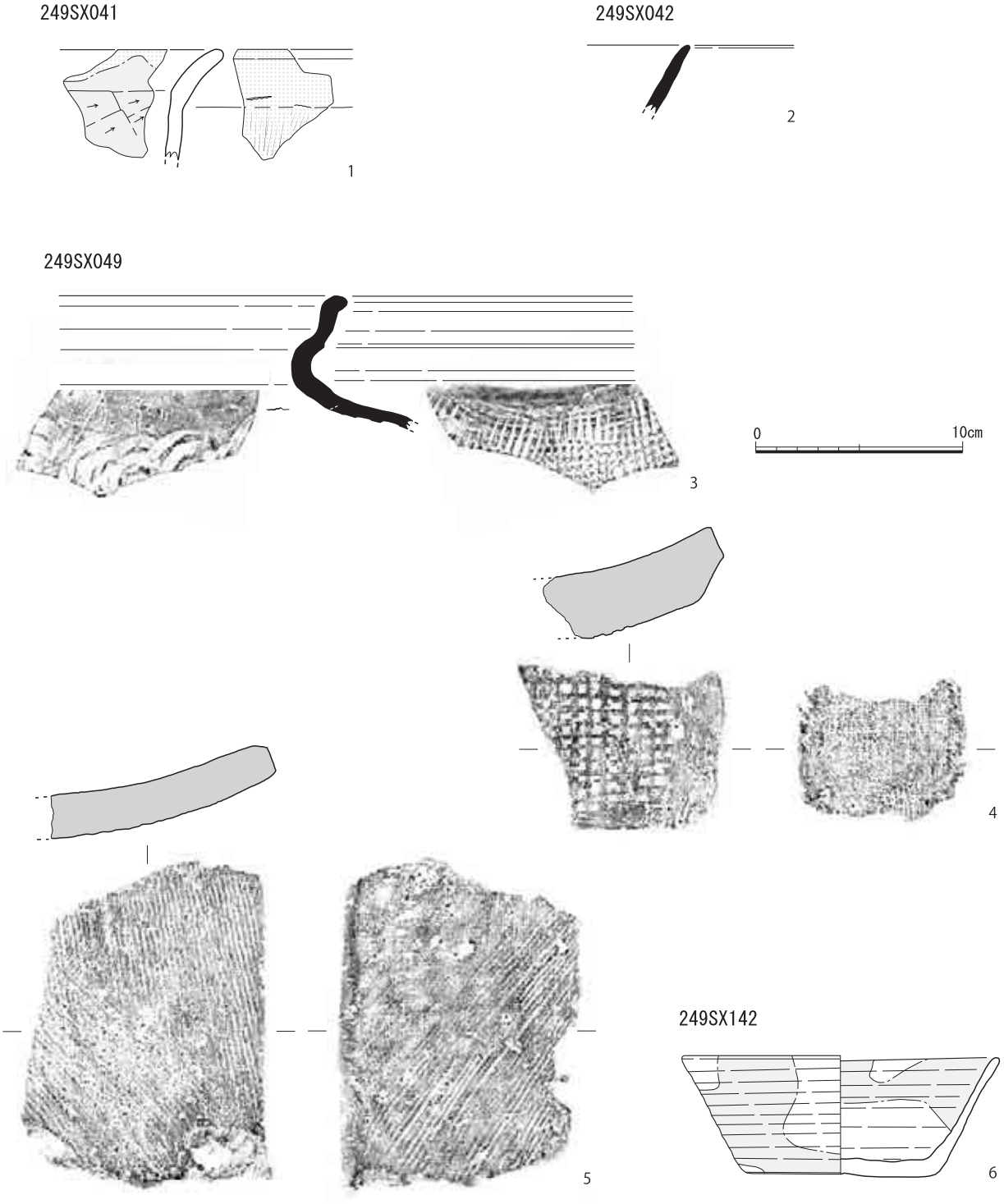


図32. 249SX041・042・049・142　出土遺物

(2) 第２面遺構出土遺物

ａ．掘立柱建物

249SB010a 抜取穴出土遺物

(図 33)

須恵器

蓋 c3（１） 天井部外面に、回転ヘラケズリとつまみ貼り付け時に伴うと思われる回転ナデがみられる。また口縁部整形の工程に①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取でき、口縁部内外面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡もみられる。

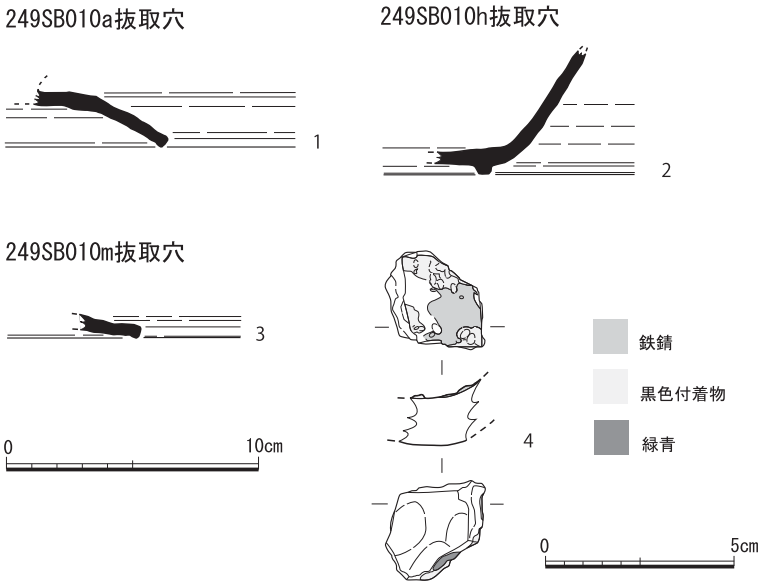


図33. 249SB010a・h・m抜取穴　出土遺物

249SB010h 抜取穴出土遺物

(図 33)

須恵器

坏 c（２） 焼成・還元ともに不良で浅黄色の瓦質を呈する。器面は磨耗するが、外面に回転ナデの痕跡が若干残る。

249SB010m 抜取穴出土遺物（図 33）

須恵器

蓋３（３） 口縁部の小破片で、断面三角形の口縁端部を有する。口縁部整形の工程には①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。また重ね焼きのためか外面天井部側の色調が暗く変化している。

土製品

トリベ（４） 底部の小破片で、厚さ 1.25 ㎝を測る。ナデと指押さえによって成形され、内面全体と外面の一部が熱を受けて灰白色に硬化している。内面には暗赤褐色の鉄錆や黒色の付着物がみられ、トリベの表面も溶解し、表面に気泡が生じている。また断面に銅の緑青の塊が付着しており、器面の亀裂によって胎土中に入り込んだ可能性もある。

ｂ．溝

249SD025（暗灰色土）出土遺物（図 34）

須恵器

蓋３（１・２） いずれも断面三角形の口縁端部を有する。天井部外面には回転ヘラケズリが施され、口縁部整形の工程には①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。１には口縁部内外面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡もみられる。

鉄製品

鑿（３） 断面方形の鑿状工具と思われる。現状で長さ 8.45 ㎝を測る。頭部は欠損するが、脚部は頭部側から直線的に細くなる形状をとる。銹化が著しく四方に縦方向の亀裂が入り、本来の形状より若干膨む。

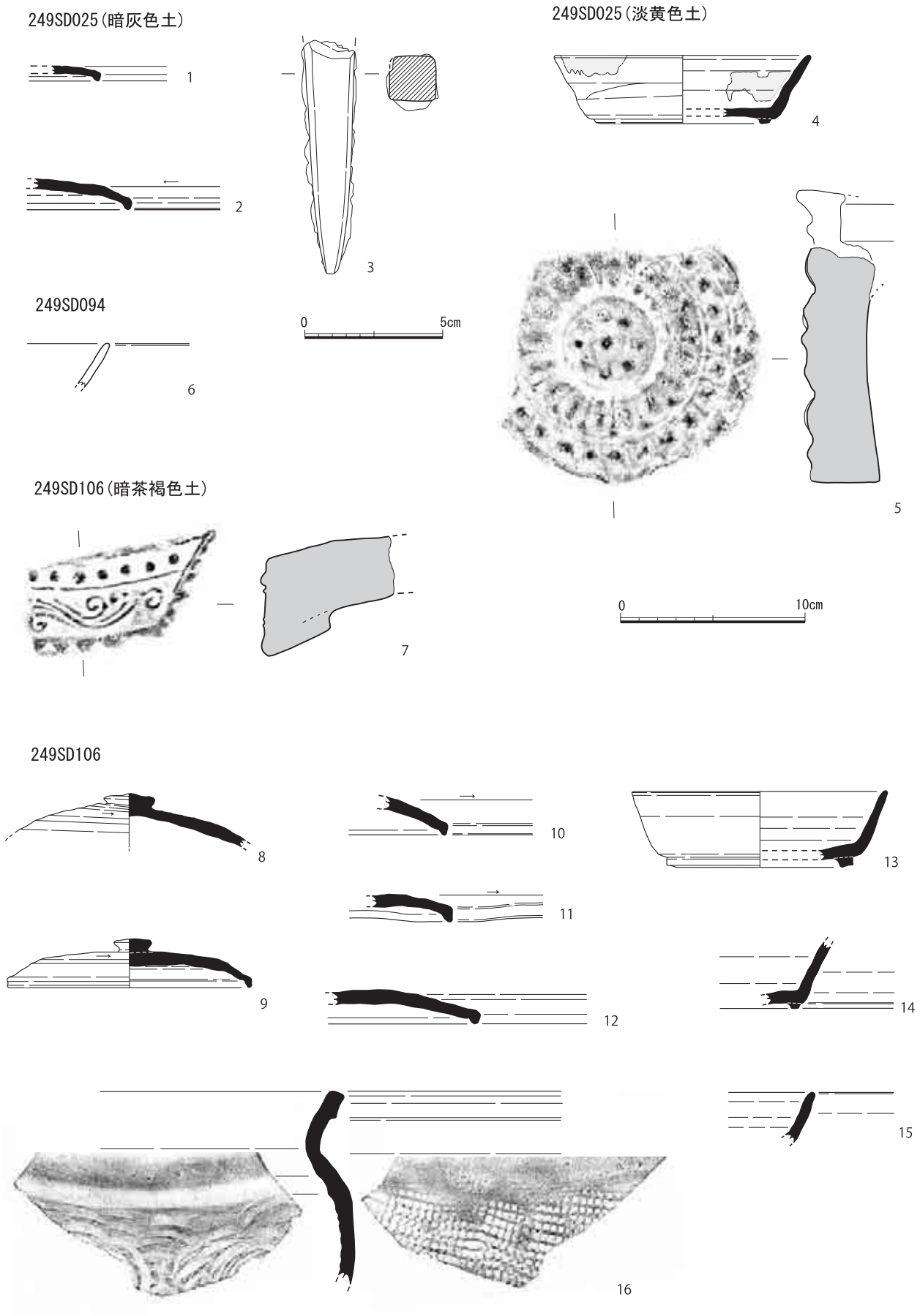


図34. 249SD025(暗灰色土)・025(淡黄色土)・094・106(暗茶褐色土)・106　出土遺物

249SD025（淡黄色土）出土遺物（図 34）

須恵器

坏ｃ（４） 復元口径 13.9 ㎝を測る。底部外面をヘラ切りした後、低い高台を貼り付けている。内外面に回転ナデを施すが、体部中位に断続的な強い回転ナデがみられる。また内面と口縁部外面に部分的に煤状炭化物が付着し、灯明皿の可能性がある。

瓦類

軒丸瓦（５） 291 型式である。全体に磨滅も激しいが、瓦笵の痛みも激しいようである。丸瓦は先端未加工のものを取り付ける。

249SD094 出土遺物（図 34）

土師器

坏×皿（６） 口縁部小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。胎土に赤色粒子をやや多く含む。

249SD106（暗茶褐色土）出土遺物（図 34）

瓦類

軒平瓦（７） 560Aa 型式である。文様の磨滅が激しい。顎は粘土板貼り付けの痕跡が残る。

249SD106 出土遺物（図 34）

須恵器

蓋ｃ（８） 天井部外面に回転ヘラケズリを施した後、扁平なつまみを貼り付けている。天井部内面にはつまみ貼り付けの際の天井部陥没を防ぐ押さえ痕がみられ、つまみ上面には貼り付け後のつまみの形状を整える回転ナデもみられる。

蓋 c3（９） 復元口径 13.3 ㎝を測る。天井部外面は回転ヘラケズリを施すが、中心部のみ回転ヘラ切り未調整のまま扁平なつまみを貼り付けている。天井部内面にはつまみ貼り付けの際の天井部陥没を防ぐ押さえ痕がみられる。また内面の天井部と口縁部の境目には断続的な横方向のナデが一周する。口縁部整形の工程は①内面から端部→②外面→③端部の３工程の回転ナデが看取でき、口縁端部面取り部分には回転ナデによる沈線が入る。外面から口縁部内面まで色調が暗く変化するため、重ね焼きの最上段に正位置で置かれていたと推測される。

蓋３（10 ～ 12） 12 は焼成・還元ともに不良のため、器面が磨耗し調整が不明瞭であるが、10・11 の天井部外面には回転ヘラケズリの痕跡が残り、口縁部整形の工程には①内面から端部→②外面から端部→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。また 10 は口縁部を除く内面、12 は口縁部外面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡がみられ、11 は焼成時の歪みがみられる。

坏ｃ（13・14） いずれも底部に低い高台が貼り付く。13 は復元口径 13.9 ㎝を測る。14 は底部外面を回転ヘラ切りした後､底部外側に高台を貼り付けている。９世紀初めの型式で混入品の可能性がある。

皿（15） 口縁部の小破片である。内外面に回転ナデが施されるが、外面下位には左上がりの断続的なナデも施されている。

甕ａ（16） 胴部外面は格子目叩きが施され、胴部内面には当て具痕が残る。口縁部から肩部までは内外面ともに回転ナデが施され、肩部内面には強い回転ナデが一周する。

土製品

鋳型（写真 200） 鋳型面は精良な真土を２㎜程の厚さで貼り付けている。上端は平坦面をなし、体部の縦断面は直線的であるが、横断面は内湾する。小破片であるが、湾曲の具合から径の大きな製品であると思われる。摩滅のため挽型の痕跡はみられない。胎土には白色砂粒が多く含まれ、スサも少量含まれる。

ｃ．土坑

249SK092 出土遺物（図 35）

瓦類

塼（１） 表面はナデ調整であるが、それほど丁寧な作りではない。粘土塊の詰め込み状況から型枠作りの可能性がある。

249SK097 出土遺物（図 35）

土師器

甕ａ（２） 小破片であるが、胴部外面は縦方向のハケ、胴部内面にはケズリが施され、ケズリ後に施された工具痕も多く残る。口縁部はヨコナデが施されるが、内外面ともに成形時の指頭痕が残る。また口縁部内面から外面全体に煤が付着する。

土製品

羽口（３） 胴部から元口側に向かって裾がラッパ状に広がる形状で、全長 15.65 ㎝を測る。地の色調はにぶい黄橙色を呈するが、先端から全体の２／３まで表面が溶解して黒色にガラス質化し、赤褐色の鉄錆状の滓が付着している。また裾に向かってオリーブ黒色からオリーブ灰色へと変化し、表面には胎土中の白色砂粒が溶解した白色のガラス質物も付着する。内面の通風孔にはシボリ痕が残る。

249SK109 出土遺物（図 35）

須恵器

坏×皿（４） 口縁部の小破片で、焼成・還元ともに不良のため器面が磨耗し、調整は不明である。

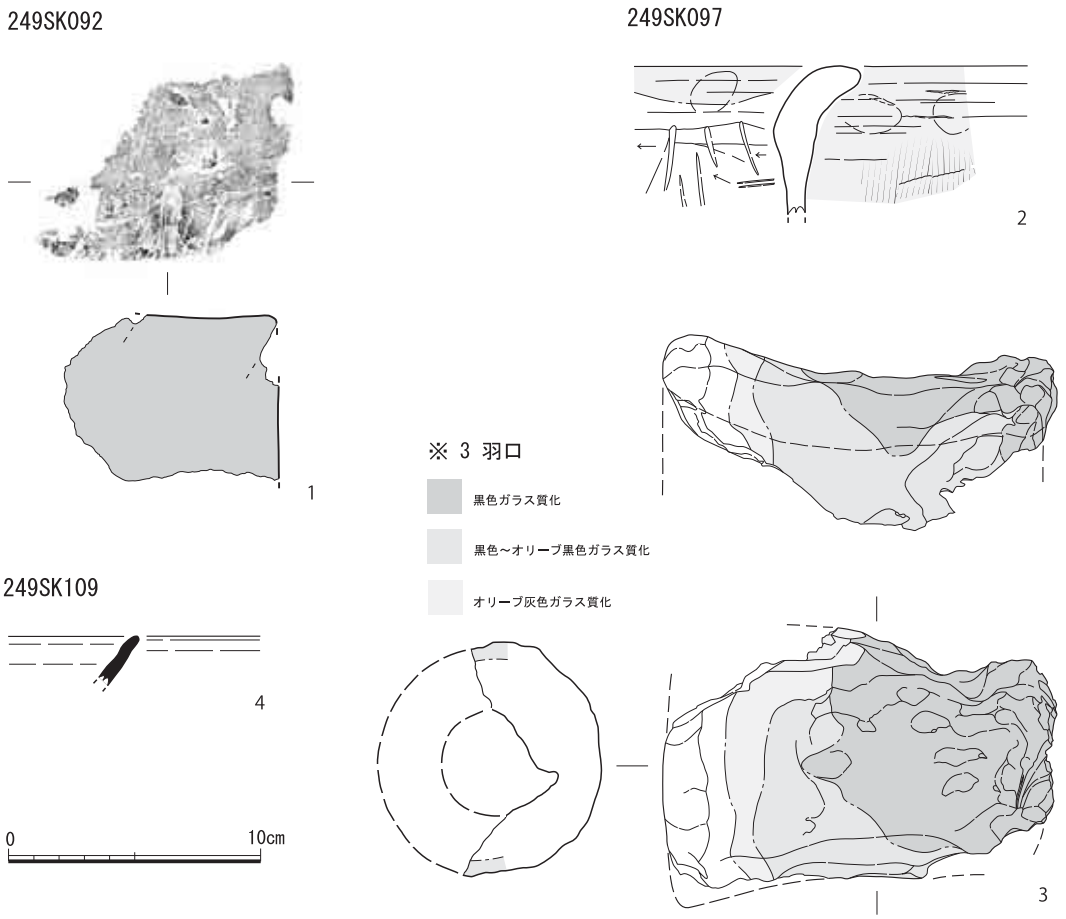


図35. 249SK092・097・109 出土遺物

その他

鉄滓（写真 206・207） いずれも底面に 0.5 ～ 1 cm 程の小さな木炭痕が残り、気泡が多くみられる。上面は部分的に黒錆が見られ、磁着は弱いが鉄をわずかに含むと思われる。炉内滓かと思われる。１の上面は流動状である。

ｄ．その他の遺構

249SX098 出土遺物（図 36）

土師器

椀 c1（１） 復元口径 15.0 cmを測る。底部外側に断面台形の高台が貼り付き、体部が直線的に立ち上がる形状をとる。見込みには高台貼り付けに伴う強い回転ナデが一周する。ミガキはみられず、8 世紀末頃のものと思われる。胎土中には赤色粒子と白色雲母細片がやや多く含まれる。

甕（２） 器面磨耗のため調整は不明瞭であるが、胴部内面はケズリの痕跡が、口縁部外面には接合痕と成形時の指頭痕が残る。

249SX099 出土遺物（図 36）

瓦類

軒平瓦（３） 560Ｂa’型式である。体部凸面は縦位の縄叩き（縄目は太い）の後、横位の縄叩き（縄目は細い）を行う。凹面は横方向のヘラ削りとすり消し、側面は縦方向のヘラ削りにより布目痕を丁寧に消す。

249SX113 出土遺物（図 36）

須恵器

蓋 c3（４） 復元口径 14.4 cmを測る。天井部外面は粗い回転ナデが施され､つまみ部分は欠損するが、つまみ貼り付けに伴う回転ナデの痕跡が残る。天井部内面は不定方向のナデが施される。口縁部整形の工程は①内面から端部→②外面→③端部の３工程の回転ナデがみられる。また天井部内面には坏底部の重ね焼きの痕跡が、口縁部外面には坏の口縁が融着しており、重ね焼きの状況を明瞭に示している。

蓋３×高坏（５） 口縁部の小破片で、口縁部整形の工程は①内面から端部→②外面→③端部の３工程の回転ナデが看取できる。外面がわずかに内側に反るため、高坏の脚裾部の可能性もある。

坏×皿（６） 底部の小破片で、底部外面は回転ヘラ切り、見込みに不定方向のナデの痕跡が残る。還元はやや不良で灰褐色を呈する。

249SX159 出土遺物（図 36、図版４－３）

土製品

羽口（７） 元口側は欠損するが、現状で幅 4.2 ～ 7.15 cm、長さ 10.8cm を測り、先端から元口側に向かって裾が緩やかに広がる形状をとる。外面にはナデと指押さえの痕跡が残り、胎土は粗く、スサと籾殻をわずかに含む。通風孔の径は 2.4 ～ 2.7 cmで、内面を棒状の工具で押し広げたような痕跡が部分的にみられ、断面は不整円形を呈する。厚さ 1.1 ～ 2.8 cmを測る。地の色調は淡黄色を呈するが、熱を受けて硬化した部分は灰色を呈し、亀裂が多く入る。さらに先端部は溶解して黒色を呈し、気泡も多くみられる。部分的に白色に滓化したものや鉄錆状の滓、銅の緑青も付着する。溶解面より、炉内への挿入角度は 13 ～ 15°と推定される。

瓦類

軒丸瓦（８） 290Ｂ型式である。全体に文様の磨滅が激しい。丸瓦は先端未加工のものを取り付ける。

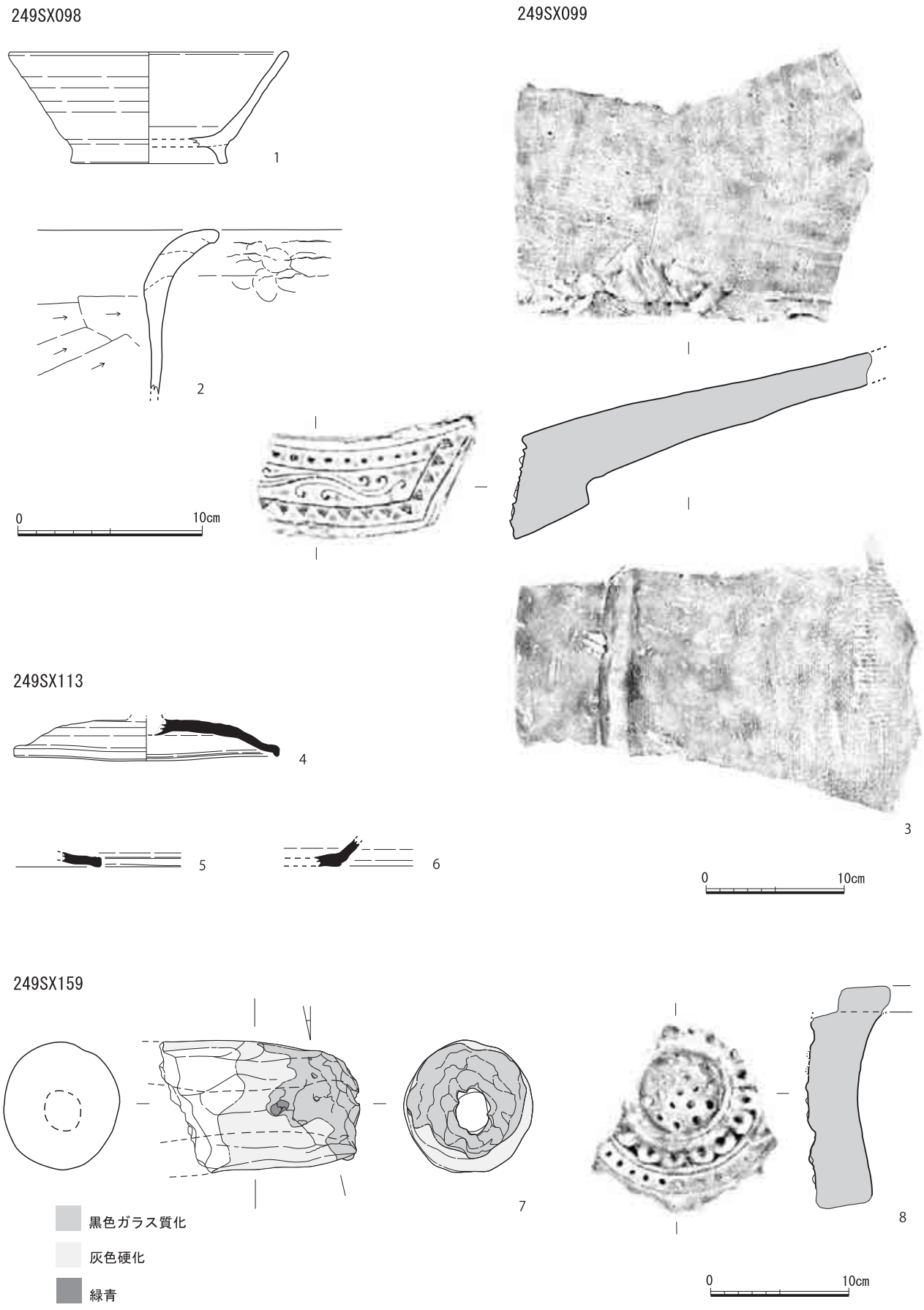


図36. 249SX098・099・113・159　出土遺物

(3) 第３面遺構出土遺物

ａ．掘立柱建物

249SB010e 出土遺物（図 37）

須恵器

坏×皿（１） 口縁部の小破片で、内外面に回転ナデが施される。

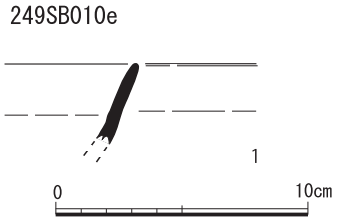


図37. 249SB010e 出土遺物

(4) 第４面遺構出土遺物

ａ．土坑

249SK193 出土遺物（図 38）

土師器

椀（１・２） いずれも小破片で、口縁部が外反する。１は体部外面にケズリを施し、内面はナデ、口縁部をヨコナデで仕上げている。２は器面磨耗により調整は不明瞭で、口縁部のヨコナデ痕のみ残る。

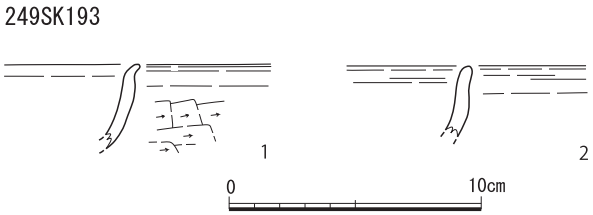


図38. 249SK193 出土遺物

(5) 土層出土遺物

暗茶色土出土遺物（図 39）

瓦類

軒平瓦（１） 560Ｆ型式である。左偏行唐草と下外区の凸鋸歯文の一部が残る。

鉄製品

鉄釘（２・３） 断面方形の角釘で、２は先端部と頭部先端を欠損し、３は頭部を欠損する。２は軸部上端を薄く叩き折り曲げて頭とし、３は先端に向かって細くなり若干屈曲する。

用途不明鉄製品（４） 長さ 3.55cm、最大径 1.4cm を測る投弾形の用途不明の鉄製品である。銹化が著しく、四方に亀裂が生じ若干膨らむが、本来の形状をほぼ留める。249SK018 出土の鋳型（図 22-3）の鋳型面と一部ほぼ同じ寸法・形状のため、この鋳型によって作られた製品の可能性もある。

土製品

窯壁（写真 217） 窯壁の一部で、内面は若干灰色に硬化し、形状は内湾する。胎土には白色砂粒とやや長めのスサを多量に混和している。また粉炭も多く含まれる。

暗茶灰色土出土遺物（図 39・40）

須恵器

壷（５） 底部も含め外面全体に自然釉がかかり、褐色～灰オリーブ色を呈する。このため焼成時に底部を上にして置かれていたと推測される。内面は、底部と体部の境に接合痕が明瞭に残り、接合のための断続的な横方向の強いナデが一周する。また底部内面には、部分的にナデ消されているが、当て具痕のような同心円文の痕跡が残る。底部成形の粘土板の段階で施されたものと思われる。肥後産と考えられる。

土師器

小皿 a1（６） 復元口径 7.7 ㎝を測る。器面磨耗のため調整は不明であるが、底部外面に板状圧痕が残る。胎土中に白色雲母細片が多く含まれる。

瓦類

軒丸瓦（７～９）　７は型式不明である。外縁の凸鋸歯文と珠文が残る。８は290Ｂ型式である。全体に磨滅が激しい。９は291型式である。瓦当の裏面下半に突帯が残るが､貼り付けの痕跡はわからない。

軒平瓦（10～13）　10は型式不明である。上外区の珠文が確認できる。11も型式不明である。全体に磨滅が激しいが、上外区の珠文がかろうじて確認できる。12と13は560Ａ型式で、13では顎貼り付

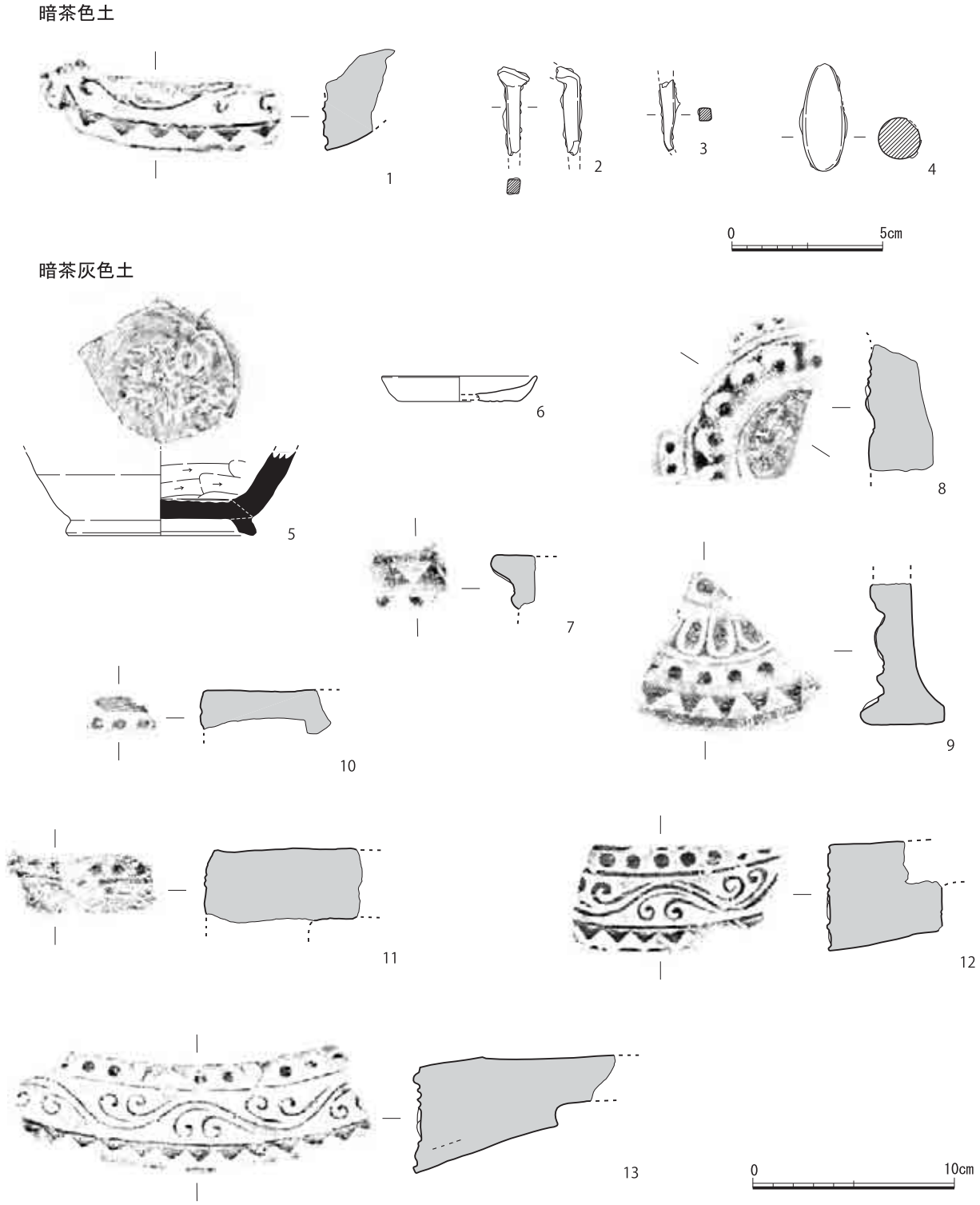


図39. 暗茶色土・暗茶灰色土　出土遺物（1）

けの痕跡が残る。

平瓦（14 ～ 16）　いずれも縄叩きである。14 は全体に磨滅が激しいが、凹面に粘土板のとじ合せ痕が残る。側面はA2a になる。15 は、凹面に布目、側板痕と粘土紐の接合痕が残る。16 は、凸面に離れ砂が付着する。凹面は糸切痕、布目痕が残る。側面調整はB3a である。

石製品

磨製石斧（17）　結晶片岩製で、長さ 7.6cm、幅 3.7cm、厚さ 1.7cm を測る。敲打による調整を施した後、研磨による刃部作成と仕上げを行っており、刃部の研磨は刃部に直行するかたちで行われている。側面は敲打による調整のみであるが、基部付近の敲打痕には若干の研磨痕もみられる。基部欠損の後に再加工を施している。

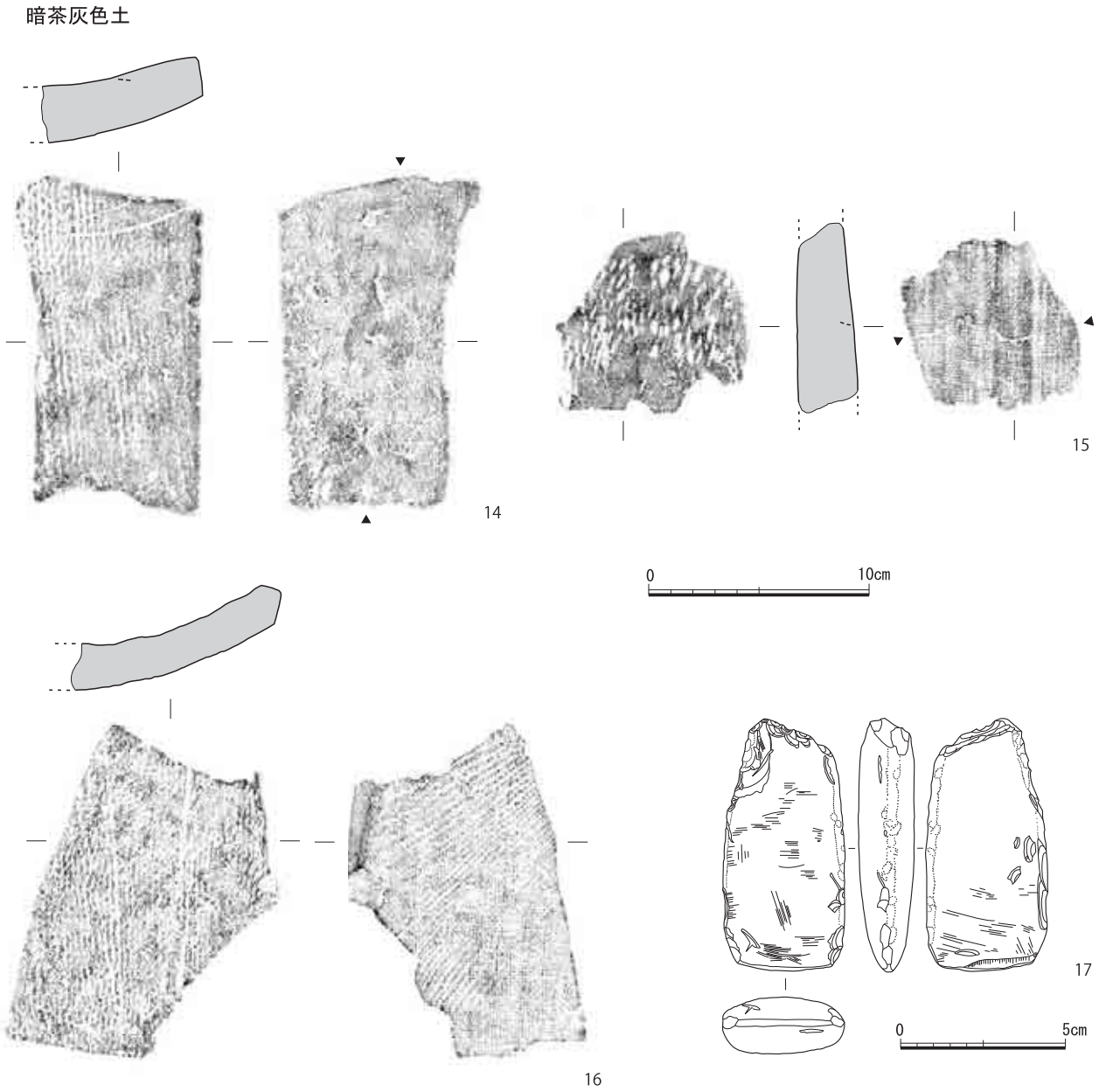


図40. 暗茶灰色土　出土遺物（2）

土製品

トリベ（写真 222）　厚さ 2.0 ㎝と器壁が厚く、現存する口縁部から比較的大きな径が推測されるため、坩堝の可能性もある。ナデと指押さえによって成形され、口縁端部から内面全体が熱を受け暗灰色に硬化している。内面に付着する暗赤褐色の鉄錆は口縁端部にまで及んでおり、断面の一部にも侵入している。またトリベの表面も部分的に黒変し、一部ガラス質化している。

土製品

炉壁（写真 223・224）　炉壁の一部で、全体に熱を受けるが、特に内面が灰色に硬化しており、鉄錆状の黒褐色の滓が薄く付着する。小さな気泡が多く生じ、一部銅の緑青の塊も付着する。胎土中には多量の白色砂粒と少量のスサが含まれ、部分的に銅の緑青もみられる。炉の中段部分の可能性がある。

その他

銅塊（写真 225・226）　現存長 3.5 ㎝、重量 66g の銅塊で、全体が緑青に覆われる。先端の丸い逆円錐形で、幅の広い上面はほぼ平坦面をなすが、一部緩やかに窪む。溶解して穴となる隙間に流れ込んだような形状である。

明黄色土出土遺物（図 41、図版４－５）

瓦類

軒丸瓦（１）　新型式の複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。蓮子は１＋８＋ 12 になる。

軒平瓦（２）　型式不明である。上外区の珠文を残す。凹面の体部には側板痕と布目痕が残る。

暗褐色土出土遺物（図 41）

土製品

トリベ（３）　口縁部の小破片で、厚さ 1.25 ㎝を測る。ナデと指押さえによって成形され、内外面ともに熱を受けて灰色に硬化しており、多数の亀裂が入る。現状では付着物はみられないが、口縁部内面が部分的に黒変する。また胎土中にはスサがわずかに含まれる。

瓦類

軒平瓦（４）　型式不明である。上外区に珠文、下外区は凸鋸歯文になる。

塼（５）　表面をナデ調整により仕上げる。粘土塊の詰め込みの状況から型枠作りの可能性がある。

茶色土出土遺物（図 41）

須恵器

蓋 c3（６）　復元口径 14.75 ㎝を測る。天井部外面は回転ヘラケズリを施すが、中心部のみ回転ヘラ切り後回転ナデ調整のまま、つまみを貼り付けている。天井部内面は不定方向のナデが施され、つまみ上面には貼り付け後のつまみの形状を整える回転ナデが施される。口縁部整形の工程は①内面から端部→②外面→③端部の３工程の回転ナデがみられ、また口縁部内外面の色調が暗く変化し、天井部内面に他の土器片が融着するなど重ね焼きの痕跡がみられる。

皿 a（７）　復元口径 10.0 ㎝を測る。底部外面は回転ヘラ切りと板状圧痕が、見込みは不定方向のナデがみられる。奈良時代前半のものと考えられる。

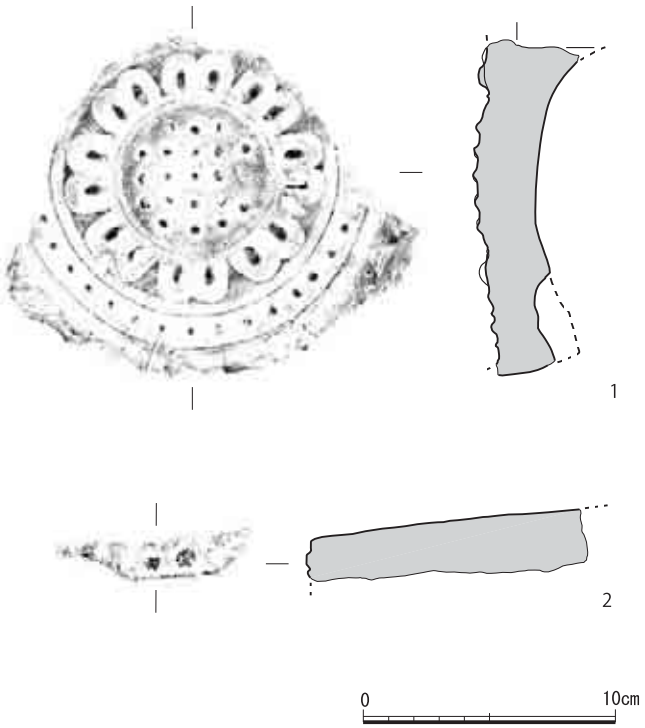
円面硯×坏 c（８）　小破片であるが、坏 c というよりは、その形状から円面硯の可能性が高い。焼成はやや不良で灰白色を呈し、器面は磨耗するが、内面に不定方向のナデの痕跡が残る。

瓦類

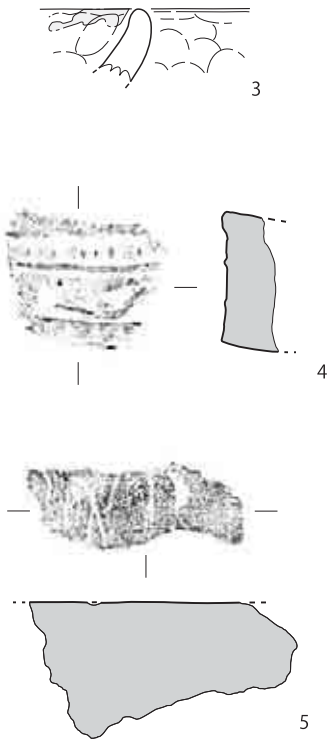
軒丸瓦（９・写真 237）　９は 291 型式であろうか。凸鋸歯文と珠文がある。写真 237 は、珠文と間弁のみの小破片である。型式は不明である。

丸瓦（10）　凸面は縄叩きの後すり消し、凹面には粘土紐痕が残る。

明黄色土



暗褐色土



茶色土

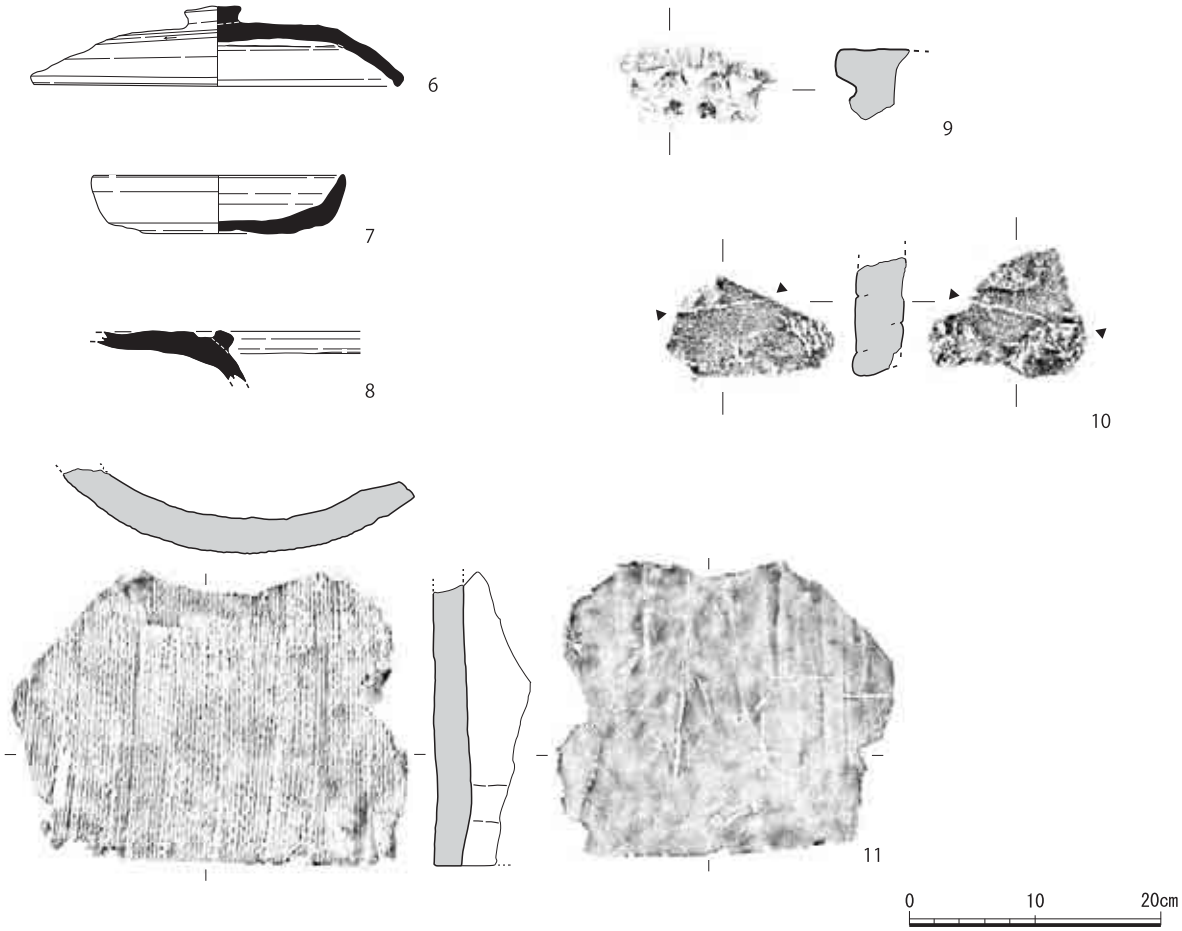


図41. 明黄色土・暗褐色土・茶色土　出土遺物

平瓦（11）　凸面は、縦位の縄叩き。凹面は、布目痕と側板痕が残るがほぼすり消しである。側面はA2b、端面は、凹面側を幅6.4cm程にヘラ削りしたBである。

暗黄色土出土遺物（図42）

須恵器

坏c（1・2）　1は高台が欠損するが、底部外面に高台貼り付けの際の回転ナデの痕跡が残る。口縁端部はやや肥厚する。2は底部外側に高台が貼り付き、体部は直線的に立ち上がる。内外面は回転ナデが施され、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残る。9世紀初めの型式である。

瓦類

軒丸瓦（3）　291型式であろうか。凸鋸歯文と裏面に突帯を残す。

丸瓦（4）　凸面はすり消しで凹面には粘土紐の痕跡が残る。

茶灰色土出土遺物（図43、図版4-6）

須恵器

蓋3（1）　天井部外面は回転ヘラ切り未調整で、天井部内面は不定方向のナデが施される。口縁部外面を面取りするが、明瞭な口縁部の折り曲げはない。口縁部外面の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡が残る。

甕a（2）　口縁端部断面が長方形でやや幅広い縁をなし、口縁部内面上位は強い回転ナデによって凹面をなす。胴部外面は擬格子叩きが施され、胴部内面に当て具痕が残る。外面全体に自然釉がかかる。

鉢a3（3）　口縁部が内湾する鉢で、口径20.3cmに復元される。内外面に回転ナデが施されるが、体部外面下位には回転ヘラケズリが施される。

瓦類

軒丸瓦（5～7）　5は290型式であろうか。凸鋸歯文と珠文が残る。6は290B型式である。瓦当面はほぼ完形で、珠文の1箇所に笵傷がある。裏面には突帯があり、先端が未加工な丸瓦を取り付けるが、接合丸瓦は脱落している。7は型式不明。全体に摩滅が激しいが、複弁で珠文が確認できる。

平瓦（8・9）　8は小破片ではあるが、側縁に分割突帯の痕跡がある。側面は2bである。9は、凸面が縦位の縄叩き、凹面には側板・布目・粘土紐の痕跡が残る。粘土紐桶巻作りの平瓦となる。側面はA2bになる。

塼（4）　表面はナデ調整であるが、それほど丁寧な作りではない。

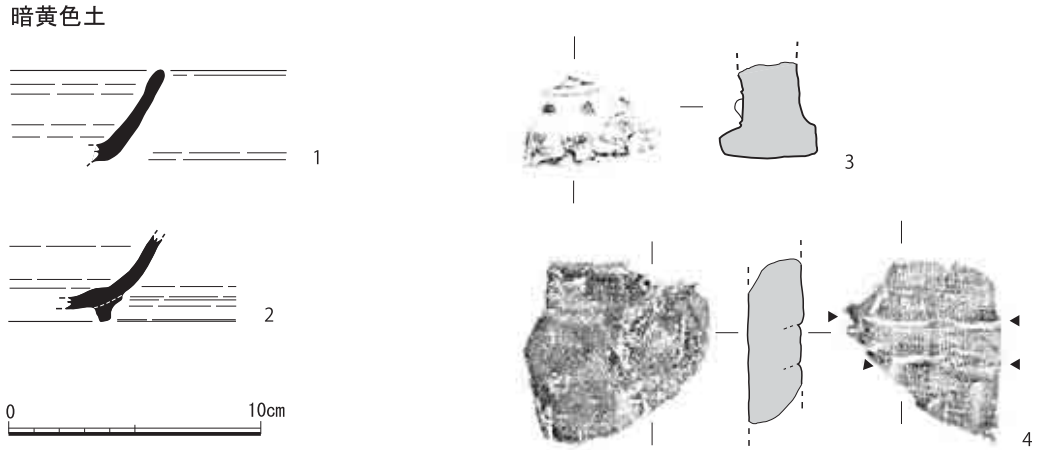


図42. 暗黄色土　出土遺物

茶灰色土

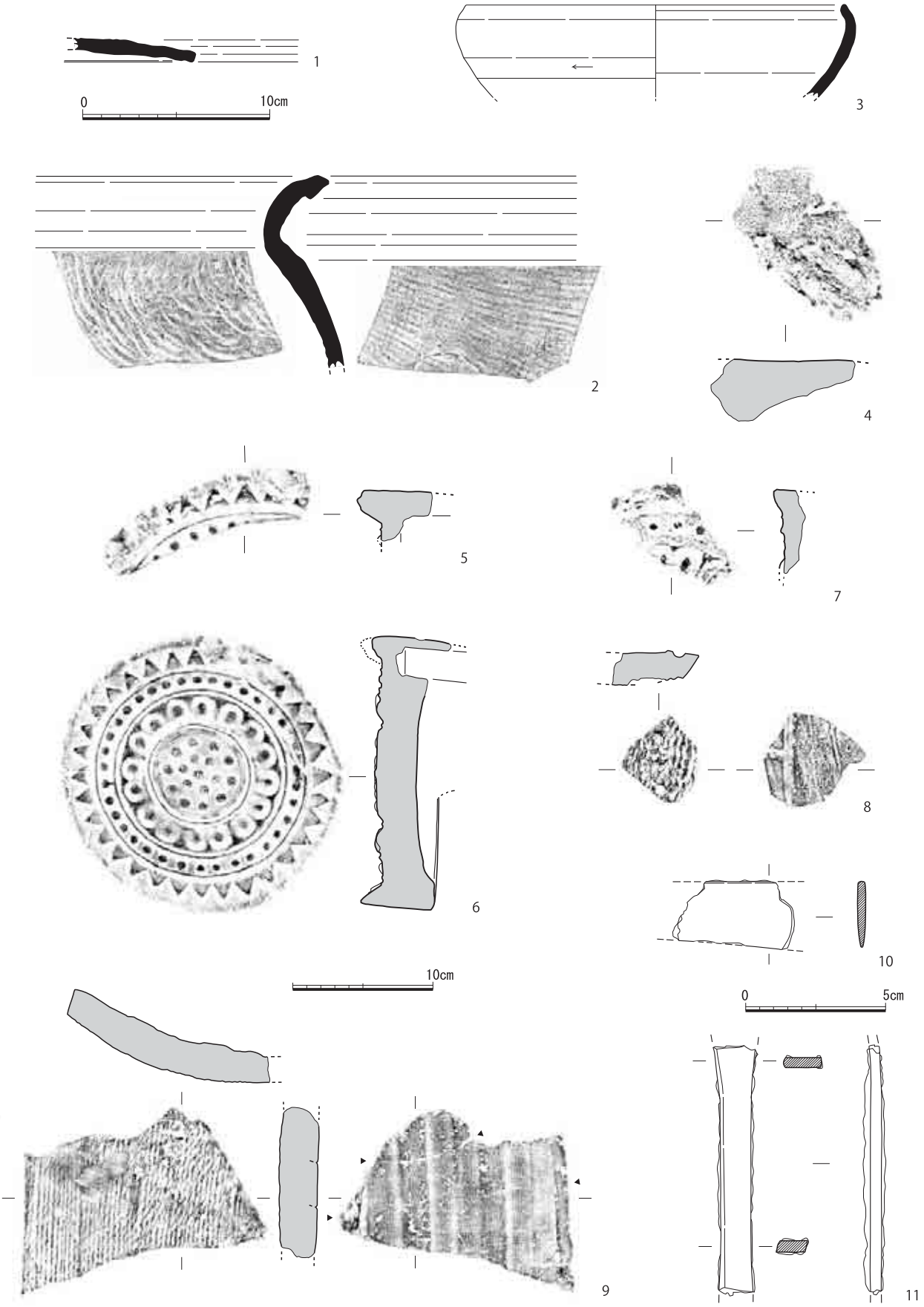


図43. 茶灰色土　出土遺物

鉄製品

刀子×鎌（10）　刃部が緩やかに広がり、身幅が広い方側に茎があったと思われる。現存長 4.35cm、最大身幅 2.4cm、最大厚 0.3cm を測る。刀子片の可能性があるが、身幅の大きさより鎌の可能性も考えられる。

用途不明鉄製品（11）　現存長 8.9cm、幅 1.0 ～ 1.35cm、厚さ 0.35 ～ 0.4 cmを測り、断面長方形を呈する。軸部の両端を欠損するが、一方の幅が広がって断面も薄くなり若干反る。鉈か鑿の可能性が考えられ、幅が広い方に刃部があったと思われる。

その他

鉄滓（写真 241）　径 7.8 cm、厚さ 2.7 cmを測る、不整円形の椀形鍛冶滓である。上面は浅く窪んで凹凸があり、小形の木炭痕が残る。上面の弧状に欠損する部分は送風孔痕の可能性も考えられる。底面は比較的滑らかで含鉄部がみられる。

鉄滓（写真 242）　凹凸が激しい扁平な滓で、黒色と黄褐色の錆に覆われる。全体に気泡が多く、１～２cm の木炭痕が多く残る。

土製品

炉壁（写真 243）　炉壁の一部である。器壁が厚く、緩やかに内湾する形状を呈する。内面は熱を受けて灰色に硬化しており、斑に鉄錆状の滓が薄く付着する。また炉壁自体も部分的に白色に滓化しており、小さな気泡が多く、一部断面には銅の緑青の塊が入り込む。胎土は白色砂粒が多く含まれる。

茶褐色土出土遺物（図 44）

須恵器

蓋３（１）　口縁部の小破片で、断面三角形の口縁端部を有する。口縁部整形の工程は器面磨耗により不明である。天井部外面に回転ヘラケズリが、天井部内面には不定方向のナデが施される。口縁端部内面から外面全体の色調が暗く変化する重ね焼きの痕跡が残る。

暗茶褐色土出土遺物（図 44）

須恵器

皿ａ（２）　復元口径 9.4cm を測る。底部外面は回転ヘラ切りで、見込みに不定方向のナデが施される。重ね焼きによるものか口縁端部を除いて内外面ともに暗い色調を呈する。

土師器

坏ｃ（３）　底部の小破片で、高台端部が外側にややはね上がる。器面磨耗のため調整は不明である。また底部外面が部分的に黒変する。８世紀前半の型式である。

皿ｂ（４）　口径 14.7cm を測り、底部形状は丸みを有する。器面磨耗のため調整は不明である。胎土中に赤色粒子がやや多く含まれる。

土製品

トリベ（写真 250・251）　口縁部の小破片で、器壁は薄く、厚さ 0.98 cmを測る。ナデと指押さえによって成形される。内外面ともに熱を受けて灰色に硬化しており、内面には小さな気泡も多くみられる。口縁部の内外面に黄褐色の鉄錆や黒色の付着物がみられ、赤変した砂粒も所々に付着する。

黒灰色土出土遺物（図 44、図版４-４）

須恵器

蓋３（５）　口縁部の小破片で、口縁部を折り曲げて面取りを施しているが、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部整形の工程は器面磨耗のため不明である。また口縁部のみ暗い色調を呈する重ね焼きの痕跡が残る。

石製品

紡錘車（６）　滑石製であるが石質はあまり良好とはいえず、全体的に淡い緑色を呈する。径 3.8 ～ 4.3cm、厚さ 1.9cm を測り、中心部分に直径 0.6 ～ 0.65cm の孔が両面から穿たれている。本来は側面下端に浅い段を有したと思われるが、磨耗のため稜が弱い。断面形は側面がわずかに湾曲した台形状を呈する。側面の研磨痕より、本体を時計回りに回転させながら中心から側縁に向かって研磨した状況が窺える。また研磨以前のケズリ痕も一部残る。

土製品

トリベ（写真 253）　いずれもナデと指押さえによって成形される。内外面ともに熱を受けて灰色に硬化しており、外面に亀裂が入る。内面には黄褐色の鉄錆や黒色の付着物がみられる。器壁は、１が厚さ 0.98 ㎝と薄く、２は 3.8 ㎝で厚い。

淡黒色土出土遺物（図 44）

須恵器

坏ｃ（７）　復元口径 11.5 ㎝を測る。八の字型に高台が貼り付き、高台端部は平坦面をなさず、断面三角形を呈する。内外面に回転ナデ、見込みには不定方向のナデが施される。底部外面にはヘラ記号が刻まれ、現状では右方向からヘラを挿入し高台側に向かって一筆引いている（写真 254）。

灰黒色土出土遺物（図 44）

須恵器

坏（８）　口縁部の小破片で、内外面に回転ナデが施される。

鉢（９）　口縁部の小破片で、口縁部を内湾させ、端部を丸く仕上げている。内外面に回転ナデが施される。

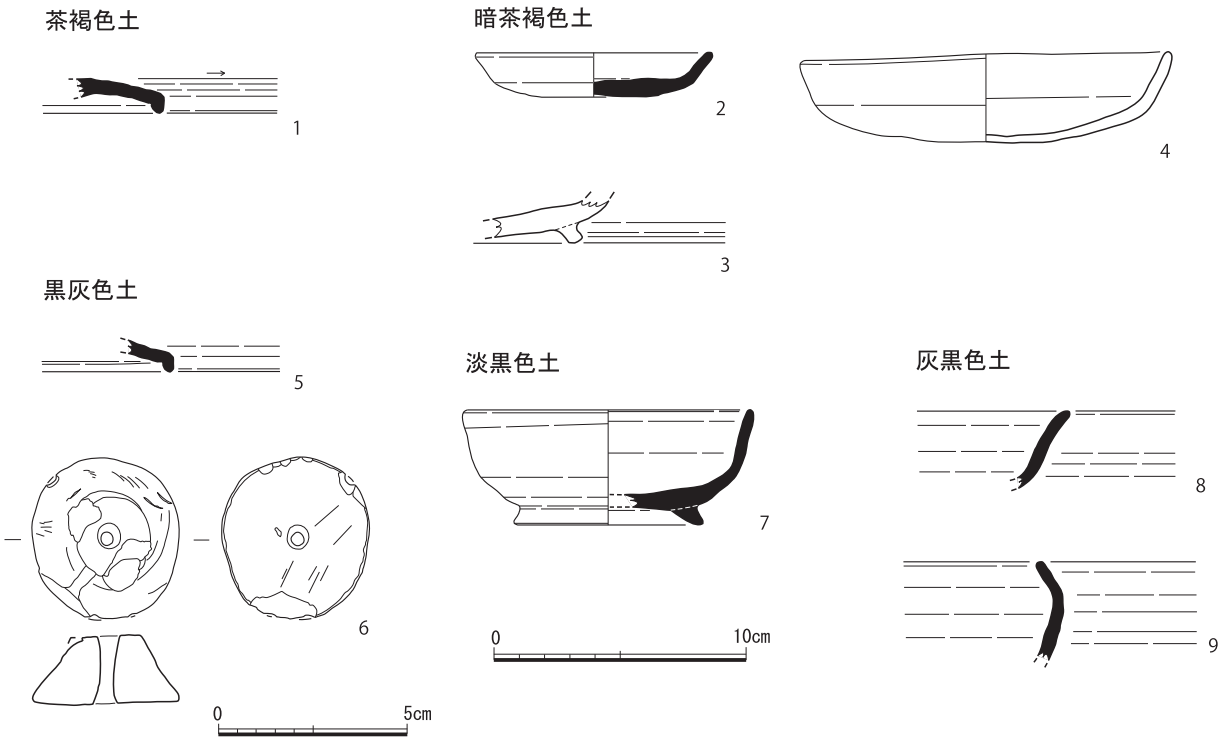


図44. 茶褐色土・暗茶褐色土・黒灰色土・淡黒色土・灰黒色土　出土遺物

黒色土南区出土遺物（図 45）

須恵器

坏蓋（１・２）　いずれも体部外面中位に稜を有する。1 は復元口径 12.9 ㎝で、天井中央部分に回転ヘラ切り後の粗い回転ナデ調整を残し、天井部外面に回転ヘラケズリを施している。口縁部整形の工程は①外面から端部→②内面から端部→③端部の３工程の回転ナデがみられ、口縁端部には浅い沈線が巡る。また、外面全体に火襷状の焼きムラがみられる。２は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁端部は丸く仕上げている。

蓋１（３）　口縁部の小破片で、返りを有し、返り端部で接地する。口縁部整形の工程は、①返り→②口縁端部→③返り端部の３工程の回転ナデが看取できる。天井部外面は回転ヘラケズリが施される。

坏身（４～６）　４は復元口径 10.6 ㎝、５は復元口径 10.4 ㎝を測る。いずれも底部外面に回転ヘラケズリを施す。口縁部の立ち上がりは若干内傾し、口縁端部内面を凹ませている。外面は受け部から底部まで自然釉がかかり、５は受け部上面に口縁の破片が融着することから、蓋と身を合わせた重ね焼きの状況が窺える。

甕（７・８）　いずれも口縁部の小破片で、外端面下位に沈線を有する。７は外面に二条の突帯を巡らし、その間に波状文を施している。口縁部内面上位は強い回転ナデによって凹面をなし、内面全体に自然釉がかかる。８は口縁部直下に強い回転ナデによる浅い沈線が生じる。頸部内面には工具痕がみられる。

甑（９）　復元胴部最大径 11.0 ㎝を測る。底部外面に手持ちヘラケズリ、底部内面にナデと指押さえが施される。

土師器

椀（10 ～ 16）　10 ～ 12 は口縁部が内湾し、13・14 は口縁部が直立、15・16 は口縁部が外反する。11 は器面磨耗のため調整は不明であるが、10 は底部外面にケズリが施される。12 は底部外面に強い板ナデが施され、内外面ともにハケ目が残る。13 は器面磨耗のため調整は不明瞭であるが、底部外面にハケ目が残り、底部内面にも指押さえの痕跡が残る。また胎土中に赤色粒子が多く含まれる。14 は底部外面に強い板ナデを施し、内面にも板ナデの痕跡が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデが施されるが、外面に縦方向のハケ目が残り、体部外面にも成形時の指頭痕が残る。15 は底部外面にケズリが施されるが、体部外面に成形時の指頭痕が残る。内面はナデが施される。16 は底部外面にケズリを施し、体部外面に指押さえを一周施している。内面は板ナデ後、ナデと指押さえを施し、底部にコテ当て痕が放射状に残る。

甕（17）　口縁部の小破片で、器面磨耗のため調整は不明である。

黒色土北区出土遺物（図 45）

須恵器

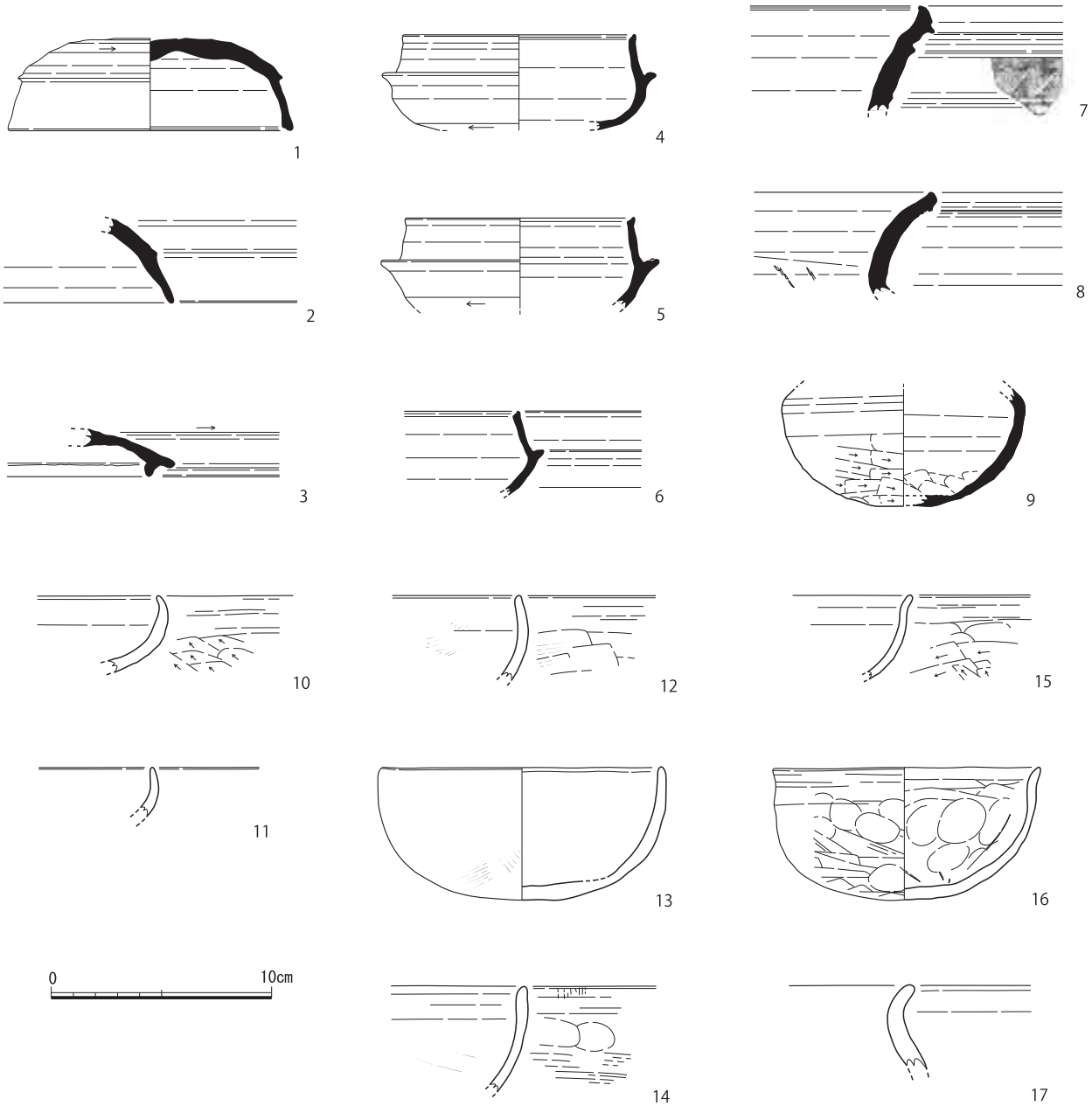
坏蓋（18）　口縁部の小破片で、体部外面中位に稜を有し、口縁端部に浅い沈線を有する。

坏身（19）　口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。底部外面は回転ヘラケズリが施される。

甕（20）　口縁部の小破片で、外端面は凸面を成し、頸部中位に突帯を有する。突帯より上に波状文、下に刺突文が施される。また内面全体に自然釉がかかり、重ね焼きによって他の土器の口縁が一部融着する。

小型甑（21）　胴部最大径 6.1 ㎝に復元される。肩部と胴部に浅い沈線を有し、肩部と沈線間に波状文が施される。底部外面は回転ヘラケズリが施され、底部内面には指押さえが施される。また、肩部内面に絞り痕が、頸部との境には接合痕がみられる。

黒色土南区



黒色土北区

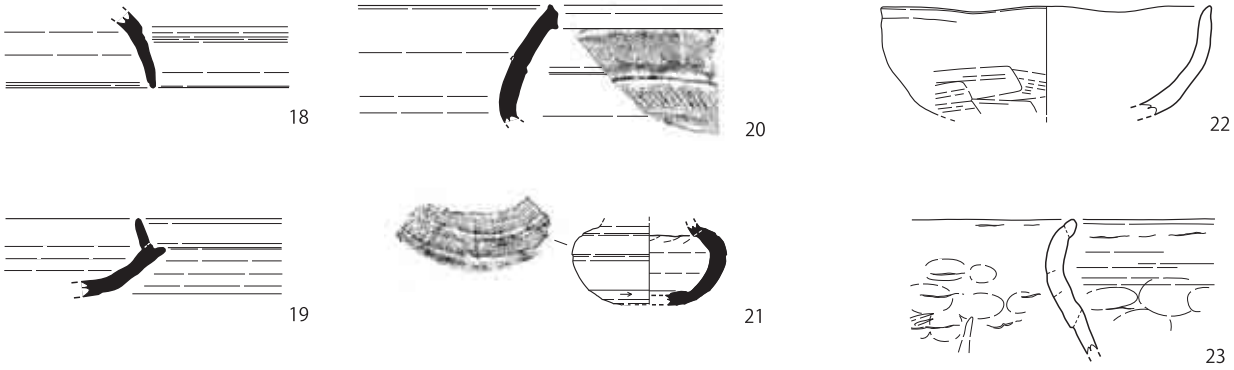


図45. 黒色土南区・北区　出土遺物

土師器

椀（22）　口縁部がわずかに外反し､復元口径 13.1 ㎝を測る。器面磨耗により調整は不明瞭であるが、底部外面にケズリが施され、ケズリに用いられた板状工具の板目痕が残る。

甕（23）　口縁部にはヨコナデが施されるが、内外面ともに接合痕と指頭痕が多く残り、胎土も粗くやや粗雑である。また肩部内面には工具痕もみられる。

その他

鉄滓（写真 258・259）　1 は椀形鍛冶滓の破片で、酸化土砂に覆われる。径は 10 ㎝を超えると思われる。上面は窪み、含鉄部がある。底面は滑らかで浅い皿状を呈し、炉壁粉が付着する。２は緻密な滓で、上面は厚い塊状の含鉄があり、3 つの側面が人為的に割られたようなシャープな破面をなす。底面は炉壁が薄く付着し、外周部側に向かって若干内湾する。炉底塊の可能性がある。３も緻密な滓の小破片で、上面に含鉄部があり、底面に薄く炉壁が付着する。

Ⅴ．自然科学分析

出土平瓦と粘土塊の胎土分析（写真 261）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大宰府条坊跡 249 次調査では、奈良時代とされる遺構や遺物が確認されている。それらの中で、柱穴とされる遺構の中より黒色を呈する粘土塊が出土している。発掘調査所見では、その粘土塊の由来として、瓦の原材料であった可能性のあることが指摘されている。

本報告では、上述の粘土塊および今回の発掘調査で出土した瓦片について、その材質の特性（胎土）を明らかにし、両者を比較することにより、粘土塊の由来を検討するための資料を作成するものである。

１．試料

試料は、大宰府条坊跡 249 次調査Ｅ7 区で検出された 249SB010b 抜取穴より出土した黒色粘土塊 1 点とＦ6 区 249SK029 より出土した凸面に離れ砂が付着する平瓦 1 点である。

黒色粘土塊は、出土時の記録によれば、黒褐色を呈し、縦 20㎝、横 10㎝、厚さ 5㎝ほどの大きさを呈していたとされる。

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。一方、後者の蛍光Ｘ線分析は、胎土中の砂粒だけではなく、素地を作っている粘土も含めた特性を表しており、また、機器分析による数値データで表されることから、客観性、再現性がよいということがある。したがって、ここでは薄片観察法および蛍光Ｘ線分析を併用して胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにする。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

(2) 蛍光Ｘ線分析

分析は､波長分散型蛍光Ｘ線装置を用いたガラスビード法による定量分析である。以下詳細を述べる。

a) 測定元素

測定元素はSiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の主要10元素およびLOIとRb、Srの各微量元素である。

b) 装置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

c) 試料調製

試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000g：試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中１回投入）

溶融温度；1200℃　約７分

d) 測定条件

Ｘ線管；Cr（50Kv － 50mA）

スペクトル；全元素K_α

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge

検出器；F-PC,SC

計数時間；PeaK40sec,Back20sec

３．結果

(1) 薄片作製観察

結果を表1、図46～48に示す。2点ともに胎土中の砂粒の主体を占めるのは、石英と斜長石の鉱物片であり、これらより少量のカリ長石の鉱物片が伴われる。これら以外の砂粒では、黒色粘土塊では黒雲母お

表1. 薄片観察結果

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	雲母鉱物	黒雲母	不透明鉱物	岩片 凝灰岩	多結晶石英	花崗岩類	その他 火山ガラス	植物珪酸体	合計
黒色粘土塊	砂	細礫												0
		極粗粒砂		2							3			5
		粗粒砂	7	5	7					3	4			26
		中粒砂	10	8	12		2		1	1	2			36
		細粒砂	17	6	19	5	5							52
		極細粒砂	10	4	22	5	5	1						47
		粗粒シルト	4	4	16	1							4	29
		中粒シルト		2	3									5
	基質													494
	孔隙													57
平瓦	砂	細礫												0
		極粗粒砂								3	1			4
		粗粒砂	1	4	5					3	6			19
		中粒砂	5	1	12					3		1		22
		細粒砂	6	2	17					1		1		27
		極細粒砂	17	2	26							2		47
		粗粒シルト	23	1	27								1	52
		中粒シルト	12		15								2	29
	基質													748
	孔隙													97

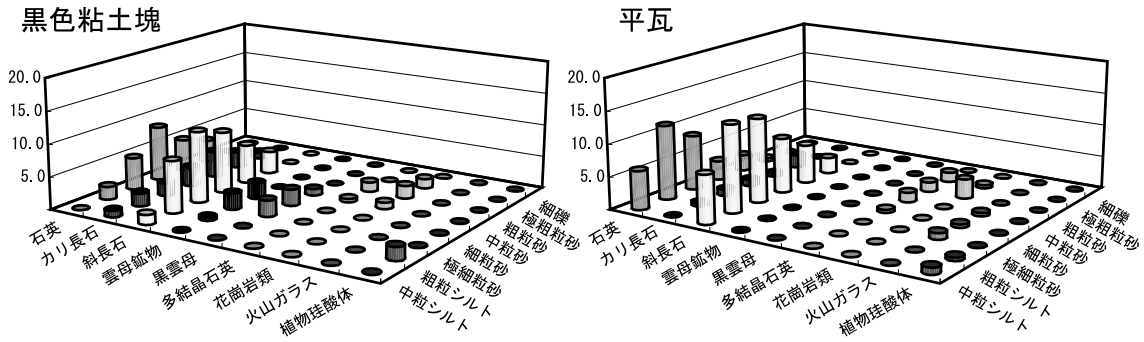


図46.　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

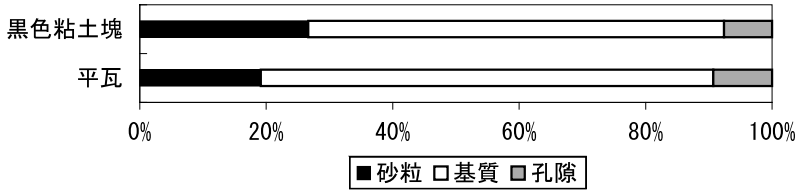


図47.　砂粒・基質・孔隙の割

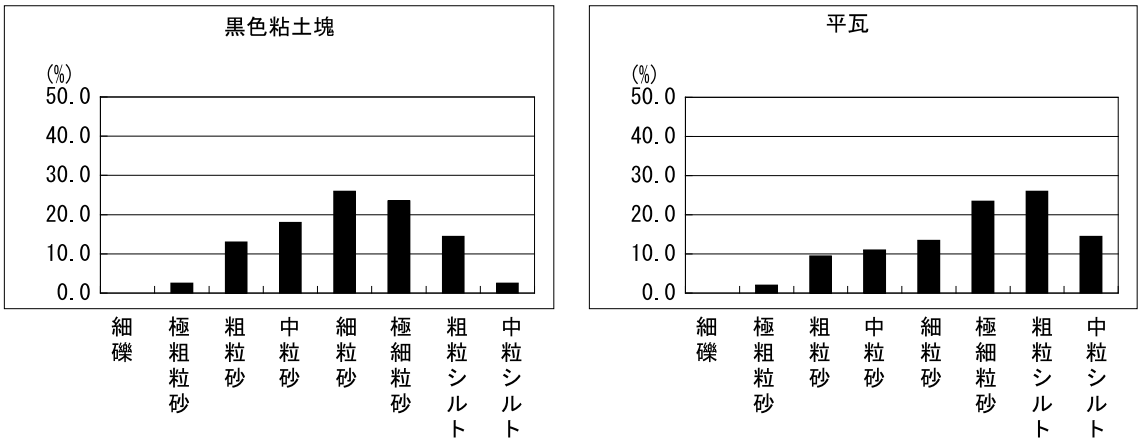


図48.　胎土中の砂の粒径組成

よび雲母鉱物を少量含むことが特徴であるが、平瓦には、これらの鉱物片は認められない。岩石片では、2 点ともに少量の多結晶石英と花崗岩類を含むが、黒色粘土塊にはさらに極めて微量の凝灰岩が含まれ、平瓦にはさらに少量の火山ガラスも含まれる。火山ガラスは、緩い曲率を持った扁平な形態いわゆるバブル型を呈する。同様の火山ガラスは、計数はされなかったが、黒色粘土塊中にも極めて微量認められた。なお、両者ともに微量の植物珪酸体も含まれる。

砂粒全体の量は、黒色粘土の方がやや多いが、平瓦との差は数%程度である。一方、粒径組成では、黒色粘土塊は細粒砂をモードとし、ヒストグラムは概ね左右対称の山形を呈するが、平瓦では、粗粒シルトをモードとし、ヒストグラムは、粗粒シルトよりも粗粒側になだらかな傾斜を持つ非対称の山形を呈する。

(2) 蛍光X線分析

結果を表 2 に示す。最も主要な元素である SiO_2 と Al_2O_3 では、黒色粘土塊の方が平瓦に比べて数%低

い値を示すが、その差は顕著なものではない。他の主要元素においては、両試料ともにほぼ同様の値を示し、それは、元素間の比を取った値により、比較的明瞭に確認される。また、Rb と Sr の微量元素においてもほぼ近似した値を示す。

表2. 蛍光X線分析結果（化学組成）

試料名	主要元素												微量元素		主要元素の比＊			
	SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na_2O (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	Ig.loss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	NK/CNK	K/NK	T/FT	M/FM
黒色粘土塊	58.77	0.68	20.07	2.04	0.02	0.39	0.78	1.28	2.23	0.03	13.71	100.00	102	167	0.82	0.64	0.25	0.16
平瓦	64.81	0.99	25.56	2.97	0.03	0.52	0.76	1.23	2.11	0.05	0.98	100.00	104	151	0.81	0.63	0.25	0.15

＊ NK/CNK：$(Na_2O+K_2O)/(CaO+Na_2O+K_2O)$
K/NK：$K_2O/(Na_2O+K_2O)$
T/FT：$TiO_2/(Fe_2O_3+TiO_2)$
M/FM：$Mgo/(Fe_2O_3+MgO)$

４．考察

薄片観察および蛍光Ｘ線分析により得られた、両試料の特徴のうち、石英、カリ長石、斜長石の量比や花崗岩類の岩石片を含むこと、さらに主要元素組成など、共通することが多い。しかし、その一方で、黒色粘土塊に認められる黒雲母や雲母鉱物の鉱物片が、平瓦には全く認められないことが大きな違いとして指摘できる。黒色粘土塊に認められた黒雲母や雲母鉱物の鉱物片は、焼成などによって消失するものではないため、黒色粘土塊が平瓦の原材料の一部としてでも使用されていれば、平瓦の胎土には微量の黒雲母あるいは雲母鉱物の鉱物片が認められるはずである。したがって、黒色粘土塊が、今回の試料とされた平瓦の原材料として使用された可能性はほとんどないと考えられる。

なお、蛍光Ｘ線分析による元素組成では、黒色粘土塊と平瓦とは非常に近似した値を示しており、仮に、薄片観察を行っていなければ、黒色粘土塊が平瓦の原材料であった可能性はあると判断していたであろう。この両試料間における元素組成の類似性の原因の１つとして、両試料を構成する粘土が、ともに同質（有色鉱物は黒雲母を主体とし、石英、カリ長石、斜長石の割合も近似する）の花崗岩類の風化砕屑物に由来すると言うことが考えられる。すなわち、平瓦に使用された粘土の方は、黒雲母の鉱物片まで粘土化してしまったような環境で形成されたものかも知れない。

ところで、黒色粘土塊から推定される地質学的背景は、黒雲母の鉱物片と花崗岩類の岩石片が認められたことから、黒雲母を主体とする有色鉱物組成の花崗岩類が広く分布し、他の地質はほとんど混在しないというような様相が考えられる。この地質学的背景は、大宰府条坊跡の位置する二日市低地帯（磯 , 2001：以下地形の名称は同様）の地質学的背景と一致する。二日市低地帯は、南西側に牛頸低山地、北東側に四王寺山脈および三郡山地、東～南東側に高尾丘陵の各山地または丘陵に囲まれている。これらの山地はいずれも白亜紀に貫入した早良花崗岩と呼ばれる地質により構成されている（久保ほか , 1993）。早良花崗岩は、主に粗粒な黒雲母アダメロ岩により構成されている（日本の地質「九州地方」編集委員会 , 1992）。二日市低地帯には、御笠川とその支流である大佐野川、鷺田川、高雄川などの河川により、早良花崗岩に由来する砕屑物が供給され、砂層や粘土層として堆積していることになる。すなわち、黒色粘土塊は、二日市低地帯の堆積物に由来する可能性がある。なお、黒色粘土塊には、凝灰岩の岩石片も極めて微量認められているが、これは、段丘上に堆積が認められている阿蘇４火砕流堆積物に由来する可能性がある。

平瓦については､その地質学的背景を示唆する砕屑物は花崗岩類の岩石片のみである。火山ガラスは、その形態から、おそらく表土中に含まれる第四紀のテフラに由来すると考えられるために、特に地質の指標とはならない。したがって、平瓦から推定される地質学的背景は、花崗岩類の分布域としか言えず、

花崗岩類についても、有色鉱物組成の傾向はわからない。しかし、上述したように近似した元素組成から、平瓦の胎土に認められた花崗岩類の岩石片も、黒色粘土塊と同様の花崗岩類に由来する可能性がある。この場合、平瓦の胎土の地質学的背景も黒色粘土塊と同様となり、それは、平瓦の胎土も二日市低地帯の堆積物に由来する可能性のあることを示す。

一方で、これまでに当社で分析した大宰府条坊跡、国分松本遺跡、脇道遺跡の各遺跡出土の弥生土器や土師器の分析例では、今回の黒色粘土塊のような黒雲母の鉱物片と花崗岩類の岩石片を特徴とする種類構成の試料は多数認められているが、今回の平瓦のように黒雲母の鉱物片が認められずに花崗岩類の岩石片を含むという種類構成の試料は認められていない。この状況からは、今回の平瓦の胎土は、二日市低地帯とは異なる地域の堆積物に由来する可能性もあると考えられる。

いずれにしても、今回の分析では、黒色粘土塊１点、平瓦１点からの推定である。したがって、より確かな解析のためには、同時期の瓦や土器等のさらなる分析例の蓄積が必要であると考えられる。

《引用文献》

磯　望　2001「第１編　太宰府市の地形と地質　第１章　地形」『太宰府市史　環境資料編』太宰府市 7-32 頁

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本　博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男　1993『20 万分の１地質図幅　福岡』地質調査所.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第 16 回大会研究発表要旨集』120-121 頁

日本の地質「九州地方」編集委員会　1992『日本の地質９　九州地方』共立出版　371 頁

Ⅵ．まとめ

１．遺構の変遷

今回の調査では、第１～４面の遺構面を確認した。古いものから遺構の変遷を概観する。

第４面では、古墳時代の土坑を確認した。その上には、６～７世紀代の遺物を含む北西側丘陵斜面からの流れ込み層が堆積する。

第３面では、３×３間の総柱式掘立柱建物である 249SB010 の掘形を確認した。この建物は３面で掘形を掘削して柱を据え、その後、整地層により２面を構築する。

第２面では、８世紀前半～中頃の整地層により整備された 249SB010 と東西道路 249SF015 がある。これらは８世紀後半には廃絶し、249SB010 抜取穴の上には焼土坑 249SK109 が構築される。

第１面は、249SF015 北側溝（249SD025）と同一位置に 249SD020 が掘削され、溝から南には炉跡群と焼土坑 249SK149 を確認した。そして調査区の南西隅に瓦窯 249SX001 が構築される。これらの時期は、炉跡群・焼土坑が８世紀後半～９世紀前半の間、瓦窯が９世紀前半、溝の最終的な埋没時期は９世紀前半になる。それ以後の時期の明確な遺構は確認できなかった。

次項から重要な遺構と遺物について若干の検討を行う。

２．249SB010 と 249SF015

249SB010 は、柱間が南北 7.13 m、東西 6.24 mを測る３×３間の総柱式掘立柱建物である。大宰府で類似の規模の建物を確認できなかったので、古代寺院における３×３間の総柱式礎石建物の事例を挙げておく。７世紀後半の大和山田寺宝蔵（SB660）は 5.95 m× 5.03 m、奈良時代の唐招提寺宝蔵は 7.63 m× 6.05 m、経蔵が 5.61 m× 4.40 mであり、本遺構の規模の大きさが伺える（奈文研、2002）。この建物と般若寺跡の関係だが、間に東西道路 249SF015 が存在する。この道路は、鏡山条坊案や 90 m

条坊案とは位置が一致せず、東西での延長も確認されていない。そのため、寺域南限と道路が関係あるか、さらには建物が寺域内に入るかも不明である。周辺調査の進展を待ち再度検討するべきであろう。なお、参考程度の数値であるが、塔跡基壇北辺の中心点はX＝55674.20、Y＝－444399.80（『般若寺跡Ⅱ』第３図から計測）になり、249SF015 両側溝心々の任意中心点はX＝55598.00、Y＝－44441.60 になる。つまり、塔跡基壇北辺から南に 76.2 m、東に 41.8 mの位置に 249SF015 が存在する。

３．炉跡群と冶金関連遺物

今回の調査では第１面に炉跡６基と焼土坑１基、第２面に焼土坑１基が確認され、鉄滓や炉壁、鞴の羽口などの冶金関連遺物も第１面から第４面にわたって数多く出土している。これらの冶金関連遺構や遺物は 249SB010 の建造・廃絶、瓦窯 249SX001 の構築を境として、わずかながらその分布や内容に変化が見られる。出土土器や層位関係を手がかりに、その変遷は以下のように５段階に区分できる。

A. 249SB010 建造以前（第３面～第４面）

第４面は遺構が少なく冶金関連遺物の出土もみられないが、第４面を覆う６～７世紀の堆積層である黒色土～黒褐色土から炉壁・羽口・鉄滓・椀形鍛冶滓・砥石などの冶金関連遺物が出土する。さらにその上の 249SB010 掘形掘削以前の堆積層である灰黒色土～淡黒色土からは炉壁・鉄滓が出土する。さらに８世紀前半～中頃の遺物を含む 249SB010 掘形や整地層からは少量であるが炉壁・羽口・トリベ・鋳型片・鉄滓・砥石が出土する。このように、古墳時代では椀形鍛冶滓のように鍛冶に伴う遺物がみられるが、第３面の 249SB010 建造直前にはトリベ・鋳型片のように鋳造に伴う遺物もみられるようになる。いずれも数は多くはないが、各層から冶金関連遺物が出土することから、調査区周辺に冶金関連の遺構があったと推測される。

B. 249SB010 建造時期（第２面）

建物存続期間中は 249SF015 の側溝と考えられる 249SD025 や 249SD106 から炉壁・鉄滓などの若干の冶金関連遺物が出土する程度であるが、柱抜取穴からは炉壁・トリベ・鉄滓・銅滓・鋳造作業時に銅がこぼれて固まったと思われる湯玉が出土する。このことから、249SB010 廃絶前から調査区周辺で銅製品の鋳造も行なわれていたことがわかる。

C. 249SB010 廃絶後（第２面）

８世紀後半の建物廃絶後は、調査区内に遺構が増え始め、炉壁・炉材・鋳型片・羽口・鉄滓・銅滓・湯玉・銅塊など冶金関連遺物の出土も増え始める。埋土にも炭が含まれることが多い。しかし、調査区内には焼土坑 249SK109 が１基検出されるのみで他に炉跡が確認されておらず、その後調査区内には炉壁・炉材・鋳型片・羽口・トリベ・鉄滓・椀形鍛冶滓・銅滓・湯玉・砥石を含む炭混茶灰色土～暗黄色土が調査区の北西側から流れ込んで堆積するため、調査区より北西側上方の緩やかな谷部に工房があったと推測される。ただし 249SK109 には炭が多く堆積し、黒鉛化木炭や炉材を含む冶金関連遺物が出土し、その周辺の遺構からも炉材が出土することから、炉に関連する遺構の可能性も考えられる。また、銅滓・湯玉・銅塊が出土するが、調査区内で出土する炉壁やトリベ（坩堝と断定できる大きさのものは調査区内で出土していない。）のほとんどには鉄錆状のものが付着しており、鉄製品と銅製品両方の鋳造が行なわれたと考えられる。さらに甑炉の炉台と考えられる炉材の出土から、溶解炉には甑炉が使用されていた可能性がある。

D. 炉跡群の出現（第１面）

第１面では炉跡６基と焼土坑１基が検出され、その周辺にも遺構が多く検出される。炉跡群を含む遺構はほぼ調査区中央に集中する。また調査区北側には 249SD020 があり、炉跡群側への雨水の浸水を防

ぐ排水溝の可能性がある。炉跡はいずれも径 20cm 程で、炉底を残すだけのものであるが、その規模・構造から甑炉を使用した溶解炉ではなく鍛冶炉の可能性が考えられる。また、その周辺の遺構からも炉壁や羽口、炭などが検出されており、鍛冶炉には鞴座や作業場、廃棄土坑などが付属する例がみられるため、これらの中にそういった付属施設が存在した可能性がある。この段階での冶金関連遺物は、炉壁・炉材（図 31-5）・羽口・鋳型片・鉄滓・銅滓・湯玉・銅塊・砥石が出土し、鍛造鉄片かと思われる鉄片も出土している。

E. **瓦窯の操業**（第１面）

９世紀前半には瓦窯 249SX001 や瓦窯関連遺構 249SX022・249SX029 などが調査区南西隅に構築されるが、他の遺構はほとんどみられず、瓦窯廃絶後も同様である。これらの遺構からは、炉壁・炉材・羽口・鋳型片・椀形鍛冶滓・銅滓・銅塊・砥石が出土し、調査区内の工房は消えたものの、その周辺にはまだ冶金関連の遺構が存在したことが推測される。また前段階にはみられなかった径の小さな円筒形の鋳型（図 23-22・23）が出土するようになり、作られる製品の種類に変化がみられる。

以上のように、調査区より北西側上方の谷部に鉄製品や銅製品の鍛冶・鋳造を行なう冶金関連工房が存在した可能性があり、249SB010 廃絶後には調査区内にも広がりをみせるが、瓦窯構築時には調査区内の工房は廃絶し、調査区の北西側上方の谷部では操業され続けるという変遷が想定される。古墳時代からも冶金関連遺物が出土することから、立地的にも適した場所であったことがうかがえる。

《参考文献》

・太宰府市教育委員会 2001『大宰府条坊跡Ⅻ－鉾ノ浦遺跡（大宰府条坊跡第 47 次調査）－』
・太宰府市教育委員会 2001『鉾ノ浦遺跡－中世の鋳造工房－』目で見る太宰府市の文化財４
・奈良文化財研究所 2004『川原寺寺域北限の調査－飛鳥藤原第 119 － 5 次発掘調査報告－』

４．瓦窯 SX001 について

般若寺跡周辺で初めて瓦窯を確認した。残りが悪く構造を明確にできないが９世紀前半の牀を持たない平窯の可能性が高い。ただし、全長が確認できず、すぐ背後に丘陵斜面が迫るため、登窯の可能性も否定できない。周辺では、都府楼北瓦窯（地下式登窯・10 世紀中頃か）、来木瓦窯（地下式有階無段登窯・10 世紀後半～ 12 世紀初頭）、来木北瓦窯（地下式有階無段登窯・10 世紀頃）、坂本瓦窯（地下式有階無段登窯か・10 ～ 11 世紀）、松倉瓦窯（地下式有階無段登窯・10 世紀前半頃）、国分瓦窯（地下式有階無段登窯・８世紀中頃）、剣塚瓦窯（地下式有階無段登窯・10 世紀前半）、水城瓦窯（有牀式平窯・８世紀中頃）が確認されているが、時期、構造等で一致するものはない。

なお、本窯で焼成した瓦については次項で検討する。

５．瓦窯 SX001 の生産瓦と般若寺跡の瓦について

（１）丸・平瓦について

249 次調査出土瓦の全点分析から 249SX001 で焼成した瓦が抽出可能か検討を行う。調査では出土したすべての丸・平瓦について、破片数と重量、技法の特徴を記録した（丸・平瓦全点観察表、CD 所収）。以下にその結果を述べる（表３～９）。

ａ．重量からわかること

丸・平瓦全点の破片数と重量を記録した理由は、より客観的な比較、検討を試みるためである。ただし、丸瓦と平瓦では１枚の重さが異なるので、重量比がそのまま屋根に実際に葺かれたであろう丸瓦と平瓦の比率とはならない。そのため完形品１枚の平均重量から個体数を算出することで、丸・平瓦の個

体数比率を算出する方法がある。奈良文化財研究所による飛鳥藤原・平城地域の宮・諸寺における調査では、丸瓦と平瓦の重量比換算個体数比は、1：3前後の事例が多く、また、堂塔周辺の調査では、丸・平瓦の総重量が100㎡あたり1～4ｔほど出土することが確認されている（奈文研、2003）。

さて、249次調査では、丸瓦は、587点、52.058kg、平瓦は、6154点、332.924kgになる。丸瓦と平瓦の重量比は、1：6.39。１点あたりの平均重量は、丸瓦0.089kg、平瓦0.054kgである。本調査は、完形品の丸・平瓦の出土例はなく、本来の完形品に比べて非常に細破片した資料が多い。そこで個体数については、丸瓦では、玉縁部分のみ欠損した資料が2kg、平瓦では、半分強残る資料が2.7kgであることから、丸瓦を約2.3kg、平瓦を約5kgと仮定してみる。個体数は、丸瓦は約26本、平瓦は約65本になり、個体数比は、1：2.5になる。一見、飛鳥藤原・平城地域と似たような数値になったが、個体重量の対象となる資料が各１点しかないことや、完形品から想定される１点あたりの重量に比べて、破片１点あたりの重量があまりに少ないため、個体数比の結果は参考程度にとどめておきたい。

また、第１面から第４面までの各面ごとの遺構出土丸･平瓦を確認してみると、第１面では、平瓦は、1696点、105.333kg、丸瓦124点、14.583kg。第２面では、平瓦384点、24.302kg、丸瓦39点2.724kg。第３面では、平瓦５点、0.326kg、丸瓦１点、0.013kg、第４面では、出土例がない（表７・８）。第１面での出土量が格段に増えていることが理解できる。ただし、灰原249SK022からは平瓦476点、31.684kg、丸瓦25点、2.635kgであり、灰原からの出土量としては極めて少ない。本調査地は、瓦窯の生産瓦の他、般若寺跡からの流れ込み資料もあるはずなので、次に技法の面から灰原出土資料が生産瓦と特定できるか検討する。

ｂ．　技法からわかること

丸瓦は、「玉縁」、凸面の「調整」、凹面の「調整」・「糸切痕」・「粘土紐痕」・「粘土板痕」、側面と端面の「調整」について、平瓦は、凸面の「調整」・「縄目の条数」・「糸切痕」・「離れ砂」、凹面の「調整」、桶の「側板痕」・「糸切」・「粘土紐痕」・「粘土板痕」、側面と端面の「調整」についてそれぞれの特徴と有無を記録した。なお、側面と端面の「調整」は『大宰府条坊跡Ｘ』（太宰府市教育委員会、1998）で設定した分類を一部改良して使用した（図49）。

丸瓦

結果として、細片化した資料が多いため、すべての項目で、分析に値する結果は得られなかったが、凸面の「調整」、凹面の「糸切痕」・「粘土紐痕」・「粘土板痕」、側面の「調整」の各項目から出土瓦の傾向を読み取ることができる。

表３は（添付CDには、各層・遺構別のデータも掲載、以下各表同じ）、丸瓦凸面の調整別に分類したものである。凸面調整には、すり消し、縄叩き、縄叩きのすり消し、格子叩きのすり消し、斜格子叩きがある。圧倒的にすり消しが多く、重量比で86.23％を占める。

表４は、表３に側面調整の分類を加味したものである。側面調整は分割破面を残すa0と削りにより破面の痕跡を残さないc0が多く、凹面側を面取り調整するc1がわずかに認められる。

その他、全点を確認した結果、玉縁丸瓦があり、糸切痕や粘土板の閉じ合せ痕を伴う粘土板巻きつけ技法によるものが大多数で、粘土紐巻きつけ技法によるものが少量ある。

以上の結果から、明確にその存在が指摘できる丸瓦として、３つの種類がある。

１類　粘土板作り（可能性のあるものを含む）。凸面は、すり消し、縄叩き、縄叩きのすり消し。側面調整は、a0、c0、c1。おそらく玉縁丸瓦になる。（図25-31、28-12の瓦）

２類　粘土紐作り。凸面はすり消しか縄叩きのすり消し。側面調整は不明。玉縁丸瓦か行基丸瓦か不明。（図41-10、42-4の瓦）

３類　粘土板作り。凸面は斜格子叩きか格子叩きのすり消し。側面調整は不明。玉縁丸瓦か行基丸瓦か不明。

なお、九州歴史資料館による般若寺跡の第３・４次調査では行基丸瓦が出土しているが、今回は小破片が多いためか確認できなかった（『般若寺跡Ⅱ』九州歴史資料館、1988）。

これらの瓦の中から、249SX001 で焼成した瓦を検討する（表７）。灰原 249SK022 からは、１類の瓦のみが出土している。これは別瓦窯からの流れ込みとした 249SK029 においても同じである。ただし、出土層位から見るなら１類の瓦は、３面以降の包含層や遺構からも出土しており、単純に１類の瓦が、生産瓦とは言い切れない。249SK029 からは、１点だけだが焼け歪み丸瓦（図 25-31）がある。これは１類の瓦で、凸面がすり消し、側面調整は a0 になる。そのため側面調整 a0 について検討すると、これも３面以降から出土が確認されているため生産瓦としての技法的特徴にはなりえない（CD 表４）。おそらく１類の瓦は細分可能で、それが 249SX001 をはじめとする周辺の瓦窯で焼成した瓦になるのであろう。

平瓦

平瓦では、凸面の「調整」・「離れ砂」、凹面の「側板痕」・「糸切」・「粘土紐痕」・「粘土板痕」、側面と端面の「調整」の各項目から以下の特徴を持つ瓦があることがわかる。

表５は凸面に付着する離れ砂の有無と調整、凹面における側板の有無について注目したものである。以下のように結果を箇条書きに記す。

- 凸面調整は、縄叩き、斜・正格子叩き、すり消しがある。縄叩きが多く重量比で全体の 68.39％を占める。また、すり消しは、部位が全面か部分的か不明であり、あるいは縄叩きや格子叩きの一部に含まれる可能性が高い。
- 桶の側板痕があるものは、縄叩き、格子叩き、すり消しとすべてに確認できる。
- 縄叩きは凸面に離れ砂が付着するものとしないものがある。この離れ砂は縄叩きにしか確認できない。
- 離れ砂のある縄叩き平瓦では、１点の例外を除き、側板痕は確認できない。

表６は、表５に側面調整の分類を加味したものである。

- A2a、A2b は、縄叩きで離れ砂がなく側板痕のあるものに多い。
- B2b、B3a は、縄叩きで離れ砂があり側板痕がないものにみられ、特にB3a が多い。
- 出土量の少ない格子叩きとすり消しでは傾向ははっきりしない。

その他、全点を確認した結果、粘土板の閉じ合わせ目痕や側板痕から粘土板桶巻作りとわかるものや、粘土紐の重なり痕から粘土紐桶巻作りとわかるものが少量ある。

以上の結果から、明確にその存在が指摘できる平瓦として４つの種類がある。

１類　粘土板桶巻作り。凸面は、縄叩き。凹面に糸切痕と側板痕を残す。側面は、A2a、A2b が多い。（図 30-7、40-14、41-11 の瓦）

２類　粘土板桶巻作り。凸面は、斜・正格子叩き。凹面に糸切痕と側板痕跡を残す。（図 32-4 の瓦）

３類　粘土紐桶巻作り。凸面は、縄叩き。凹面に側板痕を残す。（図 40-15、43-9 の瓦）

４類　凸面が縄叩きで離れ砂が付着する瓦。凹面に糸切痕はあるが側板痕は確認できないため、製作技法は１枚作りの可能性が高い。さらに特徴として凸面にも糸切痕を残すものがある。側面はB3a が多い。（図 21-2・5・11、23-24・25、26-32 ～ 34、29-2、31-3・4、32-5、40-16 の瓦）

これらの瓦の中で 249SK022 では、４類の瓦が圧倒的に多く出土する（表８）。焼け歪みと考えられる瓦もある（図 23-24）。249SK029 からの出土量も多い。層位的には３面段階での出土例はなく、少量が

249SX001 掘形（図 21-11）や１面直下から出土する。一方、１類の瓦は、若干ではあるが３面の基盤層から確認でき、さらに 249SB010 が廃絶し周辺が工房にかわるあたりからは出土量も増える。これは般若寺跡からの流れ込みであろう。２・３類については量が少なくはっきりしたことは言えない。以上から、瓦窯は 249SX001 と前後する形で調査区とその周辺に構築され、４類の平瓦を焼成していたと考えられる。

なお「Ｖ．自然科学分析」で、この４類の平瓦と瓦の原材料とおぼしき黒色粘土塊の分析を行った。結果、分析対象とした平瓦と黒色粘土塊には元素組成上の差はみられず、同質の花崗岩類の風化砕屑物を主体とすることから、黒色粘土塊と同様に平瓦の胎土も二日市低地帯つまり調査区周辺の堆積物に由来する可能性があるとしながらも、一方では薄片観察では雲母鉱物片が観察されないため平瓦の胎土は二日市低地帯とは異なる地域の堆積物に由来する可能性もあるとしている。つまり薄片観察による雲母鉱物片の存否が両試料の地質学的背景の違いを決定づけている。しかし、平瓦は黒色粘土塊に比べて砂粒の粒度が小さいもので構成されているうえに、黒色粘土塊中の雲母鉱物片も少量しか含まれていないこと、薄片観察による同定も任意抽出範囲内に限られるため、微量な雲母鉱物片の有無を見逃してしまう可能性もあることから、むしろ元素組成に注目して両試料の近似性が高いと考えた方が妥当ではなかろうか。今回は分析対象が黒色粘土塊１点、平瓦１点と、数が極めて少ないため、分析試料の増加とより詳細な分析が今後の課題である。

（２）軒瓦について

次に軒瓦について検討する。表９は、249 次調査と過去の調査での出土点数をまとめたものである。表採と２次調査分は点数が明確ではないため、軒瓦があるものは「●」で表示した。また、型式番号が設定されていない瓦もあり、般若寺跡で出土する軒瓦の種類は、表９で示したよりも多くなる。

さて、栗原和彦によれば般若寺跡のみから出土する軒丸瓦 059、239、292、軒平瓦 565 を般若寺跡周辺の瓦窯で焼成した瓦の候補として挙げている（栗原和彦、2006 年）。本調査では、249SX001 と 249SK022 からは軒瓦の出土はない。249SK029 からは軒丸瓦 290Ｂと 291（図 25-29・30）が出土しているが、ともに他遺跡に同笵例があり、瓦自身も焼け歪みなどなく般若寺跡周辺の瓦窯で焼成したものか判断できない。また、般若寺跡のみで出土する軒丸瓦 239（図 29-1）が 249SX001 を切り込む土坑 249SK003 から出土している。本例は、焼け歪みによるものか瓦当面にひび割れがある。この瓦が 249SX001 に存在し 249SK003 掘削時に混入したものか、他所から持ち込まれたものか区別できないため、249SX001 で焼成した瓦の候補にはなるが断定はできない。以上のように般若寺跡周辺で焼成した軒瓦の特定は本調査では出来なかった。

《参考文献》
・大川清 1972『日本の古代瓦窯』雄山閣考古学選書３
・栗原和彦 2006「大宰府とその周辺」『シンポジウム報告書　造瓦体制の変革－西日本－』帝塚山大学考古学研究所
・奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』
・奈良文化財研究所　2003『吉備池廃寺発掘調査報告』

249 次調査では瓦窯、道路、総柱式掘立柱建物、炉跡群などの遺構と土器、瓦類、冶金関連遺物などの遺物が出土した。これら遺構・遺物と般若寺跡、大宰府条坊との関係は、今後のさらなる周辺調査の成果を総合しながら検討していきたい。

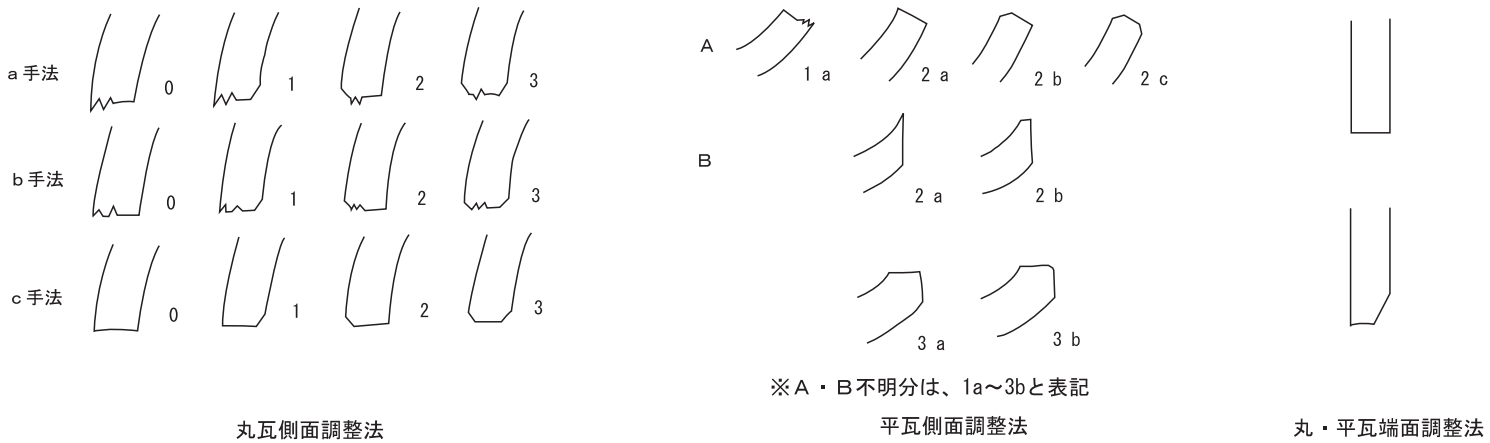


図49. 丸・平瓦観察部位模式図

表3 丸瓦凸面調整別の出土点数と重量(kg)

	すり消し		縄叩き		縄叩き→すり消し		格子叩き→すり消し		斜格子叩き		不明		総計	
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
総計	522	44.891	20	2.146	25	3.774	1	0.042	2	0.286	17	0.919	587	52.058
%	88.93	86.23	3.41	4.12	4.26	7.25	0.17	0.08	0.34	0.55	2.89	1.77	100%	100%

表4 丸瓦側面調整別の出土点数と重量(kg)

	すり消し		縄叩き		縄叩き→すり消し		格子叩き→すり消し		斜格子叩き		不明		総計	
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
総計 a0	38	8.947	5	0.758	3	0.441	0	0.000	0	0.000	2	0.136	48	10.282
%	79.16	87.02	10.42	7.37	6.25	4.29	0.00	0.00	0.00	0.00	4.17	1.32	100%	100%
総計 c0	36	4.523	0	0.000	2	0.752	0	0.000	0	0.000	0	0.000	38	5.275
%	94.74	85.74	0.00	0.00	5.26	14.26	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
総計 c1	3	0.182	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	3	0.182
%	100.00	100.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%

表5　平瓦凸面調整別の出土点数と重量(kg)

	縄叩き								斜・正格子								すり消し						不明		総計	
	離れ砂								離れ砂								離れ砂									
	あり				なし・不明				あり				なし・不明				あり		なし・不明							
	側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明					
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
総計	1	0.372	367	58.239	171	41.959	1,529	127.159	0	0.000	0	0.000	25	4.243	148	12.608	2	0.164	1	0.430	68	5.704	3,842	82.046	6,154	332.924
%	0.02	0.11	5.96	17.49	2.78	12.60	24.85	38.19	0.00	0.00	0.00	0.00	0.41	1.27	2.40	3.79	0.03	0.05	0.02	0.13	1.10	1.72	62.43	24.65	100%	100%

表6　平瓦側面調整別の出土点数と重量(kg)

	縄叩き								斜・正格子								すり消し						不明		総計	
	離れ砂								離れ砂								離れ砂									
	あり				なし・不明				あり				なし・不明				あり		なし・不明							
	側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明		側板痕なし･不明		側板痕あり		側板痕なし･不明					
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
2a　総計	0	0.000	0	0.000	1	0.468	12	1.523	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	4	1.017	17	3.008
%	0.00	0.00	0.00	0.00	5.88	15.56	70.59	50.63	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	23.53	33.81	100%	100%
2b　総計	0	0.000	13	3.738	19	4.834	61	8.874	0	0.000	0	0.000	1	0.377	5	1.314	0	0.000	0	0.000	2	0.297	3	0.372	104	19.806
%	0.00	0.00	12.50	18.87	18.27	24.41	58.65	44.81	0.00	0.00	0.00	0.00	0.96	1.90	4.81	6.63	0.00	0.00	0.00	0.00	1.92	1.50	2.89	1.88	100%	100%
2c　総計	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.116	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.116
%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00	100.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
A2a　総計	0	0.000	1	0.166	7	2.451	7	2.063	0	0.000	0	0.000	0	0.000	2	0.159	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	17	4.839
%	0.00	0.00	5.88	3.43	41.18	50.65	41.18	42.63	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	11.76	3.29	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
A2b　総計	0	0.000	0	0.000	9	7.047	5	1.325	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.430	0	0.000	0	0.000	15	8.802
%	0.00	0.00	0.00	0.00	60.00	80.06	33.33	15.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	6.67	4.89	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
A3a　総計	0	0.000	1	0.050	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.050
%	0.00	0.00	100.00	100.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
B2a　総計	0	0.000	1	1.252	1	0.493	2	0.730	0	0.000	0	0.000	1	0.253	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	5	2.728
%	0.00	0.00	20.00	45.89	20.00	18.07	40.00	26.77	0.00	0.00	0.00	0.00	20.00	9.27	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100%	100%
B2b　総計	0	0.000	14	3.463	2	0.607	4	1.614	0	0.000	0	0.000	2	0.380	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.396	23	6.460
%	0.00	0.00	60.87	53.61	8.70	9.40	17.39	24.98	0.00	0.00	0.00	0.00	8.70	5.88	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	4.34	6.13	100%	100%
B3a　総計	1	0.372	96	22.431	2	0.590	45	6.888	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.224	0	0.000	0	0.000	0	0.000	6	0.843	151	31.348
%	0.66	1.19	63.58	71.55	1.33	1.88	29.80	21.97	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.66	0.72	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3.97	2.69	100%	100%

表7　丸瓦類別の出土点数と重量(kg)

	１類		２類		３類		不明		総計	
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
表土～１面遺構										
表土・カクラン	22	2.085	0	0.000	0	0.000	1	0.017	23	2.102
暗茶色土	15	1.335	0	0.000	1	0.164	1	0.028	17	1.527
暗茶灰色土	143	10.400	0	0.000	0	0.000	2	0.061	145	10.461
赤茶色土	124	11.799	1	0.265	2	0.164	3	0.326	130	12.554
明黄色土	13	0.964	0	0.000	0	0.000	0	0.000	13	0.964
249SK018	20	1.327	0	0.000	0	0.000	2	0.136	22	1.463
249SK022	25	2.635	0	0.000	0	0.000	0	0.000	25	2.635
249SK029	18	4.440	0	0.000	0	0.000	0	0.000	18	4.440
１面その他遺構分　計	56	5.906	0	0.000	0	0.000	3	0.139	59	6.045
表土～１面遺構　計	436	40.891	1	0.265	3	0.328	12	0.707	452	42.191
暗褐色土～２面遺構										
暗褐色土	6	0.688	0	0.000	0	0.000	0	0.000	6	0.688
茶色土	17	1.099	1	0.082	0	0.000	0	0.000	18	1.181
暗黄色土	2	0.201	1	0.134	0	0.000	0	0.000	3	0.335
茶灰色土	52	3.974	0	0.000	0	0.000	1	0.014	53	3.988
炭混茶灰色土	4	0.356	0	0.000	0	0.000	0	0.000	4	0.356
２面　遺構分　計	35	2.526	0	0.000	0	0.000	4	0.198	39	2.724
暗褐色土～２面遺構	116	8.844	2	0.216	0	0.000	5	0.212	123	9.272
茶黄色土～３面遺構					0	0				
茶黄色土	6	0.371	0	0.000	0	0.000	0	0.000	6	0.371
暗茶褐色土	3	0.154	0	0.000	0	0.000	0	0.000	3	0.154
茶褐色土	2	0.057	0	0.000	0	0.000	0	0.000	2	0.057
３面　遺構分　計	1	0.013	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.013
茶黄色土～３面遺構	12	0.595	0	0.000	0	0.000	0	0.000	12	0.595
総計	564	50.330	3	0.481	3	0.328	17	0.919	587	52.058
%	96.08	96.68	0.51	0.92	0.51	0.63	2.90	1.77	100%	100%

表8　平瓦類別の出土点数と重量(kg)

	１類		２類		３類		４類		不明		総計	
	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ	点数	重さ
表土～１面遺構												
表土・カクラン	2	0.296	2	0.122	0	0.000	6	1.390	277	12.788	287	14.596
暗茶色土	7	2.349	1	0.136	0	0.000	24	3.061	333	9.652	365	15.198
暗茶灰色土	10	1.679	1	0.068	1	0.216	76	9.420	1,390	47.964	1,478	59.347
暗褐色土(I4)	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	3	0.199	3	0.199
赤茶色土	15	3.874	3	0.644	2	0.567	1	0.193	756	42.343	777	47.621
明黄色土	6	1.530	1	0.377	0	0.000	0	0.000	57	3.599	64	5.506
249SK018	2	0.199	0	0.000	0	0.000	34	3.809	338	10.174	374	14.182
249SK022	5	1.773	1	0.065	0	0.000	91	10.905	379	18.941	476	31.684
249SK029	3	0.550	0	0.000	0	0.000	42	8.155	86	5.041	131	13.746
１面その他遺構分　計	17	4.404	4	0.568	0	0.000	73	18.282	599	22.095	693	45.349
表土～１面遺構　計	67	16.654	13	1.980	3	0.783	347	55.215	4,218	172.796	4,648	247.428
暗褐色土～２面遺構												
暗褐色土	3	0.355	0	0.000	0	0.000	2	0.176	42	1.355	47	1.886
茶色土	11	3.372	4	0.630	0	0.000	6	1.698	402	11.672	423	17.372
暗黄色土	1	0.241	0	0.000	0	0.000	2	0.100	102	2.877	105	3.218
茶灰色土	68	16.547	3	0.445	1	0.612	0	0.000	380	16.953	452	34.557
炭混茶灰色土	1	0.143	0	0.000	0	0.000	0	0.000	22	0.651	23	0.794
暗茶灰色土（張出区）	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	10	0.439	10	0.439
２面　遺構分　計	13	2.857	5	1.188	0	0.000	11	1.422	355	18.835	384	24.302
暗褐色土～２面遺構	97	23.515	12	2.263	1	0.612	21	3.396	1,313	52.782	1,444	82.568
茶黄色土～３面遺構												
茶黄色土	1	0.064	0	0.000	0	0.000	0	0.000	21	0.852	22	0.916
暗茶褐色土	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	6	0.219	6	0.219
茶褐色土	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	5	0.186	5	0.186
黒灰色土	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	9	0.333	9	0.333
３面　遺構分　計	0	0.000	0	0.000	0	0.000	0	0.000	5	0.326	5	0.326
茶黄色土～３面遺構	1	0.064	0	0.000	0	0.000	0	0.000	46	1.916	47	1.980
淡黒色土	1	0.248	0	0.000	0	0.000	0	0.000	1	0.121	2	0.369
灰黒色土	1	0.083	0	0.000	0	0.000	0	0.000	12	0.496	13	0.579
総計	167	40.564	25	4.243	4	1.395	368	58.611	5,590	228.111	6,154	332.924
%	2.71	12.18	0.41	1.27	0.07	0.42	5.98	17.61	90.83	68.52	100%	100%

表9　般若寺跡出土軒瓦　型式別出土点数

軒丸瓦

	表採	２次	３・４次	249次	同笵例　「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」を参考に作成
059		●	4		般若寺跡
143Ｃ	●				般若寺跡　水城　政庁　官人居住区　条坊その他　国分寺
145b	●				般若寺跡　水城　政庁　官人居住区
223	●				鴻臚館式　般若寺跡　政庁　官衙地区　鴻臚館　杉塚廃寺など
239		●	11	1	般若寺跡
275Ａ	●				老司Ｉ式　般若寺跡　観世音寺　大野城　三宅廃寺　杉塚廃寺　老司瓦窯
290カ				2	
290Ｂ	●		19	4	般若寺跡　政庁　官衙地区　観世音寺　国分寺　大宰府条坊　杉塚廃寺　大野城など
291	●		3	3	般若寺跡　官衙地区　官人居住区　三宅廃寺　杉塚廃寺　鴻臚館
291カ				2	
292		●	7		般若寺跡
新型式				1	般若寺跡　図37－１

軒平瓦

	表採	２次	３・４次	249次	同笵例　「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」を参考に作成
560Ａ				2	
560Ａa		●	24	1	老司Ｉ式　般若寺跡　観世音寺　国分寺　国分尼寺　三宅廃寺　三宅瓦窯　老司瓦窯など
560Ａaカ				1	
560Ｂa’		●	11	3	般若寺跡　国分尼寺　剣塚瓦窯　杉塚廃寺　三宅廃寺　国分寺
560Ｆ				1	般若寺跡　官衙地区　大宰府条坊　杉塚廃寺
565		●	13		般若寺跡　政庁
635		●	8		鴻臚館式　般若寺跡　鴻臚館　政庁　官衙地区　観世音寺　水城　国分寺　国分尼寺など
647	●				般若寺跡　大宰府条坊　条坊その他　国分尼寺
704Ａ	●				般若寺跡　政庁

※　１次調査は、石造七重塔の解体修理に伴う調査のため出土瓦はない。

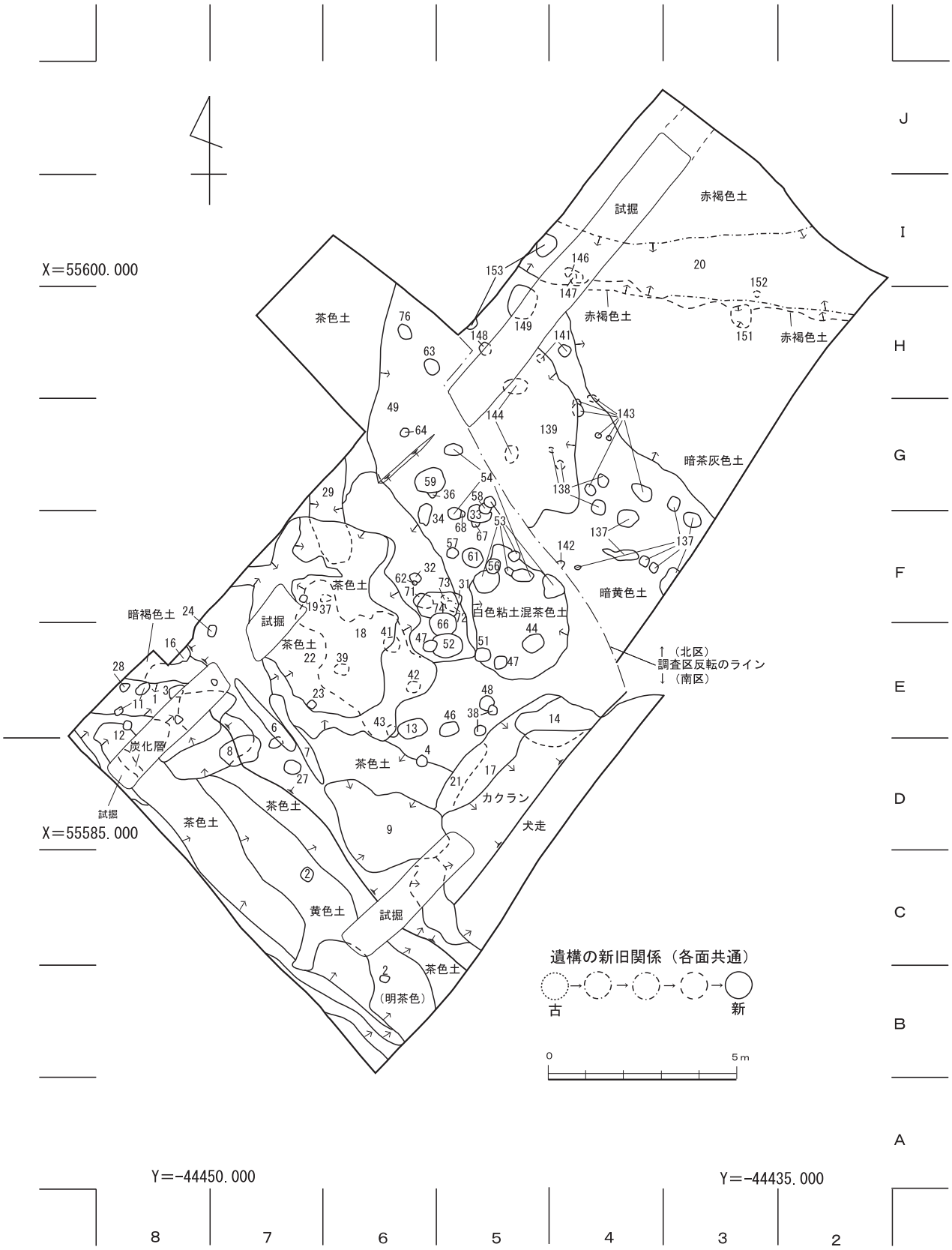


図50. 大宰府条坊跡第249次調査　第１面略測図（1/150）

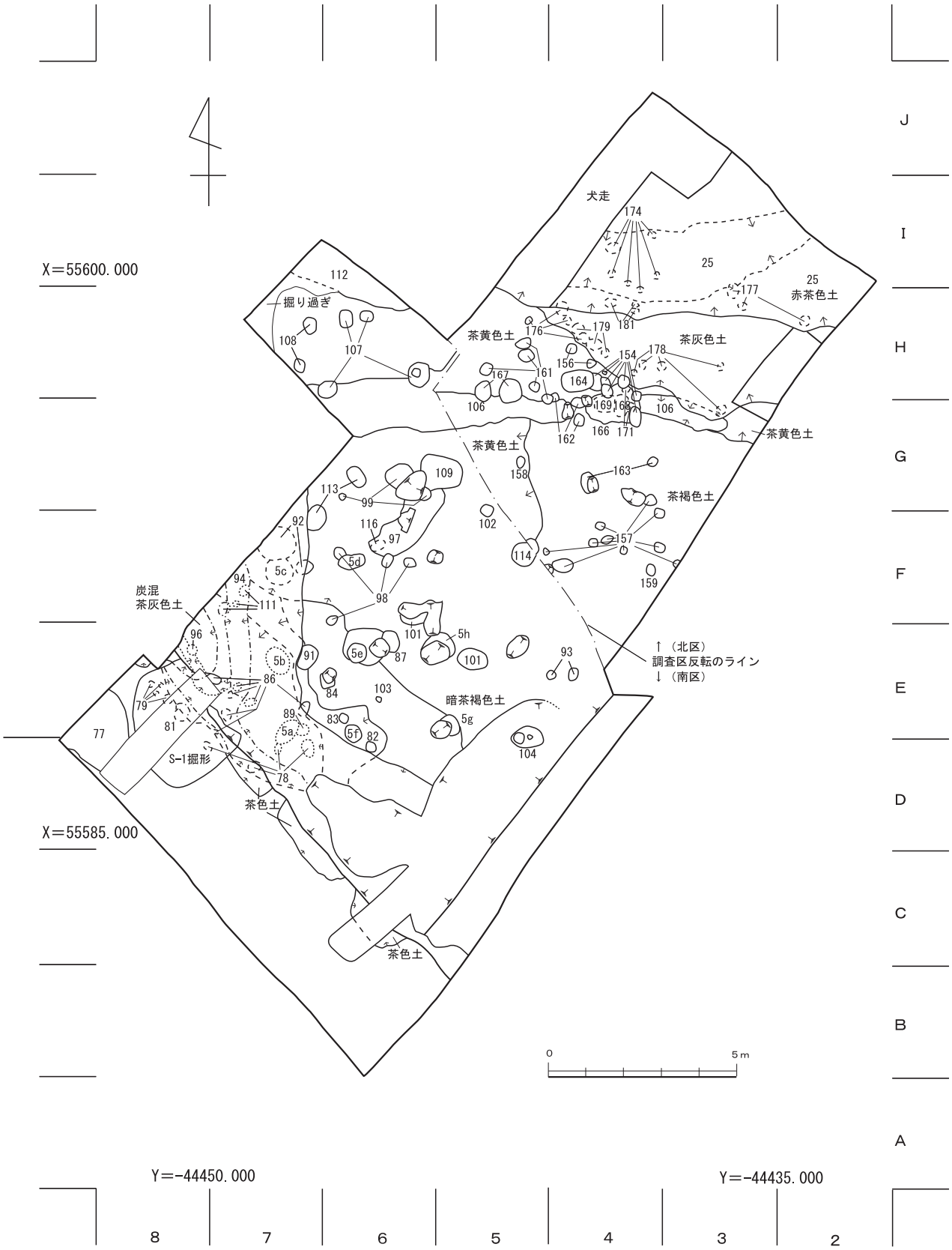


図51. 大宰府条坊跡第249次調査　第２面略測図（1/150）

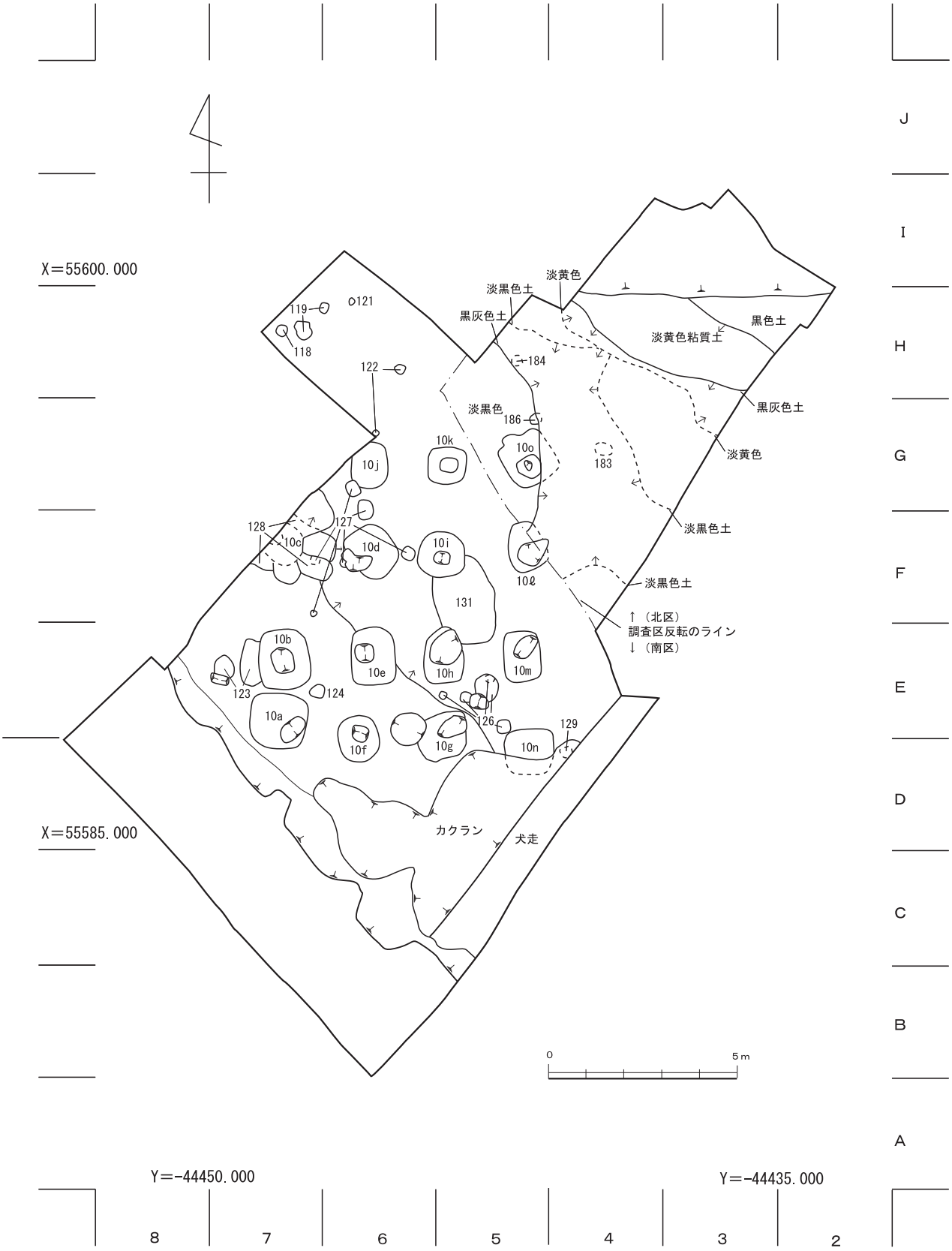


図52. 大宰府条坊跡第249次調査　第３面略測図（1/150）

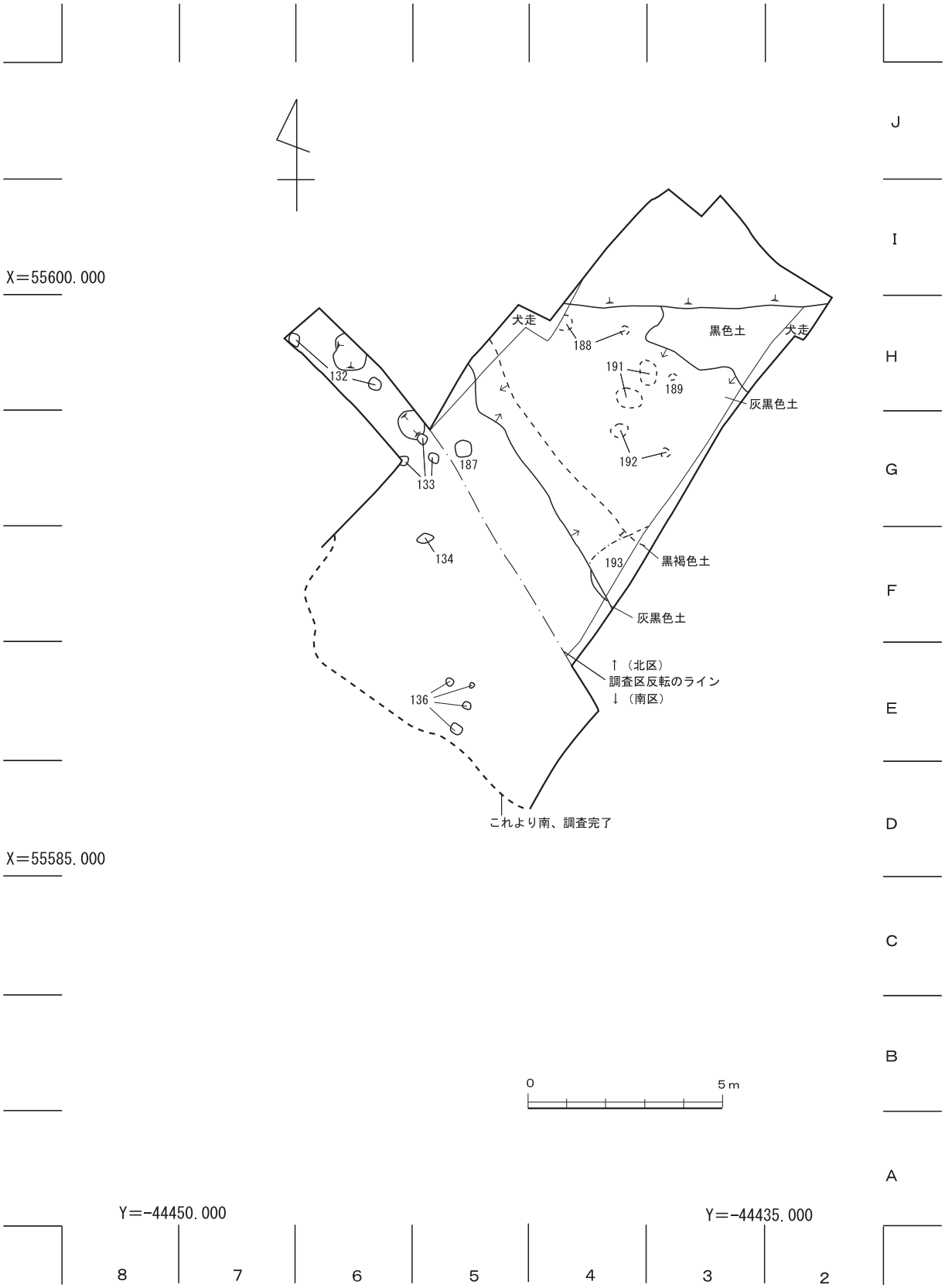


図53. 大宰府条坊跡第249次調査　第４面略測図（1/150）

大宰府条坊跡第249次調査　遺構番号台帳（1）

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
S-1	249SX001	瓦窯		灰黄色土（掘形）→炭層（埋土）→赤褐色土（埋土）	12・77→1→3・8・11・16・28	1	9C前半(VIA期)	D・E7・8
S-2		ピット群	2基	明茶色土		1		B6、D7
S-3	249SK003	土坑		茶色土	1→3	1	9C前半	E8
S-4		ピット		淡茶色土		1	奈良	D6
S-5		掘立柱建物	SB010の柱抜取穴、S-5ｃはSB010の抜取穴にならない			2	8C後半	D～G5～7
S-6		溝		暗茶色土	26→6	1	古代	D・E7
S-7	249SD007	溝		暗茶色土（炭少量）	22→7	1	奈良	D・E7
S-8	249SK008	土坑		茶褐色土（白色粘土混じる）	1→8	1	奈良	D7
S-9		撹乱	現代の植栽の抜取穴	茶色土	21→9	1	現代	C・D6
S-10	249SB010	掘立柱建物	3×3間の総柱建物			3	8C前半	D～G5～7
S-11		ピット群	2基	茶褐色土（炭少量）	1→11	1	古代	E8
S-12	249SK012	土坑	SK077の上層の可能性あり	茶褐色土	77→12→1	1	奈良	D・E8
S-13		土坑		茶灰色土→茶褐色土(白色粘土混じる)	43→13	1	奈良	D・E6
S-14		撹乱	現代の植栽の抜取穴	茶褐色土	17→14	1	古代	D・E4・5
S-15	249SF015	道路				2		H4
S-16		窪み		茶褐色土（白色粘土混じる）	1→16	1		E8
S-17	249SK017	土坑？	現代植栽抜取穴の一部の可能性あり	茶褐色土	21→17→14	1	中世後期	D・E5
S-18	249SK018	溜まり状	SX001廃絶後の流れ込み	明茶色土→茶褐色土（白色粘土混じる、炭もわずかにみられる）	22・23・29→18→19	1	9C前半	E・F6・7
S-19		ピット		暗茶褐色土	18・22→19	1		F7
S-20	249SD020	溝	包含層の赤茶色土とした土が最上層になる	茶褐色粘質土→茶褐色粘質土（φ2mmの白色粘土を少量含む）→明黄色粘質土→赤茶色土		1	平安前期	I2～5
S-21	249SD021	溝状		暗茶褐色土	21→9・17	1	8C後半	D5・6
S-22	249SK022	灰原	SX001の灰原	茶褐色土→茶褐色土（炭化物粒含む）→明茶色土（炭微量、黄色土粒がみられる）→暗茶褐色土（瓦、炭を多く含む）	37・39・41～43→22→7・18・19・23・29	1	9C前半	D～F6・7
S-23		ピット		茶褐色土（白色粘土混じる）	22→23→18	1		E7
S-24		ピット		暗茶褐色土		1	古代	E7・8
S-25	249SD025	溝	SF015の北側溝	淡黄色粘質土→暗灰色砂質土（少量の炭片、白色粘土を含む）→暗灰色土（少量の炭片）→暗褐色土（少量の炭片）→暗褐色砂質土（少量の炭片）	25→20・174・177	2	8C中頃～後半	I2～5
S-26		欠番						
S-27		ピット状		茶褐色土（白色粘土少量）	27→6	1	古代	D7
S-28		土坑		茶褐色粘質土（焼土粒含む）	1→28	1	古代	E8
S-29	249SK029	溜まり状		茶灰色土（炭含む）	22→29→18	1	9C前半（VIA期）	F・G6・7
S-30		欠番						
S-31	249SX031	炉跡		炭層	31→74	1		F5
S-32	249SX032	炉跡		炭層	32→62	1		F6
S-33		土坑		暗灰色土(炭混じる、滓を多く含む)	67→33→58	1		F5
S-34	249SX034	炉跡		炭層		1		F6
S-35		欠番						
S-36		小ピット		焼土・硬化土が混じる	36→59	1		G6
S-37		ピット		淡茶色土	37→22→29→18→19	1	古代	F6・7
S-38		ピット群	2基	茶色土	48→38	1	奈良	D・E5
S-39		ピット		茶灰色土（炭混じる）	39→22→29→18→19	1	古代	E6
S-40		欠番						
S-41	249SX041	ピット		茶灰色土（炭混じる）	41→22→29→18→19	1	奈良	E6
S-42	249SX042	ピット		茶灰色土（炭混じる）	42→22→29→18→19	1	8C後半	E6

大宰府条坊跡第249次調査　遺構番号台帳（2）

S-43		土坑		茶灰色土（白色粘土混じる）	43→13・22→29→18→19	1		D・E5・6
S-44		柱抜取穴	SB010m抜取穴になる。1面で検出したが2面遺構になる	暗茶褐色土（炭混じる）		2	8C後半	E5
S-45		欠番						
S-46		ピット		茶灰色土（白色粘土混じる）		1		D・E5
S-47		ピット群	2基	暗茶灰色土（炭混じる）	52→47	1	8C後半	E5
S-48		ピット		淡茶色土	48→38	1	古代	E5
S-49	249SX049	流れ込み		茶灰色土	49→63・64・76	1	8C後半	G・H5・6
S-50		欠番						
S-51		ピット		茶灰色土（炭混じる）		1	9C前半	E5
S-52		土坑状	SB010h抜取穴の一部の可能性あり	茶灰色土（白色粘土・炭混じる）	66→52→47	2	8C後半	E5・6
S-53		土坑群	5基	茶灰色土（炭混じる）	58→53→54・56	1	古墳～	F4・5
S-54		土坑群	3基	暗茶色土（炭混じる）	53・68→54	1		F・G5
S-55		欠番						
S-56		ピット		茶褐色土（炭混じる）	53→56	1		F5
S-57		柱抜取穴	SB010i抜取穴になる。1面で検出したが2面遺構になる	茶灰色土（白色粘土・炭混じる）		2	古代	F5
S-58		ピット		茶褐色土（白色粘土多量、炭混じる）	33→58→53	1	古墳～	F5
S-59	249SK059	土坑		茶灰色土（白色粘土多量、炭混じる）	36→59	1	8C後半	G5・6
S-60		欠番						
S-61		土坑		茶褐色土		1		F5
S-62		ピット		茶灰色土	32→62	1		F6
S-63	249SK063	土坑		暗褐色土	49→63	1	8C後半	H5・6
S-64	249SK064	土坑		茶灰色土	49→64	1	古代	G6
S-65		欠番						
S-66		土坑		茶灰色土（炭少量）	74→66→52	1	古代	E・F5・6
S-67	249SX067	炉跡	焼面のみ		67→33→58→53	1		F5
S-68	249SX068	炉跡	焼面のみ		68→54	1		F5
S-69		欠番						
S-70		欠番						
S-71		土坑？		灰褐色土（炭混じる）	71→74→66→52→47	1		F6
S-72		ピット		茶灰色土	73→72	1	古代	F5
S-73	249SX073	炉跡	焼面のみ		73→72→74→66→52→47	1		F5
S-74		土坑		茶灰色土（炭混じる）	31・71～73→74→66	1		F5・6
S-75		欠番						
S-76		土坑		茶褐色土（炭少量）	49→76	1		H6
S-77	249SK077	土坑		茶褐色土	77→12→1→3・8・11・16・28	1	奈良	E9
S-78		ピット状	4基	茶褐色土		2	古代	D7
S-79		小ピット群	4基	茶褐色土		2		E8
S-80		欠番						
S-81		ピット群	2基	暗褐色土	81→1	2		E8
S-82		ピット状		茶褐色土		2		D6
S-83		ピット状		茶褐色土		2		E6
S-84		ピット		茶灰色土		2		E6
S-85		欠番						
S-86		ピット群	7基	茶褐色土	86→94	2	古代	E7
S-87		土坑		茶褐色土（炭混じる）		2	古代	E6
S-88		欠番	S-10eに変更					
S-89		ピット状		茶褐色土（白色粘土微量）	89→5a	2		E7
S-90		欠番						
S-91		土坑状		茶褐色土（白色粘土多い）		2		E7

大宰府条坊跡第249次調査　遺構番号台帳（3）

S-92	249SK092	土坑群	2基	茶灰色土（白色粘土混じる）	5c→92	2	古代	F7
S-93		ピット状	2基	茶褐色土		2	奈良	E4
S-94	249SD094	溝	SB010の雨落溝か	茶灰色土（白色粘土多い）	86・111→94	2	奈良	F7
S-95		欠番						
S-96		ピット状		茶褐色土（炭混じる）		2	古代	E8
S-97	249SK097	土坑		暗茶灰色土	109・116→97→98・99	2	奈良	F6
S-98	249SX098	ピット状	4基	茶褐色土（粘土・炭微量）	97→98	2	8C末	F6
S-99	249SX099	ピット状	3基	暗褐色土（炭混じる）		2	奈良	G6
S-100		欠番						
S-101		土坑群	2基	暗褐色度（炭多い）		2	古代	E6
S-102		ピット		茶褐色土（白色粘土混じる）		2		F5
S-103		小ピット		茶灰色土（炭混じる）		2		E6
S-104		ピット群	2基の内1基がSB010n抜取穴になる	茶褐色土（灰色粘土わずか）		2	古代	D5
S-105		欠番						
S-106	249SD106	溝	SF015の南側溝	暗茶色粘質土（少量の炭を含む）→暗茶色土（白色・灰色粘土塊を含む）	106→107・154・161・162・166・167	2	～8C後半	G6
S-107		ピット状	4基	茶褐色土	106→107	2	古代	H6
S-108		ピット状	2基	茶褐色土		2		H7
S-109	249SK109	焼土坑	S-10抜取後に構築	暗茶灰色土（多量の炭片を含む）→暗茶褐色土（焼土片、炭片を含む）→茶褐色土（少量の炭片を含む）	109→97→98・99	2	古代	G5
S-110		欠番						
S-111		小ピット群	3基	茶褐色土	111→94	2		F7
S-112		溝	S-25の西側延長	暗茶灰色土(底面に暗褐色粘土が堆積)		2	奈良	I7
S-113	249SX113	ピット状	2基	茶褐色土		2	古代	G6
S-114		柱抜取穴	SB010ℓ抜取穴になる	茶褐色土（炭混じる）		2	8C中頃	F5
S-115		欠番						
S-116		ピット		茶褐色土（炭多い）	116→97→98・99	2		F6
S-117		欠番	SB010fに変更			3		E6
S-118		ピット		茶色土（暗褐色の柱状プラン有）		3		H7
S-119		ピット状	2基	茶色土（黄土色ブロック・炭化物粒含む、下層のしまりは強い）		3		H7
S-120		欠番						
S-121		小ピット	柱状痕あり	茶灰色土（炭混じる）		3		H6
S-122		ピット状	2基	茶灰色土(黄土色ブロック・炭混じる)		3		H6
S-123		土坑群	2基	赤黄色土	123→10b	3		E7
S-124		ピット		暗茶色土		3		E7
S-125		欠番						
S-126		土坑群	5基	暗茶色土		3		E5
S-127		ピット群	6基	暗茶灰色土	127→128	3	古代	G6
S-128		窪み状		暗茶色土	10c・127→128	3		F7
S-129		ピット		茶灰色土		3	古代	D4
S-130		欠番						
S-131		窪み状		暗茶褐色土（白色粘土が斑点状に混じる）		3	奈良	F5
S-132		ピット群	2基	黒褐色土		4		H6
S-133		ピット群	3基	黒褐色土		4		G5
S-134		ピット		暗茶灰色土（炭粒混じり）		4		F5
S-135		欠番						
S-136		ピット群	4基	茶灰色土		4		E5
S-137		ピット状	8基	暗茶灰色土（炭混じる）		1	古代	F3
S-138		ピット状	4基	暗茶灰色土（炭混じる）	138→139	1	8C後半	G4

大宰府条坊跡第249次調査　遺構番号台帳（4）

S-139		流れ込み	S-49と同一の可能性あり	暗茶灰色土（炭混じる）	138・141・143・144→139	1	古代	G5
S-140		欠番						
S-141		ピット状	2基	暗茶灰色土（炭・生焼瓦混じる）	141→139	1	古代	H4
S-142	249SX142	ピット状		暗茶灰色土		1	9C前半（VIA期）	F4
S-143		ピット状	7基	灰褐色土（炭混じり）	143→139	1	8C中頃	G4
S-144		炭溜まり	2基	暗褐色土（炭多量、スラグ混じる）	144→139	1	奈良	G5
S-145		欠番						
S-146		溜まり状		暗茶灰色土(炭・生焼瓦混じる)	146→147	1	古代	I4
S-147		ピット状		灰褐色土	146→147	1	奈良	I4
S-148		ピット状		暗茶灰色土(炭・生焼瓦混じる)		1	奈良	H5
S-149	249SK149	焼土坑	わずかに焼け面を伴う	暗茶灰色土（炭・焼土混じる）		1	古代	H5
S-150		欠番						
S-151		窪み		暗茶褐色土（砂混じり）		1	古代	H3
S-152		ピット状		茶褐色土		1	古代	H3
S-153	249SK153	土坑状	2基	茶褐色土（生焼瓦？含む）		1	古代	I5
S-154		ピット群	7基	茶灰色土	106・166・168・169・171→154→164	2	古代	G4
S-155		欠番						
S-156		ピット群	2基	茶褐色土		2		H4
S-157		ピット群	10基	暗褐色土（炭混じり）		2	奈良	F4
S-158		柱抜取穴	SB010o抜取穴になる	暗茶褐色土（灰色粘土をわずかに含む）		2		G5
S-159	249SX159	ピット状		暗褐色土（炭混じり）		2	古代	F4
S-160		欠番						
S-161		ピット状	5基	暗褐色土（炭混じり）	106・162→161	2	古代	H5
S-162		土坑群	3基	暗茶褐色土	106→162→161	2	古代	G4
S-163		ピット状	2基	暗褐色土		2		G4
S-164		柱穴？	まとまるものなし	暗茶褐色土	154→164	2	古代	H4
S-165		欠番						
S-166		窪み		暗褐色土（黄褐色土混じり）	106・168・169・171→166→154	2	奈良	G4
S-167		土坑状	2基	暗褐色土（やや粘質）	106→167	2	古代	H5
S-168		土坑状		暗茶褐色土（炭混じり）	169・171→168→166	2		G4
S-169		土坑状		暗褐色土	169→168→166→154→164	2		G4
S-170		欠番						
S-171		ピット状	2基	暗褐色土	171→168→166→154→164	2		G4
S-172		欠番	焼土遺構の埋土と判断したが茶灰色土の一部となる					
S-173		欠番						
S-174		ピット状	6基	明黄色土	25→174	2	奈良	I4
S-175		欠番						
S-176		ピット状	4基	暗褐色土（炭混じり）	176→179	2	古代	H4
S-177		ピット群	3基	明黄色土	25→177	2	古代	H3
S-178		ピット群	5基	茶褐色土		2	古代	H4
S-179		ピット群	3基	暗褐色土（炭・焼土含む）	176→179	2	奈良	H4
S-180		欠番						
S-181		ピット状	3基	茶褐色土		2		H4
S-182		欠番	S-163の掘り残し					
S-183		土坑		暗褐色土		3		G4
S-184		ピット		茶灰色土（炭混じり）		3		H5
S-185		欠番						
S-186		ピット		茶褐色土（暗褐色土混じり）		3	8C前半	G5

大宰府条坊跡第249次調査　遺構番号台帳（5）

S-187		ピット		黒褐色土		4		G5
S-188		ピット群	2基	黒褐色土		4		H4
S-189		ピット状		黒褐色土		4		H3
S-190		欠番						
S-191		土坑群	2基	黒褐色土		4		H4
S-192		ピット状	2基	黒褐色土		4		G4
S-193	249SK193	土坑		黒褐色土（炭混じり）		4	古墳	F4
暗茶色土			除去後、1面検出	暗茶灰色土→暗茶色土			近世	調査区全体
暗茶灰色土			除去後、1面検出	赤茶色土→暗茶灰色土			中世前期	Hラインより北
赤褐色土			除去後、1面検出	暗茶灰色土→赤褐色土				Iラインより北
暗褐色土			S-20埋土を含む	黒色土→暗褐色土			古代	I4
赤茶色土			S-20埋土の最上層	明黄色土→赤茶色土			平安前期	Iラインより北
明黄色土			S-20埋土を含む	S-20→明黄色土			古代	Iラインより北
暗褐色土				茶色土→暗褐色土			奈良後半～平安前期	E8
茶色土				茶灰色土→茶色土			奈良	D5･6、E7、F6･7、G6、H6
暗黄色土			除去後、2面検出	茶色土→暗黄色土			奈良	E～Iラインの間
茶灰色土			除去後、2面検出	炭混茶灰色土・淡黄色粘質土→茶灰色土			8C後半	E6･7、H3･4
炭混茶灰色土			除去後、2面検出	赤黄色土→炭混茶灰色土			奈良	F7
暗茶灰色土			除去後、2面検出	茶黄色土→暗茶灰色土			奈良	H6
茶黄色土			整地層	黒灰色土→茶黄色土			奈良	H4～7、G5
茶褐色土			整地層　茶褐色土＝暗茶褐色土	黒灰色土→茶褐色土			8C前半	Gライン付近
暗茶褐色土			整地層	赤黄色土→暗茶褐色土			8C前半	Fライン付近
赤黄色土			整地層　除去すると地盤面（4面）になる	地盤→赤黄色土			不明	E6・7
黒灰色土			除去後、3面検出	淡黒色土→黒灰色土			8C前半	F4、G3･4、H3～5
淡黒色土				灰黒色土→淡黒色土			～8C前半	Gライン付近
淡黄色粘質土				灰黒色土→淡黄色粘質土			～8C前半	Hライン付近
灰黒色土				黒褐色土→灰黒色土			～8C前半	Gラインより北
黒褐色土				黒色土→黒褐色土			7C	Gライン付近
黒色土（南区）			除去後4面検出。上位の層を含む	地盤→黒色土			6C前半～7C中頃	Fライン付近
黒色土（北区）			除去後、4面検出	地盤→黒色土			6C中頃～7C前半	Gラインより北

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（1）

（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-1赤褐色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図21-1	土師器	坏×皿	―	2.5+α	―			
002	図21-2	瓦	平瓦	厚さ2.0	長さ9.5+α	幅6.2+α			

S-1炭層

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図21-4	土師器	皿a	(14.4)	1.65	(10.4)	ヘラ		
002	図21-3	土師器	皿×坏	―	2.4+α	―			
003	図21-5	瓦	平瓦	厚さ2.3	長さ6.5+α	幅6.2+α			
004	図21-7	鉄製品	鉄釘	現存長2.95	軸部幅0.3～0.1	軸部厚0.2～0.12			
005	図21-6	鉄製品	鉄釘	現存長2.35	軸部幅0.3～0.15	軸部厚0.3～0.15			

S-1赤色土（酸化層）

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図21-8	瓦	平瓦	厚さ1.6	長さ10.3+α	幅11.9+α			

S-1掘形

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図21-10	土製品	用途不明土製品	―	8.0+α	(11.0)			
002	図21-9	土師器	坏a	(13.0)	3.5	(8.0)	ヘラ		○
003	図21-11	瓦	平瓦	厚さ2.0	長さ6.2+α	幅6.9+α			

S-3

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図29-1	瓦	軒丸瓦239	中房厚5.3	直径17.0	中房径6.0			
002	図29-2	瓦	平瓦	厚さ1.9	長さ13.5+α	幅12.2+α			

S-5a（249SB010a抜取穴）

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図33-1	須恵器	蓋c3	―	2.3+α	―			

S-7

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図27-1	土師器	坏	―	2.6+α	―			
002	図27-2	瓦	軒丸瓦290Ｂ	中房厚2.6	直径10.1+α	中房径4.5+α			

S-8

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図29-3	土師器	皿a	―	1.95	―			

S-10e

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図37-1	須恵器	坏×皿	―	3.2+α	―			

S-12

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図29-4	土師器	甕a	―	6.8+α	―			

S-17

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図29-5	瓦	道具瓦(用途不明)	厚さ1.8	長さ5.5+α	幅6.5+α			

S-18

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図22-1	土師器	坏a	―	2.4+α	(7.5)	ヘラ		
002	図22-2	土師器	坏c	―	3.2+α	(7.0)			
003	図22-3	土製品	鋳型	現存高4.7	最大幅5.7	鋳型面現存高3.2	鋳型面最大径1.4		
004	写真105	瓦	軒丸瓦(型式不明)						
005	写真106	瓦	軒丸瓦(型式不明)						
006	写真107	瓦	軒丸瓦(型式不明)						
007	図22-5	瓦	平瓦	厚さ1.4	長さ4.9+α	幅5.7+α			
008	図22-4	瓦	丸瓦	厚さ2.0+α	長さ13.2+α	幅9.8+α			
009	図22-6	鉄製品	鉄鏃	現存長4.75	鏃身部長3.1	刃部最大幅1.6	刃部厚0.2		
010	図22-8	鉄製品	鉄釘	現存長5.9	軸部幅0.6～0.33	軸部厚0.5～0.27			
011	図22-7	鉄製品	鉄釘	現存長5.0	軸部幅0.65～0.25	軸部厚0.6～0.18			

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（2）

S-20　　（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図28-17	須恵器	皿a	(14.2)	2.25	(11.4)	ヘラ	○	○
002	図28-16	須恵器	坏×皿	―	2.0+α	―			
003	図28-13	須恵器	蓋3	―	1.0+α	―			
004	図28-14	須恵器	蓋3	―	1.2+α	―			
005	図28-15	須恵器	蓋3	―	1.3+α	―			
006	図28-18	鉄製品	鉄釘×鋲	現存長2.25	頭部径1.4	軸部幅0.5～0.45	軸部厚0.5～0.45		
007	写真168・169	土製品	炉壁	長さ9.8＋α	幅11.2＋α	厚さ5.2			

S-21

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図28-19	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚1.0+α					
002	図28-20	鉄製品	鉄釘	現存長4.05	頭部幅1.35	軸部幅0.8～0.88	軸部厚0.55～0.9		
003	図28-21	鉄製品	鉄釘	現存長3.95	軸部幅0.48～0.2	軸部厚0.5～0.2			

S-22

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図22-9	須恵器	坏	―	2.8+α	―			
002	図22-16	土師器	大椀	―	5.3+α	―			
003	図22-18	土師器	甕a	―	3.7+α	―			
004	図22-19	土師器	甕a	―	3.85+α	―			
005	図22-20	土師器	甕a	―	7.5+α	―			
006	図22-11	土師器	坏a	―	1.45+α	(6.3)			
007	図22-15	土師器	坏a	―	1.95+α	(9.4)			
008	図22-17	土師器	皿	―	2.2+α	―			
009	図22-12	土師器	坏a	―	1.4+α	(7.0)	ヘラ		
010	図22-10	須恵器	壺（搬入）	―	3.9+α	―			
011	図22-21	土師器	鉢（精製）	―	3.9+α	―			
012	図22-14	土師器	坏a	(12.4)	3.65	(7.4)	ヘラ		
013	図22-13	土師器	坏a	―	1.6+α	(7.2)	ヘラ		
014	図23-23	土製品	鋳型	鋳型面径（9.2～10.2）	現存高13.45+α	外型最大径(16.0)			
015	図23-22	土製品	鋳型	鋳型面径（10.0）	現存高17.6+α	外型最大径(16.2)	底径(15.6)		
016	図23-25	瓦	平瓦	厚さ2.4	長さ11.4+α	幅10.4+α			
017	図23-24	瓦	平瓦	厚さ2.1	長さ6.5+α	幅6.4+α			
018	写真124	土製品	鋳型	長さ6.3＋α	幅3.5＋α				
019	写真124	土製品	鋳型	長さ5.8＋α	幅5.3＋α				
020	写真124	土製品	鋳型	長さ5.7＋α	幅6.2+α				
021	写真124	土製品	鋳型	長さ2.4+α	幅3.4+α				
022	写真124	土製品	鋳型	長さ3.2+α	幅2.8+α				
023	写真124	土製品	鋳型	長さ4.4+α	幅2.8+α				
024	写真124	土製品	鋳型	長さ3.8＋α	幅2.2+α				
025	写真124	土製品	鋳型	長さ2.7+α	幅2.4+α				
026	写真124	土製品	鋳型	長さ5.1+α	幅3.7+α				
027	写真124	土製品	鋳型	長さ4.7+α	幅2.0+α				
028	写真124	土製品	鋳型	長さ3.9+α	幅1.1+α				
029	写真124	土製品	鋳型	長さ3.3+α	幅5.5+α				
030	写真124	土製品	鋳型	長さ5.5+α	幅1.5+α				
031	写真124	土製品	鋳型	長さ1.3+α	幅2.5+α				
032	写真124	土製品	鋳型	長さ4.9+α	幅4.0+α				

S-25暗灰色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図34-2	須恵器	蓋3	―	1.7+α	―			
002	図34-1	須恵器	蓋3	―	0.8+α	―			
003	図34-3	鉄製品	鑿	現存長8.45	現存最大幅1.8	現存最大厚1.8			

S-25淡黄色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図34-4	須恵器	坏c	(13.9)	3.7	(9.4)	ヘラ	○	

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（3）

（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
002	図34-5	瓦	軒丸瓦291	中房厚3.5	直径12.6+α	中房径6.0			

S-29

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図25-29	瓦	軒丸瓦291	中房厚2.2	直径9.0+α	中房径3.5+α			
002	図25-30	瓦	軒丸瓦290Ｂカ		直径6.7+α				
003	図24-16	土師器	鉢（精製）	―	2.0+α	―			
004	図24-4	土師器	坏a	―	1.95+α	（7.4）			
005	図24-14	土師器	皿a	―	1.5+α	―	ヘラ		
006	図24-9	土師器	坏a	―	2.55+α	（9.0）			○
007	図24-11	土師器	坏c	―	3.25+α	8.1			
008	図24-6	土師器	坏a	（12.8）	（3.7）	6.9	ヘラ		
009	図24-2	須恵器	坏c	（17.4）	8.5	（8.9）	ヘラ	○	
010	図25-27	土師器	甑	―	0.9+α	―			
011	図24-5	土師器	坏a	―	1.75+α	7.8	ヘラ		
012	図25-23	土師器	甕a	―	3.7+α	―			
013	図25-24	土師器	甕a	―	6.85+α	―			
014	図24-3	須恵器	甕a	―	4.0+α	―			
015	図24-1	須恵器	蓋4	（13.8）	3.05	天井部径（7.6）	ヘラ	○	
016	図25-22	土師器	甕a	―	4.6+α	―			
017	図25-25	土師器	甕a	―	4.8+α	―			
018	図24-10	土師器	坏×皿	―	3.5+α	―			
019	図25-21	土師器	甕a	―	4.95+α	―			
020	図24-8	土師器	坏a	（13.2）	3.25	（8.0）			
021	図24-13	土師器	坏d	―	2.75+α	―			
022	図24-17	土師器	把手付甕（精製）	―	3.85+α	―			
023	図24-15	土師器	皿a	（14.3）	2.05	（12.2）			
024	図24-12	土師器	椀c1	―	5.05+α	7.4			
025	図24-20	土師器	甕a	（26.6）	7.95+α	―			
026	図24-18	土師器	甕a	（27.8）	5.2+α	―			
027	図25-26	土師器	甕	（16.6）	3.35+α	―			
028	図24-19	土師器	甕a	（29.6）	11.2+α	―			
029	図24-7	土師器	坏a	13.6	3.7	8.7	ヘラ		○
030	図25-28	土師器	甑	―	4.0+α	―			
031	図26-32	瓦	平瓦	厚さ2.2	長さ10.9+α	幅8.4+α			
032	図26-33	瓦	平瓦	厚さ2.2	長さ13.6+α	幅11.8+α			
033	図25-31	瓦	丸瓦	厚さ2.7	長さ13.7+α	幅15.0			
034	図26-34	瓦	平瓦	厚さ3.0	長さ22.9+α	幅13.4+α			
035	写真146･147	土製品	炉材	―	9.9＋α	―			

S-41

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図32-1	土師器	甕a	―	5.35+α	―			

S-42

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図32-2	須恵器	坏	―	3.25+α	―			

S-44（249SB010m抜取穴）

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図33-3	須恵器	蓋3	―	0.9+α	―			
002	図33-4	土製品	トリベ	―	0.75+α	―			

S-49

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図32-3	須恵器	甕b	―	6.4+α	―			
002	図32-4	瓦	平瓦	厚さ3.2	長さ8.3+α	幅8.7+α			
003	図32-5	瓦	平瓦	厚さ2.0	長さ16.0+α	幅10.8+α			

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（4）

S-52（249SB010h抜取穴）　　（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図33-2	須恵器	坏c	―	4.9+α	―			

S-59

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図30-6	瓦	軒平瓦560Ｂa’	瓦当厚6.8	顎長5.6				
002	図30-3	須恵器	皿	―	2.55+α	―			
003	図30-2	須恵器	蓋3	―	1.95+α	―			
004	図30-1	須恵器	蓋3	―	1.1+α	―			
005	図30-4	土師器	把手付甕	―	13.3+α	―			
006	図30-5	土製品	羽口	現存長13.5	先端内径1.9	元部側外径7.5	元部側内径3.8		
007	図30-7	瓦	平瓦	厚さ2.5	長さ18.9+α	幅13.4+α			

S-63

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図31-2	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚2.0+α	顎長6.4				
002	図31-1	須恵器	壺	―	7.5+α	―			
003	図31-3	瓦	平瓦	厚さ2.6	長さ20.5+α	幅13.1+α			
004	図31-4	瓦	平瓦	厚さ1.8	長さ15.9+α	幅23.1+α			

S-64

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図31-5	土製品	炉材	(29.4)	15.65	(20.0)			

S-77

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図31-6	土師器	坏×皿	―	2.85+α	―			
002	図31-7	土師器	坏a	―	1.2+α	―			

S-92

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図35-1	塼	塼	厚さ6.4+α					

S-94

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図34-6	土師器	坏×皿	―	2.4+α	―			

S-97

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図35-2	土師器	甕a	―	5.9+α	―			
002	図35-3	土製品	羽口	現存長15.65	中心部外径8.9～9.0	中心部内径3.5～4.2	厚さ2.9～3.0		

S-98

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図36-2	土師器	甕	―	8.9+α	―			
002	図36-1	土師器	椀c1	(15.0)	6.05+α	(8.5)			

S-99

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図36-3	瓦	軒平瓦560Ｂa’	瓦当厚7.4	顎長5.4				

S-106

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図34-10	須恵器	蓋3	―	2.1+α	―			
002	図34-8	須恵器	蓋c	―	2.9+α	―			
003	図34-15	須恵器	皿	―	2.7+α	―			
004	図34-14	須恵器	坏c	―	3.55+α	―			
005	図34-12	須恵器	蓋3	―	1.8+α	―			
006	図34-11	須恵器	蓋3	―	1.45+α	―			
007	図34-13	須恵器	坏c	(13.9)	4.1	(10.1)			
008	図34-9	須恵器	蓋c3	(13.3)	2.6	天井部径（10.6）			
009	図34-16	須恵器	甕a	―	10.45+α	―			
010	写真200	土製品	鋳型	―	5.1＋α	―			

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（5）

（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

S-106暗茶褐色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図34-7	瓦	軒平瓦560Aa	瓦当厚5.3	顎長3.7				

S-109

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図35-4	須恵器	坏×皿	―	1.95+α	―			
002	写真206・207	その他	鉄滓	長さ6.3	幅6.0	厚さ2.1	重量64g		
003	写真206・207	その他	鉄滓	長さ6.1	幅4.9	厚さ4.2	重量131g		
004	写真206・207	その他	鉄滓	長さ5.4	幅5.2	厚さ2.3	重量64g		

S-113

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図36-5	須恵器	蓋3×高坏	―	0.75+α	―			
002	図36-4	須恵器	蓋c3	（14.4）	2.25+α	天井部径（9.9）			
003	図36-6	須恵器	坏×皿	―	1.4+α	―		○	

S-142

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図32-6	土師器	坏a	15.3	5.85	9.2			

S-153

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図31-8	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚1.0					

S-159

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図36-8	瓦	軒丸瓦290B	中房厚3.8	直径13.8+α	中房径7.3			
002	図36-7	土製品	羽口	現存長10.8	先端外径4.2	先端内径2.4			

S-193

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図38-2	土師器	椀	―	2.8+α	―			
002	図38-1	土師器	椀	―	3.4+α	―			

暗茶色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図39-1	瓦	軒平瓦560F	瓦当厚3.5+α					
002	図39-2	鉄製品	鉄釘	現存長2.9	頭部幅0.95	軸部幅0.43～0.37	軸部厚0.48～0.43		
003	図39-3	鉄製品	鉄釘	現存長2.35	軸部幅0.45～0.2	軸部厚0.48～0.25			
004	図39-4	鉄製品	用途不明鉄製品	現存長3.55	最大径1.4				
005	写真217	土製品	窯壁	長さ7.8+α	幅9.9+α	厚さ5.7+α			

暗茶灰色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図39-13	瓦	軒平瓦560A	瓦当厚5.3	顎長7.2				
002	図39-9	瓦	軒丸瓦291	中房厚2.0	直径7.0	中房径1.5+α			
003	図39-12	瓦	軒平瓦560A	瓦当厚5.3	顎長5.7				
004	図39-11	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚3.3+α	顎長（5.2）				
005	図39-10	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚2.0+α					
006	図39-8	瓦	軒丸瓦290B	中房厚3.2	直径6.2+α	中房径2.0+α			
007	図39-7	瓦	軒丸瓦(型式不明)		直径2.7+α				
008	図40-15	瓦	平瓦	厚さ2.5	長さ8.6+α	幅9.2+α			
009	図40-14	瓦	平瓦	厚さ2.4	長さ15.4+α	幅7.5+α			
010	図40-16	瓦	平瓦	厚さ1.9	長さ15.3+α	幅9.5+α			
011	図39-6	土師器	小皿a1	（7.7）	1.25+α	（6.1）			○
012	写真223・224	土製品	炉壁	長さ8.0＋α	幅4.9+α	厚さ2.3+α			
013	図39-5	須恵器	壺（肥後）	―	4.15+α	（9.4）			
014	図40-17	石製品	磨製石斧	長さ7.6	幅3.7	厚さ1.7	重量83.89g		
015	写真225・226	その他	銅塊	現存長3.5	幅1.6～3.2	厚さ1.3～2.8	重量66g		
016	写真222	土製品	トリベ	―	3.8+α	―			

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（6）

赤茶色土（249SD020最上層）　　（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図27-9	瓦	軒平瓦560Ｂa’	瓦当厚6.9	顎長5.4				
002	図27-8	瓦	軒平瓦560Ａaカ	瓦当厚3.4+α	顎長6.9				
003	図27-11	瓦	面戸瓦	厚さ1.5					
004	図27-6	瓦	軒丸瓦(型式不明)	中房厚2.6+α	直径3.6+α	中房径2.0+α			
005	図27-7	瓦	軒丸瓦(型式不明)		直径2.5+α				
006	図27-10	瓦	平瓦	厚さ2.0	長さ7.4+α	幅5.3+α			
007	図28-12	瓦	丸瓦	厚さ2.0	長さ32.1+α	幅15.3+α			
008	図27-5	土師器	皿	―	1.95+α	―			
009	図27-4	須恵器	甕×壺	―	2.9+α	―			
010	図27-3	須恵器	蓋3	―	1.4+α	―			
011	写真156･157	土製品	炉壁	長さ8.4+α	幅9.9+α	厚さ4.6+α			
012	写真158	その他	銅塊	長さ6.0	幅10.4	厚さ1.5	重量223g		
013	写真158	その他	銅塊	長さ5.5	幅6.4	厚さ1.4	重量74g		
014	写真158	その他	鉄滓	長さ4.8	幅3.8	厚さ2.8	重量61g		

明黄色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図41-1	瓦	軒丸瓦（新型式）	中房厚2.5	直径13.0+α	中房径6.2			
002	図41-2	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚1.7+α					

暗褐色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図41-5	塼	塼	厚さ5.4+α					
002	図41-4	瓦	軒平瓦(型式不明)	瓦当厚5.1	顎長2.3+α				
003	図41-3	土製品	トリベ	―	2.9+α	―			

茶色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図41-9	瓦	軒丸瓦291カ		直径2.3+α				
002	写真237	瓦	軒丸瓦(型式不明)						
003	図41-10	瓦	丸瓦	厚さ1.9	長さ4.4+α	幅6.4+α			
004	図41-11	瓦	平瓦	厚さ2.7	長さ22.2+α	幅27.8+α			
005	図41-7	須恵器	皿a	（10.0）	2.3	（8.7）	ヘラ	○	○
006	図41-6	須恵器	蓋c3	（14.75）	3.15	天井部径（9.1）	ヘラ		
007	図41-8	須恵器	円面硯×坏c	―	2.0+α	―		○	

暗黄色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図42-3	瓦	軒丸瓦291カ		直径3.2+α				
002	図42-4	瓦	丸瓦	厚さ2.1	長さ7.8+α	幅7.1+α			
003	図42-1	須恵器	坏c	―	3.6+α	―			
004	図42-2	須恵器	坏c	―	3.35+α	―			

茶灰色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図43-7	瓦	軒丸瓦(型式不明)		直径4.5+α				
002	図43-5	瓦	軒丸瓦290カ		直径2.7+α				
003	図43-4	塼	塼	厚さ3.3+α					
004	図43-6	瓦	軒丸瓦290Ｂ	中房厚3.0	直径19.0	中房径7.1			
005	図43-9	瓦	平瓦	厚さ2.8	長さ10.6+α	幅14.4+α			
006	図43-8	瓦	平瓦	厚さ1.7	長さ5.0+α	幅5.3+α			
007	図43-1	須恵器	蓋3	―	1.25+α	―			
008	図43-3	須恵器	鉢a3	（20.3）	4.9+α	―			
009	図43-2	須恵器	甕a	―	10.2+α	―			
010	図43-10	鉄製品	刀子×鎌	現存長4.35	最大身幅2.4	最大厚0.3			
011	図43-11	鉄製品	用途不明鉄製品	現存長8.9	幅1.0～1.35	厚さ0.35～0.4			
012	写真241	その他	鉄滓(椀形鍛冶滓)	径7.8	厚さ2.7	重量119g			
013	写真242	その他	鉄滓	長さ6.6	幅4.7	厚さ2.6	重量5.6g		
014	写真243	土製品	炉壁	長さ10.3＋α	幅11.6+α	厚さ6.0+α			

大宰府条坊跡第249次調査　遺物計測表（7）

（　　）：復元値　A：内底ナデ　B：板状圧痕

茶褐色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図44-1	須恵器	蓋3	―	1.35+α	―			

暗茶褐色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図44-3	土師器	坏c	―	1.65+α	―			
002	図44-2	須恵器	皿a	(9.4)	1.75	(7.9)	ヘラ	○	
003	図44-4	土師器	皿b	14.7	3.6	13.35			
004	写真250・251	土製品	トリベ	―	3.9+α	―			

黒灰色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図44-5	須恵器	蓋3	―	1.25+α	―			
002	図44-6	石製品	紡錘車	径3.8～4.3	孔径0.6～0.65	厚さ1.9	重量37.5g		
003	写真253	土製品	トリベ	―	2.55+α	―			
004	写真253	土製品	トリベ	―	2.9+α	―			

淡黒色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図44-7	須恵器	坏c	(11.5)	4.55	(7.5)		○	

灰黒色土

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図44-8	須恵器	坏	―	3.05+α	―			
002	図44-9	須恵器	鉢	―	3.9+α	―			

黒色土　南区

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図45-12	土師器	椀	―	3.85+α	―			
002	図45-14	土師器	椀	―	4.8+α	―			
003	図45-13	土師器	椀	(13.0)	6.0	―			
004	図45-2	須恵器	坏蓋	―	3.8+α	―			
005	図45-3	須恵器	蓋1	―	2.1+α	―			
006	図45-15	土師器	椀	―	3.8+α	―			
007	図45-10	土師器	椀	―	3.45+α	―			
008	図45-9	須恵器	甕	―	5.3+α	―			
009	図45-8	須恵器	甕	―	4.6+α	―			
010	図45-5	須恵器	坏身	(10.4)	4.1+α	―			
011	図45-4	須恵器	坏身	(10.6)	4.3+α	―			
012	図45-6	須恵器	坏身	―	3.8+α	―			
013	図45-7	須恵器	甕	―	4.8+α	―			
014	図45-1	須恵器	坏蓋	(12.9)	4.15	天井部径（7.4）			
015	図45-11	土師器	椀	―	2.25+α	―			
016	図45-17	土師器	甕	―	3.8+α	―			
017	図45-16	土師器	椀	(12.1)	6.0	―			

黒色土　北区

R-番号	図番号	種別	器種	口径	器高	底径	底部切離し	A	B
001	図45-22	土師器	椀	(13.1)	4.3+α	―			
002	図45-19	須恵器	坏身	―	2.8+α	―			
003	図45-18	須恵器	坏蓋	―	3.0+α	―			
004	図45-23	土師器	甕	―	5.3+α	―			
005	図45-20	須恵器	甕	―	4.65+α	―			
006	図45-21	須恵器	小形甕	―	3.2+α	(2.8)			
007	写真258・259	その他	鉄滓(椀形鍛冶滓)	長さ7.5+α	厚さ2.9	重量139g			
008	写真258・259	その他	鉄滓	長さ6.1	幅4.8	厚さ4.6	重量149g		
009	写真258・259	その他	鉄滓	長さ4.2	幅3.5	厚さ2.5	重量49g		

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（1）

S-1　赤褐色土

土　師　器	坏×皿
瓦　　類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
土　製　品	羽口、窯壁

S-1　炭層

土　師　器	皿a、皿×坏、煮炊具、破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
金 属 製 品	鉄釘
土　製　品	窯壁

S-1　赤色土(酸化層)

土　師　器	供膳具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、丸瓦（すり消し）
土　製　品	窯壁

S-1　掘形

須　恵　器	鉢a3
土　師　器	坏a（ヘラ切、VIB期）、鉢（精製土器）、供膳具、煮炊具、破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
土　製　品	用途不明土製品（鋳型？）、窯壁

S-1　東西トレンチ茶色土

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）

S-1　東西トレンチ

須　恵　器	破片
土　師　器	煮炊具（角閃石と在地）
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、丸瓦（すり消し）
土　製　品	窯壁

S-1　据え付け石

石　製　品	花崗岩（被熱痕有）

S-3

土　師　器	坏c、煮炊具
瓦　　類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ）
土　製　品	窯壁

S-4

須　恵　器	坏×皿
瓦　　類	平瓦（不明）

S-5a(249SB010抜取穴)

須　恵　器	蓋c3、蓋1
土　師　器	破片
土　製　品	炉壁

S-5a 抜取(249SB010抜取穴)

瓦　　類	平瓦（格子タタキ）

S-5b(249SB010抜取穴)

そ　の　他	鉱滓

S-5b 抜取(249SB010抜取穴)

須　恵　器	鉢a3

S-5c

土　師　器	供膳具
瓦　　類	平瓦（不明）

S-5d(249SB010抜取穴)

土　師　器	供膳具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
石　製　品	剥片（黒曜石）

S-5d 抜取(249SB010抜取穴)

金 属 製 品	鉄片

S-5e(249SB010抜取穴)

瓦　　類	平瓦（不明）

S-5f(249SB010抜取穴)

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ）

S-5h(249SB010抜取穴)

土　師　器	煮炊具
瓦　　類	平瓦（不明）

S-6

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）、不明瓦

S-7

土　師　器	坏
瓦　　類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
土　製　品	鋳型片

S-8

須　恵　器	大甕
土　師　器	皿a、供膳具、煮炊具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
そ　の　他	鉄滓

S-9

須　恵　器	蓋3、坏c、坏×皿、甕、供膳具
土　師　器	小皿a1（糸切）、供膳具、煮炊具
瓦　　器	供膳具
龍泉窯系青磁	椀：Ⅱb(1)、Ⅰ(1)
	他器種：破片(2)
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦
石　製　品	剥片（黒曜石）
肥前系陶磁器	染付破片
国 産 陶 器	椀、香炉
白　　磁	壺他：破片（広東系）(2)、壺(1)
金 属 製 品	鉄釘
そ　の　他	骨、鉱滓

S-10a　掘形

土　師　器	煮炊具

S-10c　掘形

土　師　器	供膳具、煮炊具

S-10d　掘形

土　師　器	煮炊具

S-10e

須　恵　器	坏×皿
土　師　器	煮炊具

S-10g　掘形

そ　の　他	鉱滓

S-10h　掘形

土　師　器	破片

S-10i

土　師　器	供膳具
瓦　　類	不明瓦

S-10i　掘形

土　師　器	供膳具、煮炊具
瓦　　類	丸瓦（すり消し）

S-10j　掘形

須　恵　器	坏（古墳）
土　師　器	椀（古墳）、煮炊具（古墳）

S-10k

須　恵　器	破片
土　師　器	供膳具

S-10k　抜取穴

土　師　器	破片
そ　の　他	鉱滓

S-10ℓ

土　師　器	破片

S-10ℓ　掘形

土　師　器	煮炊具、破片

S-10m　掘形

土　師　器	甕（古墳）

S-10o　抜取

土　師　器	供膳具、煮炊具、破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ）
そ　の　他	鉱滓

S-10

土　師　器	破片

S-11

瓦　　類	平瓦（縄タタキ）

S-12

土　師　器	甕a、供膳具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）

S-13

須　恵　器	坏×皿
土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（不明）
土　製　品	炉材
そ　の　他	鉱滓、炭化物

S-14

須　恵　器	供膳具
土　師　器	供膳具
瓦　　類	平瓦（不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
金 属 製 品	鉄塊

S-17

須　恵　器	破片
土　師　器	坏a×皿a、壺、煮炊具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
国 産 陶 器	天目椀（瀬戸）
金 属 製 品	鉄塊
土　製　品	破片

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（2）

S-18　E6

須恵器	壺、甕、高台
土師器	坏c、皿、甕a、鉢、高台、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（不明）、不明瓦
金属製品	鉄鏃
土製品	鋳型、羽口、炉壁
その他	炭化物、銅滓、鉱滓

S-18　E7

須恵器	供膳具
土師器	坏a、坏c、甕、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し、不明）、不明瓦
金属製品	鉄釘、鉄塊
土製品	用途不明品（銅付着）、鋳型、炉材、窯壁
その他	鉱滓

S-18　F6

須恵器	壺
土師器	坏a、坏c、甕a（角閃石と在地）、煮炊具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦
金属製品	鉄釘、鉄釘×鉄鏃
土製品	窯壁

S-18　F7

須恵器	坏c、甕
土師器	坏c、甕a、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦
土製品	鋳型
その他	鉱滓

S-20　I2

須恵器	蓋1、蓋3、坏×皿、皿a、壺、甕、鼎（古墳）
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
その他	鉱滓

S-20　I3

須恵器	坏蓋（古墳）、坏×皿、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉱滓

S-20　I4

須恵器	蓋3、甕
土師器	把手、破片
瓦類	平瓦（すり消し、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（不明）
金属製品	鉄釘×鋲
その他	鉱滓

S-20　I5

須恵器	蓋3
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）
金属製品	鉄片（木質付着）
土製品	炉壁
その他	黒鉛化木炭

S-20　暗灰色土　I3

土製品	炉壁

S-20　暗褐色土　I4

須恵器	高坏（古墳）
土師器	供膳具（古墳）、煮炊具（古墳）
瓦類	丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁（銅滓付着）

S-21

須恵器	蓋c、坏c、供膳具
土師器	坏a、坏、甕a
黒色土器A	坏
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
石製品	剥片（黒曜石）
金属製品	鉄釘、鉄塊
土製品	炉壁

S-22　D6

須恵器	坏c、坏
土師器	蓋、坏a、壺、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）
その他	焼土塊

S-22　E6

須恵器	蓋3、坏c、坏、甕、大甕
土師器	坏a、大椀、甕a
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
石製品	花崗岩（被熱痕有）
金属製品	鉄釘
土製品	鋳型、炉壁
その他	炭化物、鉱滓

S-22　E7

須恵器	蓋c3、壺、鉢
土師器	坏a、坏c、皿、甕a、ツマミ
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）、不明瓦
石製品	花崗岩
金属製品	鉄釘
土製品	鋳型、炉壁
その他	炭化物

S-22　F6

須恵器	坏c、壺（搬入）、甕
土師器	坏a、坏、皿a、甕a、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）
土製品	炉壁

S-22　F7

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ切）、甕、鉢（精製）
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
その他	鉱滓

S-23

土師器	供膳具

S-24

瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ）
土製品	炉壁
その他	鉱滓

S-25　茶色砂土　I3

須恵器	甕、甑（古墳）
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁

S-25　黒茶色土　I3

須恵器	坏身（古墳）、甕
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓

S-25　暗灰色土　I3

須恵器	蓋3
土師器	甕、高坏
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
金属製品	鑿

S-25　暗灰色土　I4

須恵器	壺
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁（銅付着）

S-25　暗褐色土　I4

須恵器	坏蓋（古墳）、甕
土師器	供膳具
瓦類	玉縁丸瓦（すり消し）
土製品	鋳型、炉壁
その他	鉱滓
古式土師器	甕

S-25　淡黄色土　I3

須恵器	坏a（古墳）、坏c、坏身（古墳）、甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉱滓

S-25　淡黄色土　I4

須恵器	蓋、壺、甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）
石製品	敲石（凝灰岩）
土製品	羽口、炉壁
その他	鉱滓（黒鉛化木炭）

S-27

土師器	供膳具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	焼土塊

S-28

土師器	甕
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-29

須恵器	蓋4、坏c、壺、甕a
土師器	坏×皿、坏a、坏a（ヘラ切）、坏c、椀c1、皿a、壺、甕、甕a（角閃石と在地）、甕a（雲母）、甕（把手付、精製）、鉢（精製）、鉢、坏d、高坏、甑
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（3）

S-29

石　製　品	砥石
土　製　品	炉材、炉壁
そ　の　他	鉱滓、粘土塊

S-31

そ　の　他	鉱滓

S-32

土　製　品	炉壁

S-33

土　師　器	破片
土　製　品	炉壁
そ　の　他	銅滓、鉱滓

S-34

そ　の　他	銅滓

S-37

土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（不明）

S-38

土　師　器	甕、供膳具
瓦　　類	平瓦（不明）
石　製　品	砥石
土　製　品	炉壁

S-39

土　師　器	破片

S-41

須　恵　器	壺、破片
土　師　器	甕a、甕、供膳具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-42

須　恵　器	坏、甕
土　師　器	供膳具
瓦　　類	平瓦（不明）

S-44(249SB010抜取穴)

須　恵　器	蓋3
土　師　器	供膳具、煮炊具
土　製　品	トリベ

S-46

須　恵　器	供膳具
土　師　器	供膳具

S-47

須　恵　器	坏、甕
土　師　器	煮炊具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
金属製品	鉄片（木質付着）
土　製　品	炉材、炉壁

S-48

須　恵　器	破片
土　師　器	供膳具、煮炊具
瓦　　類	玉縁丸瓦（すり消し）

S-49

須　恵　器	蓋3、甕b
土　師　器	蓋3、坏c、皿、甕a
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、格子タタキ、斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦

S-49

土　製　品	炉壁
そ　の　他	鉱滓

S-51

須　恵　器	坏×皿
土　師　器	蓋4、坏×皿
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）、不明瓦
土　製　品	鋳型

S-52(249SB010抜取穴)

須　恵　器	坏c、甕
土　師　器	供膳具、煮炊具
瓦　　類	平瓦（不明）
土　製　品	炉壁
そ　の　他	鉱滓

S-53

土　師　器	甕×壺（古墳）
そ　の　他	鉱滓

S-54

土　師　器	破片
そ　の　他	鉱滓

S-56

土　師　器	煮炊具

S-57(249SB010抜取穴)

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）

S-58

須　恵　器	破片
土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
土　製　品	炉壁
そ　の　他	鉱滓

S-59

須　恵　器	蓋3、皿
土　師　器	把手付甕
瓦　　類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ）
土　製　品	羽口、炉壁
そ　の　他	鉱滓、銅滓

S-63

須　恵　器	壺、甕
土　師　器	破片
瓦　　類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）

S-64

土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し）
土　製　品	炉材

S-66

瓦　　類	平瓦（不明）
土　製　品	炉材、炉壁
そ　の　他	鉱滓

S-72

土　師　器	破片
瓦　　類	不明瓦
そ　の　他	鉱滓

S-76

土　師　器	坏×皿、煮炊具
瓦　　類	平瓦（不明）、不明瓦
土　製　品	炉壁

S-77

土　師　器	坏a、坏×皿
瓦　　類	平瓦（縄タタキ）、玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し、不明）

S-78

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-79

そ　の　他	鉱滓

S-81

土　師　器	破片
そ　の　他	鉱滓

S-83

そ　の　他	鉱滓

S-86

須　恵　器	破片
土　師　器	破片
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-87

瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-92

須　恵　器	破片
土　師　器	煮炊具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ）、玉縁丸瓦（すり消し）、塼
土　製　品	炉材

S-93

土　師　器	坏×皿、鉢、供膳具
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）

S-94

土　師　器	蓋c、坏×皿
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、不明）
そ　の　他	鉱滓

S-96

瓦　　類	平瓦（すり消し）
そ　の　他	鉱滓

S-97

須　恵　器	壺
土　師　器	坏a（ヘラ切）、甕a
瓦　　類	不明瓦
土　製　品	羽口、炉材
そ　の　他	焼土塊、鉱滓

S-98

土　師　器	椀c1、甕
瓦　　類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）
石　製　品	花崗岩
土　製　品	羽口
そ　の　他	鉱滓

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（4）

S-99

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	軒平瓦
その他	鉱滓

S-101

瓦類	不明瓦

S-102

その他	鉱滓

S-103

土製品	炉壁

S-104(249SB010抜取穴)

土師器	供膳具
瓦類	平瓦（不明）

S-106　G5

須恵器	蓋c、蓋3、坏、壺×鉢b、甕、高台
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）、 不明瓦
弥生土器	甕
土製品	鋳型
その他	鉱滓

S-106　G6

須恵器	蓋c3、蓋1、蓋3、坏c、皿、皿×坏、甕a、甕
土師器	坏（9C前半で混入）、椀（古墳）、煮炊具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し、不明）
土製品	炉壁
その他	鉱滓、銅滓、鉄滓
古式土師器	壺

S-106　暗茶褐色土　G6

須恵器	蓋c、蓋3、甕
土師器	煮炊具
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ）
その他	鉱滓
古式土師器	直口壺

S-107

須恵器	坏×皿、坏身（古墳）、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（不明）
土製品	炉壁
その他	粘土塊

S-108

土師器	供膳具、煮炊具、把手

S-109

須恵器	坏×皿、甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ）
金属製品	鉄釘×鉄鏃
土製品	炉材、炉壁
その他	鉱滓、黒鉛化木炭、鉄滓

S-109　断ち割り

土師器	供膳具、煮炊具

S-112

土師器	煮炊具、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、格子タタキ、斜格子タタキ、 不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）
金属製品	鉄鏃
土製品	炉壁

S-112　暗茶褐色土

須恵器	甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）、玉縁丸瓦（すり消し）

S-113

須恵器	蓋c3、蓋3×高坏、坏×皿
土師器	椀（古墳）、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）
石製品	剥片（黒曜石）
その他	銅滓

S-114(249SB010抜取穴)

須恵器	蓋c3、坏×皿
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	湯玉、銅滓、鉱滓

S-118

土師器	煮炊具

S-119

土師器	煮炊具、破片
土製品	炉壁

S-121

土師器	煮炊具

S-124

土師器	煮炊具

S-127

土師器	供膳具
瓦類	平瓦（不明）

S-129

瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ）

S-131

須恵器	甕
土師器	椀（古墳）、壺（古墳）、供膳具、煮炊具
その他	鉱滓

S-132

土師器	供膳具、煮炊具

S-133

土師器	煮炊具

S-137

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓、鉄滓

S-138

須恵器	蓋
土師器	坏a×皿a、煮炊具
瓦類	平瓦（不明）

S-139

須恵器	甕、破片
土師器	坏a×皿a、高坏（古墳）、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し、不明）
その他	銅滓

S-141

土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（不明）、丸瓦（縄タタキ）
土製品	鋳型

S-142

土師器	坏a
土製品	鋳型、炉材

S-143

須恵器	蓋3
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁

S-144

須恵器	坏
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ）
土製品	鋳型、炉材

S-146

瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）

S-147

須恵器	甕
土師器	甕
瓦類	平瓦（不明）

S-148

須恵器	蓋3、供膳具
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
金属製品	鉄釘

S-149

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	鉱滓

S-151

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	鉱滓

S-152

瓦類	平瓦（不明）

S-153

須恵器	甕
土師器	煮炊具
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）

S-154

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）
土製品	炉壁

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（5）

S-157

須恵器	高台
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	銅滓、鉄滓

S-158(249SB010抜取穴)

須恵器	供膳具、破片
その他	鉱滓

S-159

瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	羽口

S-161

須恵器	供膳具
土師器	甕（古墳）、供膳具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）
その他	鉄滓

S-162

土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（不明）
金属製品	鉄鎌？
土製品	炉壁
その他	鉄滓

S-164

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（不明）
その他	鉱滓

S-166

須恵器	坏×皿、甕
土師器	供膳具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、不明）
弥生土器	甕
その他	鉱滓

S-167

須恵器	甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	鉱滓

S-174

須恵器	甕
土師器	高台、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し、不明）

S-176

瓦類	平瓦（縄タタキ）
土製品	鋳型、炉壁

S-177

須恵器	破片
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）

S-178

土師器	煮炊具
瓦類	不明瓦
土製品	炉壁

S-179

須恵器	高台
土師器	煮炊具
土製品	炉材
その他	湯玉、鉄滓、銅滓

S-183

土師器	供膳具、煮炊具

S-186

須恵器	高台
土師器	煮炊具
その他	鉱滓

S-188

土師器	煮炊具

S-189

土師器	煮炊具

S-191

土師器	供膳具、煮炊具

S-193

土師器	椀（古墳）、煮炊具

表土

須恵器	蓋3、坏c、坏、壺、甕、供膳具、高台
土師器	坏、坏×皿、供膳具、煮炊具、高台
黒色土器A	椀c
龍泉窯系青磁	椀：Ⅱb(3)
	皿：Ⅰ(1)
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦（すり消し、不明）
石製品	破片（滑石）
緑釉陶器	椀（近江）
肥前系陶磁器	広東椀
国産陶器	破片（緑釉）
国産磁器	破片（染付）
白磁	椀：破片（華南）(1)
土製品	用途不用品（おはじき形）、炉壁
その他	鉱滓、鉄滓、獣骨（歯）

カクラン

須恵器	蓋1、蓋3、壺、甕、供膳具、高台
土師器	坏a（糸切）、小皿a1、甕、供膳具、煮炊具
越州窯系青磁	椀：I2ウ(1)
龍泉窯系青磁	他器種：破片(1)
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）、玉縁丸瓦（縄タタキ、すり消し）、 丸瓦（すり消し）
石製品	剥片（黒曜石）
瓦質土器	火鉢
肥前系陶磁器	破片（染付）
国産陶器	蓋、椀、甕、鉢、破片
国産磁器	破片（染付）
白磁	椀　：破片（華南）(1)
	壺他：破片（華南）(4)
土製品	炉壁

排土

須恵器	坏、坏身（古墳）、甕
土師器	坏×皿、煮炊具
瓦類	平瓦（斜格子タタキ、不明）
石製品	剥片（黒曜石）

暗茶色土　D5

須恵器	供膳具
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（斜格子タタキ）、丸瓦（すり消し）
肥前系陶磁器	破片（染付）

暗茶色土　D6

須恵器	坏c、坏×皿
土師器	坏a（糸切）、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）
緑釉陶器	破片
土製品	羽口

暗茶色土　D7

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ切、糸切）、坏c、坏、高坏、 供膳具（ヘラ記号「×」）、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）

暗茶色土　E5

須恵器	破片
土師器	供膳具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し、不明）、不明瓦
金属製品	用途不明鉄製品
土製品	炉材
その他	鉱滓

暗茶色土　E6

須恵器	破片、甕、坏×皿
土師器	坏a、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	鋳型
その他	鉱滓

暗茶色土　E7

須恵器	坏×皿、壺（搬入）、甕
土師器	坏a、坏c、小皿1、鉢（精製）
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（縄タタキ）
土製品	炉材、炉壁、窯壁
その他	銅滓

暗茶色土　E8

土師器	坏×皿、煮炊具、高台
瓦類	平瓦（不明）
金属製品	鉄釘

暗茶色土　F6

須恵器	坏、壺（搬入）
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）
土製品	鋳型

暗茶色土　F7

須恵器	破片
土師器	坏d、甕
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉材

暗茶色土　G4

須恵器	蓋3
土師器	供膳具（糸切）
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、不明瓦
その他	鉱滓

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（6）

暗茶色土　G6

須恵器	甕
土師器	供膳具、煮炊具（角閃石と在地）
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	羽口

暗茶色土　H3

須恵器	蓋3、壺（古墳）、甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）、不明瓦
土製品	炉壁
その他	鉱滓、銅滓

暗茶色土　H6

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）

暗茶色土　I3

須恵器	甕、破片
土師器	甕、供膳具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
弥生土器	甕
土製品	炉壁

暗茶色土　I5

須恵器	蓋3
土師器	供膳具（ヘラ）、煮炊具（角閃石と在地）、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）

暗茶色土　調査区中央

土師器	供膳具
瓦類	丸瓦（縄タタキ）
土製品	鋳型

暗茶灰色土　G3

須恵器	蓋1、蓋3、坏c、坏身（古墳）、皿a、 壺、甕、高台
土師器	坏a、坏c、甕a、甕（精製）、甕、 鉢（精製）、鉢、高台
黒色土器A	椀c
瓦類	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦
土製品	羽口、炉壁
その他	鉱滓、植木鉢（混入）、銅滓

暗茶灰色土　G4

須恵器	蓋3、坏蓋（古墳）、坏c、甕b、甕、供膳具
土師器	甕、供膳具、煮炊具、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）、 不明瓦
弥生土器	甕（須玖式）、甕、大甕（金海式）
金属製品	鉄釘
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓、銅塊

暗茶灰色土　H2

須恵器	蓋3、坏蓋（古墳）、坏c、坏×皿、 坏身（古墳）、壺、甕
土師器	坏a、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、不明瓦
土製品	羽口、鋳型
その他	鉄滓

暗茶灰色土　H3

須恵器	蓋c、蓋3、坏蓋（古墳）、坏c×皿c、 坏×皿、皿a、甕、高台
土師器	坏c×皿c、皿a、皿、供膳具、煮炊具、甕
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）、丸瓦（縄タタキ、すり消し）、不明瓦
石製品	磨製石斧
土製品	トリベ、炉壁
その他	鉱滓、銅滓、鉄滓

暗茶灰色土　H4

須恵器	蓋3、坏a×皿a、坏c、坏×皿、甕
土師器	小皿a1、供膳具、煮炊具、高台、把手
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 格子タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（縄タタキ、 すり消し）、不明瓦
土製品	炉壁
その他	鉱滓、鉄滓

暗茶灰色土　H5

須恵器	坏c、甕
土師器	甕、供膳具、煮炊具（角閃石・在地）
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）、 不明瓦
土製品	鋳型、炉壁

暗茶灰色土　I2

須恵器	壺、甕、高台
土師器	甕
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）

暗茶灰色土　I3

須恵器	蓋3、坏c、坏身（古墳）、坏蓋（古墳）、 皿、甕、高坏、鉢a
土師器	坏a、坏c、坏、椀c、甕a、甕、煮炊具、把手
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、 すり消し、不明）、 玉縁丸瓦（縄タタキ、すり消し）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し、不明）、不明瓦
白磁	壺他：把手(1)
土製品	炉壁
その他	鉄滓、鉱滓

暗茶灰色土　I4

須恵器	蓋3、坏c、坏、壺、壺（肥後）、甕、高台
土師器	坏a、甕、供膳具、煮炊具、高台
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 斜格子タタキ、不明）、丸瓦（縄タタキ、 すり消し）、不明瓦
石製品	砥石（砂岩）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉄滓、鉱滓

暗茶灰色土　I5

須恵器	坏c
土師器	坏a、甕
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）

暗褐色土　I4

瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）

赤茶色土(SD020最上層)　H2

土師器	皿、坏×皿、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）

赤茶色土(SD020最上層)　I2

須恵器	蓋3、坏c、坏身（古墳）、皿a、甕、 高坏（古墳）
土師器	煮炊具、把手
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、不明、 斜格子タタキ）、玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦（すり消し、不明）、不明瓦
石製品	紡錘車（滑石）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓、銅塊
古式土師器	甕

赤茶色土(SD020最上層)　I3

須恵器	蓋c、蓋3、坏蓋（古墳）、坏c、坏身（古墳）、 皿a、甕b、甕、甕×壺、破片
土師器	皿、甕、供膳具、煮炊具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ、 不明）、玉縁丸瓦（縄タタキ、すり消し）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し、格子タタキ、 不明）、面戸瓦、不明瓦
土製品	鋳型、羽口、炉壁
その他	鉱滓、鉄滓、銅滓、焼土塊

赤茶色土(SD020最上層)　I4

須恵器	蓋3、坏a×皿a、坏c、坏、甕b、甕、 高坏（古墳）
土師器	甕、供膳具、煮炊具、高台
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 格子タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（縄タタキ、すり消し）、丸瓦 （縄タタキ、すり消し、斜格子タタキ）、不明瓦
弥生土器	高坏（須玖式）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓、湯玉、鉄滓、銅塊
古式土師器	甕

明黄色土　F4

瓦類	丸瓦（すり消し）

明黄色土　I3

須恵器	蓋3、坏c、坏、坏身（古墳）
土師器	煮炊具
瓦類	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 斜格子タタキ、不明）、玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦(すり消し)
土製品	炉壁
その他	鉄滓

明黄色土　I4

須恵器	甕
土師器	甕、煮炊具、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）

暗褐色土　E8

土師器	坏a×皿a、皿a、煮炊具
瓦類	軒平瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）、塼
土製品	鋳型、羽口、トリベ、炉壁

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（7）

茶色土　D6

須恵器	坏a×皿a、坏、皿a
土師器	坏、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）
その他	湯玉

茶色土　D7

須恵器	蓋c3、蓋1、蓋3、坏c、円面硯×坏c、壺、甕
土師器	坏d、坏、甕、煮炊具、把手
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、すり消し、 格子タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し）
土製品	トリベ、炉壁
その他	鉱滓

茶色土　E5

須恵器	坏蓋（古墳）、高台
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁
その他	鉱滓

茶色土　E6

土師器	坏a、供膳具

茶色土　E7

須恵器	坏×皿、甕、鉢
土師器	鉢（精製）、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（縄タタキ、すり消し）
土製品	炉材、炉壁
その他	鉄滓、鉱滓

茶色土　E8

金属製品	鉄鏃

茶色土　F6

須恵器	蓋b、蓋3、甕、鉢
土師器	甕、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（縄タタキ）
土製品	用途不明品、炉壁
その他	鉄滓、鉱滓、黒鉛化木炭

茶色土　F7

須恵器	坏c×皿c、坏×皿、甕、鉢a、供膳具、高台、 破片
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉄滓、鉱滓

茶色土　G6

須恵器	高坏b
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁
その他	鉄滓

暗黄色土　F4

須恵器	蓋、坏蓋（古墳）、坏c×皿c、坏×皿、壺、甕
土師器	椀、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）
その他	鉱滓

暗黄色土　G3

須恵器	坏c、坏、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁
その他	鉱滓

暗黄色土　G4

須恵器	蓋3
土師器	煮炊具、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）、不明瓦
土製品	羽口、炉壁
その他	銅滓

暗黄色土　G5

須恵器	蓋3、皿a、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）
その他	鉱滓、鉄滓

暗黄色土　H5

須恵器	蓋、坏c、壺（古墳）、甕
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、不明瓦
土製品	羽口、鋳型
その他	鉄滓、鉱滓

茶灰色土　D6

須恵器	蓋3、坏a、坏c、坏×皿
土師器	坏×皿、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ）、 丸瓦（すり消し）
金属製品	用途不明鉄製品
土製品	羽口、炉壁
その他	湯玉、鉱滓

茶灰色土　E6

須恵器	蓋3
土師器	供膳具
瓦類	平瓦（縄タタキ）、丸瓦（すり消し）

茶灰色土　E7

須恵器	蓋3、蓋、坏c、皿a、皿、甕a、鉢a3
土師器	蓋c、甕、鉢、供膳具、煮炊具、高台
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（縄タタキ、 すり消し）、塼、不明瓦
石製品	砥石（砂岩）
土製品	鋳型
その他	焼土塊、鉄滓、鉱滓

茶灰色土　E8

須恵器	蓋3、甕
土師器	供膳具、煮炊具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（縄タタキ、 すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉄滓

茶灰色土　F6

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）

茶灰色土　F7

須恵器	皿、鉢a3
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
その他	銅滓、鉱滓

茶灰色土　G3

須恵器	蓋3、坏c、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉄滓

茶灰色土　H2

須恵器	甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（すり消し、縄タタキ、斜格子タタキ、 不明）
土製品	炉壁
その他	銅滓、鉱滓

茶灰色土　H3

須恵器	蓋3、皿、壺（古墳）、甕
土師器	蓋c、甕、供膳具、煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し、不明）
金属製品	刀子×鎌、鉄滓
土製品	羽口、炉壁
その他	銅滓、鉱滓、焼土魂、鉄滓

茶灰色土　H4

須恵器	坏、甕
土師器	煮炊具
瓦類	軒丸瓦、平瓦（縄タタキ、不明）、 玉縁丸瓦（すり消し）、丸瓦（すり消し）
金属製品	羽口
土製品	鋳型、炉壁
その他	鉄滓、銅滓、鉱滓

茶灰色土　I2

土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、 丸瓦（すり消し）
弥生土器	甕
土製品	炉壁
その他	椀形鍛冶滓

茶灰色土　I3

須恵器	破片
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁
その他	鉄滓、粘土塊

茶灰色土　I4

須恵器	坏c
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	鋳型、炉壁
その他	銅滓、鉄滓

炭混茶灰色土　E8

須恵器	蓋c、坏×皿、鉢
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
その他	鉄滓、鉱滓

大宰府条坊跡第249次調査　出土遺物一覧表（8）

暗茶灰色土（張出区）H6

須恵器	蓋3、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
弥生土器	甕（中期）

暗茶灰色土（張出区）H7

須恵器	甕
土師器	器台、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	鉄滓

茶黄色土　H3

須恵器	蓋3、壺
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（不明）
土製品	炉壁

茶黄色土　H4

須恵器	蓋c、坏蓋（古墳）、甕
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
土製品	炉壁

茶黄色土　H5

瓦類	平瓦（不明）、丸瓦（すり消し）

茶黄色土　H6

須恵器	蓋1、蓋3、坏身（古墳）、甕、供膳具
土師器	蓋c、高坏（古墳）、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、斜格子タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
石製品	砥石
土製品	羽口、鋳型、炉壁
その他	鉄滓、鉱滓
古式土師器	高坏

茶褐色土　G4

須恵器	蓋3
土師器	椀（古墳）、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）、丸瓦（すり消し）
石製品	剥片（黒曜石）
その他	鉄滓、鉱滓

茶褐色土　G7

須恵器	壺、供膳具
土師器	供膳具、煮炊具
その他	鉱滓

暗茶褐色土　E4

須恵器	甕
土師器	高坏（古墳）、供膳具、煮炊具
土製品	トリベ、炉壁

暗茶褐色土　E5

土師器	煮炊具、甕

暗茶褐色土　F5

須恵器	甕
土師器	椀（古墳）、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（不明）、丸瓦（すり消し）
その他	焼土塊

暗茶褐色土　F6

須恵器	皿a、甕、高坏
土師器	皿b、煮炊具
瓦類	丸瓦（すり消し）

暗茶褐色土　F7

須恵器	甕
土師器	坏c、椀（古墳）、把手付甕、高台
瓦類	平瓦（縄タタキ）

暗茶褐色土　G7

瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）

赤黄色土　E7

土師器	破片
その他	鉱滓

黒灰色土　F4

須恵器	甕
土師器	椀（古墳）、煮炊具
土製品	炉壁
その他	鉱滓

黒灰色土　G4

須恵器	蓋1、蓋3、坏身（古墳）、甕
土師器	高坏（古墳）、供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
石製品	紡錘車（滑石）
土製品	トリベ

黒灰色土　H4

須恵器	坏×皿、高台
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）

淡黒色土　F4

須恵器	坏身（古墳）
土師器	煮炊具、把手
瓦類	平瓦（縄タタキ）
その他	鉄滓

淡黒色土　G4

須恵器	坏×皿、甕
土師器	椀（古墳）
その他	鉱滓

淡黒色土　G5

須恵器	坏c、壺
土師器	煮炊具

淡黒色土　H5

土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）

淡黄色粘質土　H3

須恵器	坏蓋（古墳）
土師器	供膳具、煮炊具

灰黒色土　G3

須恵器	壺（古墳）、高坏
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（不明）
その他	鉱滓

灰黒色土　G4

須恵器	坏、甕、供膳具、破片
土師器	椀（古墳）、甕、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ）

灰黒色土　H4

須恵器	坏、壺、鉢
土師器	甕、煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
その他	鉱滓

灰黒色土　H5

須恵器	甕、供膳具
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄タタキ、不明）
土製品	炉壁

黒褐色土　F4

須恵器	甕
土師器	甑、把手
石製品	磨製石器
その他	鉄滓

黒褐色土　G4

須恵器	壺、甕
土師器	煮炊具

黒褐色土　H4

須恵器	坏
土師器	椀（古墳）、甕

黒色土　南区

須恵器	蓋1、坏蓋（古墳）、坏身（古墳）、壺、甕、遐（古墳）
土師器	椀（古墳）、甕、高坏、煮炊具、把手
黒色土器A	破片（混入）
瓦類	破片（混入）
石製品	砥石
弥生土器	甕（中期）
土製品	羽口、炉壁
その他	鉱滓、鉄滓
古式土師器	大甕

黒色土　北区

須恵器	坏蓋、坏身、壺、甕、小型遐、供膳具
土師器	椀、壺、甕、支脚、供膳具、煮炊具、高坏、把手
石製品	剥片(黒曜石)
弥生土器	壺×甕、甕（中期）
土製品	炉壁
その他	鉱滓、椀形鍛冶滓、鉄滓

写　真　図　版

249 次調査遠景（正面の山は大野城跡・南から）

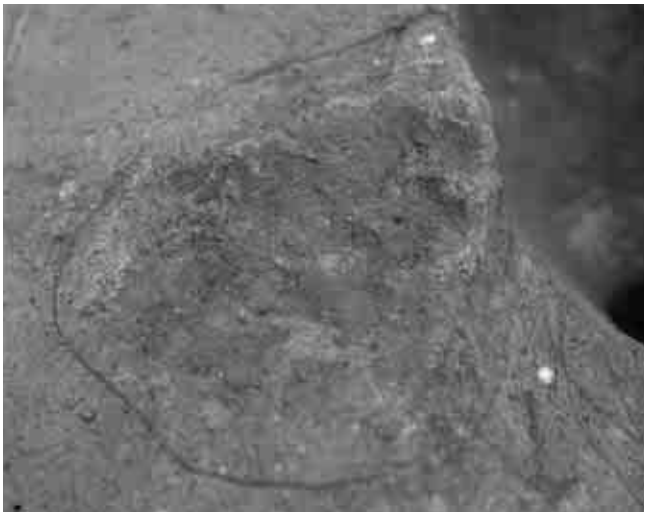
図版１

１．249SX001 完掘（東から）

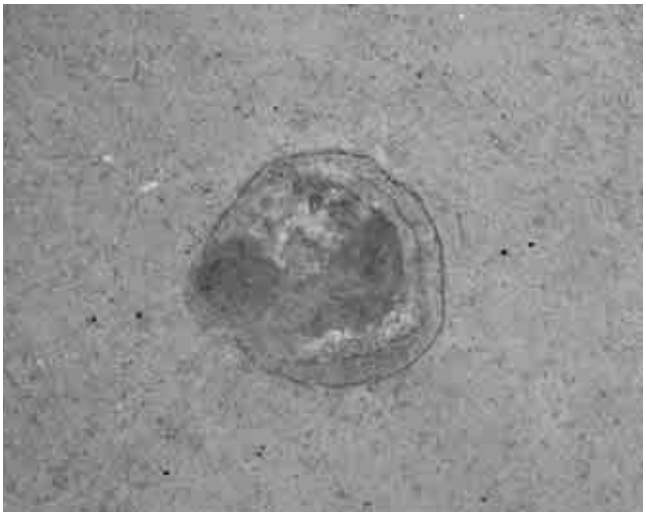
２．249SB010 全景（東から）

１．249SX001・SK022 完掘（東から）

２．249SF015（作業風景）（西から）



３．249SX031 完掘（北から）



４．249SX032 完掘（東から）

５．249SB010e 土層観察（北から）

６．249SB010g 土層観察（西から）

１．249SX001 掘形（R-001）
用途不明土製品　外面／図 21-10

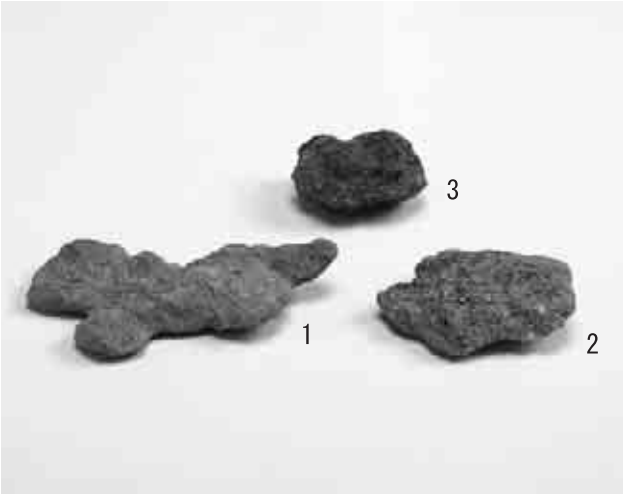
２．249SK018（R-003）
土製品　鋳型／図 22-3

３．249SK022（R-015）
土製品　鋳型　外面／図 23-22

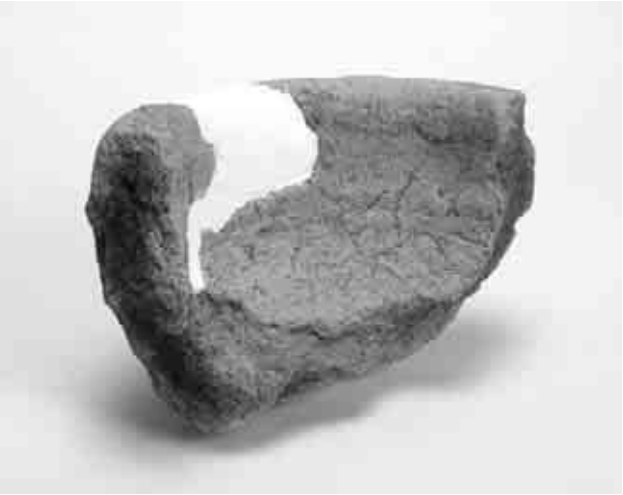
４．249SK022（R-015）
土製品　鋳型　内面／図 23-22

５．249SK022（R-014）
土製品　鋳型　外面／図 23-23

６．249SK022（R-014）
土製品　鋳型　内面／図 23-23



1．249SD020 赤茶色土　1・2.（R-012・013）
銅塊　3.（R-014）鉄滓



2．249SK064（R-001）
土製品　炉材　内面／図 31-5

3．249SX159（R-002）
土製品　羽口／図 36-7

4．黒灰色土（R-003・004）
土製品　トリベ　内面

5．明黄色土（R-001）　瓦
軒丸瓦（新型式）　瓦当面／図 41-1

6．茶灰色土（R-004）　瓦
軒丸瓦　290B　瓦当面／図 43-6

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと 33
書名	大宰府条坊跡 33
副書名	第 249 次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第 92 集
編著者	伊藤敬太郎　岡めぐみ　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	太宰府市教育委員会・国際航業株式会社
所在地	太宰府市教育委員会　〒 818-0198　福岡県太宰府市観世音寺 1-1-1　TEL　092-921-2121 国際航業株式会社　〒 183-0057　東京都府中市晴見町 2-24-1　TEL　042-307-7500
発行年月日	2007（平成 19）年　3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	㎡	
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第 249 次	左郭 14 条 4 坊	太宰府市 朱雀２丁目	402214	210044	55591.000	−44444.000	20050725	20060110	250	共同住宅建設

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡　第 249 次	大宰府条坊	奈良　平安	瓦窯　灰原　炉跡 掘立柱建物　道路　土坑 小穴群	須恵器　土師器 瓦類　金属製品　石製品 鋳型　炉材　羽口	瓦窯検出 3 × 3 間総柱建物検出

太宰府市の文化財　第 92 集

大宰府条坊跡 33

－第 249 次調査－

平成 19 年 3 月

発行　　太宰府市教育委員会

〒 818-0198　太宰府市観世音寺 1-1-1

編集協力　国際航業株式会社

〒 183-0057　東京都府中市晴見町 2-24-1

〒 812-0013　福岡市博多区博多駅東 3-6-3

印刷　株式会社文化財情報研究所

〒 811-3177　古賀市今の庄 3-13-1